
僕達の惑星へようこそ

篠森京夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕達の惑星へようこそ

【Nコード】

N1609D

【作者名】

篠森京夜

【あらすじ】

いつものように『処刑』を終え、独り街を歩いていた夜。雨の中、僕は彼女に出会った。魔女の名を語る彼女との出会いが、この街に生きる僕達の運命を変えていく。『処刑』グループのリーダー、リョウの。『ビジネス』を営む女子高生、カナの。……そして、誰にも心を開けずにいた、僕の。

第一話「彼女の銃と僕のビデオカメラの話」 - 1

P M . 1 1 : 4 4

ビデオカメラのモニターの中で、おじさんの灰色のコートがはためいた。

何度も足をもつれさせながら、冷たいアスファルトの上を走っていく。

おじさんが街灯の下を通過する度、薄汚れたコートが奇妙に白くモニターに映った。

年齢は多分五十歳くらいだ。職業はサラリーマンだろうか？ 体格は貧弱で顔には皺が多く、頭髮もかなり薄い。僕らがおじさんについて知っているのはそれくらいであり……それ以上知る必要もないだろう。

ここは古びた工場脇の細い道路だ。何処までも続いていそうな灰色の塀の向こう側に、高い煙突が影絵のようなシルエットを浮かべている。

この工場は数年前に潰れてから取り壊されることもなく放置され、この時間帯に訪れる者などまずいない。もっとも、数十メートル先まで行けば小さな商店街がある。前方にぼやけて見える緑色の光は、まだ開いている店のネオンの光だろう。

もしもあそこに辿り着けたなら、このゲームはおじさんの勝ちだ。でも、辿り着けなかったら……。

おじさんの左側の闇から長身の男が身軽な動作で現れ、おじさんを追いついた。そして男は、サッカーボールでも蹴るようにおじさんの足を払った。

おじさんは咄嗟に避けようとしたようだが、バランスを崩して頭から地面に滑り込んだ。

地面に服が擦れる嫌な音と共に、小さな悲鳴が響く。おじさんは

受け身をとることもできず、傷めたらしい右腕を庇う形でうずくまった。

長身の男に続いて現れた数人の男達が、素早くおじさんを取り囲む。何処にでも見られるような服装だが、全員がマフラーやサングラスで顔を申し訳程度に隠している。

おじさんは地面に這いつくばりながらも明かりの方に進もうとしたが、男達の足が彼の進路を塞いだ。男達が楽しげにおじさんを蹴りつける。

最初におじさんの足を払った男が短く声を放った。男達が統制のとれた獵犬のように一斉に動きを止め、再度おじさんを囲む壁のようになり並ぶ。長身の男は走って乱れた長めの黒いコートを整えると、ビデオカメラを構えている僕の方を振り返り、髪をかき上げながら言った。

「ちゃんと撮ってるだろうな？ これからがいいところなんだからな」

「……ああ。ちゃんと撮ってるよ、リョウ」

僕はモニターから目を離して答えた。ずっとモニターからの映像に集中していたので距離感が狂い、地面が揺れる感じがする。

長身の男……神野涼は僕と同じ二十歳だ。

浅黒い肌に軽く脱色した長めの髪、それと両耳につけた銀色に輝く大きな逆十字のピアスが特徴的だ。顔立ちは彫りが深く、顎の辺りに生やしたヒゲが、その輪郭を更に強調している。切れ長な目から覗く黒い瞳は、猛獣のようでいて不思議な程に透き通っている。

リョウはビデオカメラに視線を向けながら、おじさんのそばへと進んだ。そして地面にうずくまっているおじさんの姿を一瞥するとアメリカのテレビ番組の司会者のように大袈裟な身ぶりで話し始めた。

「さて、皆さん」

たっぷりと余韻を残し、再び口を開く。

「これから、お楽しみ『処刑』の始まりです。ええっと、時間は

……」

「十二時十五分前」

薄明かりの下で腕時計の文字盤を見ようとしていたリヨウに代わって、僕はモニターのデジタル表示を読み上げた。

「ああ、時間は十一時四十五分だ」

リヨウは頷くと薄笑いを浮かべてこちらを見た。

彼はこの辺りではかなり名の通ったグループのリーダーだ。言わずと知れたことだが、その地位は彼自身の運動能力の高さとカリスマ、そして気に入らない者に対しては容赦なく拳を振るう暴力性によつて成り立っている。他の要因としては、彼がとある大手会社の社長の一人息子だというものもあるが。

更に言うと、彼は有名な私立大学の経済学部二年生で、クラブでDJをやっている。本人は将来役者になるつもりだと語っているが……まあ何にしても大学受験に二度も失敗し、既にやる気もない二十歳のしがない浪人生には関係のない話だ。

まだ現役の大学受験生だった頃、当時通っていた地元の予備校で僕はリヨウと知り合った。僕らの間にはまったくと言っていいほど共通点がなかったのだが、彼は僕のことを気に入ったらしい。二人の関係が今も続いているのがいい証拠だろう。

しかし、僕は未だにリヨウとの関係が続いていることを不思議に思う。さっきの時刻のことにしても、他の誰かが同じことをすれば、殴られはしないまでも雰囲気は悪くなったはずだ。

勿論僕にしても完全に対等というわけではない。もし僕が不用意に彼の領域に踏み込めば、二人の関係はすぐさま崩壊するだろう。僕らの関係は常にリヨウの方が強者であり、僕は無礼講の許された道化に過ぎない。

もつとも、僕がその辺りのことを理解しているからこそ、彼は僕のことを気に入っているのかもしれないが。

「さて、今日の獲物は……」

リヨウは右手の人指し指を立てて、おじさんを上から覗き込んだ。

おじさんは大きく息をつきながら怯えた目でリヨウを見上げた。かなり薄くなつた白髪が、汗ばんだこめかみにへばりついている。

「た、助けてくれ……」

おじさんが掠れた声で呟いた時、リヨウの瞳に一瞬危険な色が浮かんだ。

次の瞬間、リヨウの黒革のブーツがおじさんの腹部にめり込み、おじさんの体が跳ね上がった。

おじさんは腹を押さえながら地面に這いつくばった。大きく開かれた口からは叫び声の代わりに不透明な胃液が吐き出されている。リヨウは引き攣つた薄笑いを浮かべ、おじさんの懷から抜き取った定期入れを開いた。

「ええと、なにに？ 田島亮介、五十三歳……係長………最悪だな」

リヨウは定期入れを指の間で弄んで眺めていたが、ふと何かに気づいて目を止めた。

途端、リヨウは何か嫌な物でも見たかのように定期入れを投げ捨てた。定期入れは地面を転がって僕のそばで止まり、汚れた表面を見せた。

「さあ、始めようか？」

一瞬浮かんだ表情の乱れを打ち消すかのように、リヨウは気取った仕草で彼の忠実なる部下達の方に手を振った。

「……どうして？」

男達と共におじさんの周りを取り囲もうとしていたリヨウが、驚いたように振り向く。不意をつかれたせいか今度は薄笑いを浮かべておらず、その貫くような攻撃的な視線のみが残っていた。

「……何だって？」

明らかに不機嫌な声で、リヨウが尋ね返す。

まずかった。今の質問は明らかに彼の不文律を乱すものだった。

「いや……つまり……ちゃんと『理由』つてもものも言っておいた方がいいんじゃないかってね。ほら、何故処刑をするのかってさ。」

『パルプフィクション』のサミュエル・L・ジャクソンみたいにね……」

しどろもどろの弁解だったが、リヨウは機嫌を直したようだ。僕はモニターの上に再び彼の薄笑いが浮かんだので安心した。それにしても、何故僕は彼の行動の理由など聞きたくなっただろう？

リヨウは再び司会者の雰囲気を纏うと、そばにいた年下の男に尋ねた。

「どうしてだと思う？ どうしてこいつを処刑するんだ？」

年下の男はジンと言って高校を出たばかりのフリーターだ。ピンク色の短い髪と黄色のダウンジャケットが夜でも目立つ。彼はリヨウの右腕的存在で、いつも行動を共にしているのだ。そして僕に対しては最も態度が厳しい。

ジンは不意の質問に戸惑ったようだが、僕の方を見るとあからさまに敵意のこもった表情を浮かべて吐き捨てた。

「決まってるだろ。こいつが間抜け面して歩いてたからだ。俺はこういう死にかけの奴が大嫌いなんだ！……わかったか？」

ジンは御丁寧な僕の目の前まで近づいて来て、ビデオカメラのレンズを覗き込む形で最後の台詞を言い放った。脂分の多い肌がモニターいっぱいに映り、剥き出しの敵意が肌に伝わってくる。

同じグループの仲間だとは言っても、僕はジンのような連中は嫌いだ。勿論彼らにしても、僕のような人間がいるのは不愉快だろうが。

ジンの暴力的な視線がモニターを通して僕の目に届く。直接見ればこの視線に勝てるはずもないのだが、モニターを通して見ると不思議とテレビで猛獣でも見ているような気分になってくる。

僕に屈服した様子がなかったからだろう、ジンはまだ何か言いたげだったが、リヨウに呼ばれて忌々しそうに僕を見ながら元の位置に戻った。

リヨウは右手の人指し指を僕の方に突き出した。

「わかったか？ こいつらはいらただけで俺達の街を汚しているんだ。つまり蠅やゴキブリと同じだ。ゴキブリを潰して罪になるか？ いやならないね、ゴキブリがいると不潔だし不快だ。だから潰す…衛生学の基本ってやつだ」

同じ指に弾かれた逆十字のピアスが、澄んだ金属音を響かせる。リヨウは満足げに頷くと僕に背を向けた。

……道化とのお喋りの時間は終わり、ということか。

おじさんの周りでは、王様の許可を得ずに、彼の兵隊達が処刑を始めていた。

『一般的に個人の嫌う物を見れば、その個人がどのような嗜好や性格、又は生活状態であるのかを判断できる。ただしここで問題なのは、その物が直接的に個人に危害を与えるのではなく、個人の恐怖の象徴である場合があることである』

これは心理学の基本というやつだ。簡単に例を挙げると、円形の物が嫌いな人間は、円形の物そのものが恐いのではなく、円形に開いた井戸に落ちたことがある等の過去の経験が恐いのだ。この場合、円形は痛みや孤独、暗闇に対する恐怖の象徴ということになる。勿論、そんなに単純な話は稀だが。

ゴキブリや蠅は確かに伝染病などの恐怖の象徴だ。では五十三歳のサラリーマンは、街の王様にとって何の恐怖の象徴なのだろうか？ 二度目の受験に失敗した僕がリヨウと再会したのは半年前のことだ。

その頃、僕は親元を離れてこの町の予備校に通っていた。僕は昔から社交的なことが嫌いで、その時もまったく知り合いというものはいなかった。

いや、作らなかったと言った方が正しいかもしれない。

しかしそれでも限度というものがある。流石に孤独感に悩まされ始めた頃、僕は街で偶然リヨウと再会した。

どうしてリヨウが予備校で数回会っただけの僕を覚えていたのかはわからない。しかし不思議なことに、僕らの関係は続いた。数カ月後、僕は彼から『処刑』の話を持ちかけられることになった。

処刑は続いた。

おじさんは見るも無惨な姿となっており、ほとんど意識もないようだ。リヨウはおじさんの襟元をつかむと、顔の近くに引き寄せた。「おじさん。俺のことが恐いかい？ ……それとも憎いかい？」おじさんの小さく開いた口から、わずかな言葉が漏れた。

「……家に……帰して……くれ………」

リヨウが無言のまま手を放し、おじさんが再度地面に突つ伏す。リヨウは軽いため息をつく、僕の方を見て……少し微笑んだ。

リヨウは時々、僕に向かって奇妙な笑みを浮かべる。まるでこれから悪戯をしようとしている子供みたいに……。

リヨウはコートのポケットから無造作に短い棒状の物を出すと、それを軽く振った。

ガチャリという金属音と共に、青白く光るナイフの刃が彼の手の中出现する。あれはリヨウがいつも持っている外国製のナイフで、彼が骨董品屋で見つけたという代物だ。骨董品と言っても、時の流れを感じさせないほどに抜群の切れ味を誇るナイフだ。現にリヨウは一度、対抗するグループのリーダーの腕をあれて切り裂いたことがある。

彼はナイフを軽く弄ぶと、いきなりおじさんに突きつけた。

「ちょっと待て！ 殺すのはまず……！」

僕は反射的に叫び、ビデオカメラのモニターから目を離れた。ナイフはおじさんの首の直前で止まっていた。おじさんが今にも気絶しそうな表情で目の前の刃を見つめている。

「……やるわけないだろ？ 何びびってるんだよ」

リヨウは器用にナイフを一回転させて刃をしまい、立ち上がった。

ジンが安堵とも笑い声とも判断のつかない短い息を吐く。

リヨウはナイフをポケットに入れると、僕の方を見て言った。

「こんなことでびびってるようじゃ、お前もこいつと同じ腰抜けだ。……こいつとな！」

振り上げられたリヨウの足が、大きな弧を描いておじさんの腹部に直撃した。おじさんは大きな布の塊のように転がると、道の端で動かなくなった。

取り巻きの中から低い感嘆の声が上がる。

リヨウは面白くなさそうに周りを見回すと、短く処刑の終了を告げた。

取り巻きの男達は皆、冷めやらぬ興奮に身を包みながら、緑の光溢れる商店街の方に歩き出した。商店街までは数十メートル……あそこまで行けば皆、常識の世界に戻る。

あの中に入れば、僕達は一応の秩序を纏って生活することになる。少なくとも人に暴力を振るえば咎められる世界。しかしここは闇の世界との境界だ。一度こちら側に入ってしまうえば、この世界の支配者が秩序を決めることになる。

リヨウは僕の肩に手を置いて耳元で囁いた。

「いいか？ 一人だけいい子になろうとしてるんじゃないぞ……見ているお前だって同罪なんだ。くだらない常識なんかここでは何の役にも立ちはしない。ただ喰うか喰われるかだ。お前は頭がいいんだ、そこら辺のことはわかって来ているだろう？ この世界を楽しめよ。みんなやってるんだ……」

そして彼は忠実な部下であるジンの所に行きながら言った。

「ビデオは明日までに編集しておいてくれ、夜の九時から『スケアクロウ』だ……遅れるなよ」

リヨウは僕にビデオで撮るように言うと、歩きながら大袈裟な身ぶりで叫んだ。

「それでは皆様、また明日御会いしましょう！ See you tomorrow！」

モニターの中の彼の姿が、黒いコートと一体となって大きく揺れる。

最後の台詞を言い終えると、リヨウは少し照れ臭そうに微笑んで僕に手を振り、ジンと共に闇の中に消えた。

リヨウが消えたのを見計らい、僕は足元の定期入れを拾って中を開けた。

それは確かに何の変哲もない、ただの古ぼけた黒皮の定期入れだった。ただ、その内側には小学校高学年くらいの女の子……鼻筋がおじさんにそっくりだ……と、その横で恥ずかしげに微笑むおじさんのピンク色のプリクラが貼ってあった。

……どうやらこれは、編集ではカットしておいた方がいいものらしい。

僕は定期入れを持ったまま、おじさんのそばに近づいた。おじさんは気を失っているようだが、幸いかわらうじて呼吸は続いていた。

僕は定期入れをおじさんのそばに置くと、ポケットから携帯電話を出した。

そんなことをしてもお前だって同罪だ。

頭の中でリヨウの声が響く。

「……わかってるよ、そんなこと……」

呟き、僕はビデオの電源を切ると、携帯電話の番号ボタンを三回押した。

第一話「彼女の銃と僕のビデオカメラの話」 - 2

P M . 0 : 5 5

さっきまで勢いよく降っていた雨が、少し小降りになった。

絶えず生まれ続ける水滴が、一瞬のためらいを見せた後、呆気なく落ちる。そして小さな波紋を起こし、また大きな流れに飲み込まれていく。僕はコンビニの前にしゃがみ込み、突き出した屋根の縁から落ち続ける水滴を眺めていた。

あの後、救急車が来るのを見届けてから一人で街を歩いていた僕は、雨が降り出したのでここで雨が止むのを待つことにした。雨が降っているせいかコンビニに客の姿はなく、店員も奥に引っ込んでしまっていた。道路にも人の姿は見えず、時折車が目の前を通り過ぎていく。僕はもう一度辺りに人がいないのを確かめると、ビデオカメラの電源を入れた。

僕は昔からカメラマンになりたかった。

何故かと言われると答えられないが、昔から見られるよりは見る側の人間だったことは確かだ。実際、リヨウにカメラマンを頼まれた時は、『処刑』に参加しなくていいという安堵と共に、ビデオカメラが使えるということに少し……いや、かなり心が動いた。

リヨウの言う通り僕だって同罪だ。

モニターにはさっきの処刑の様子が映っていた。地面に転がるおじさんと、それをまるで人間ではない何かのように痛めつけているリヨウ達……さっきまで本当に体験していたことなのに、モニターを通して見ると遠い国の出来事のように見える。

しかし、やがてさっきの嫌な感じが映像から解凍されて伝わってきたので、僕は電源スイッチに指を伸ばした。

このビデオカメラは決して楽な生活を送っているわけではない僕が、バイト代を使い果たして衝動的に買った唯一の物だ。僕にとっ

てビデオカメラは世界から僕を守る防波堤であり、また僕を世界に
つなげる唯一の目だ。この手のひらに収まる小さなレンズとフィル
ムの固まりによって、僕は『見る側』の位置を保っている。

だからこのレンズに映るものは、リヨウだろうとおじさんだろう
と……道行く他人も落ちている空き缶も、僕にとっては『被写体』
であり僕とは違う世界の存在となるのだ。

僕はモニターの再生映像を消すと、録画することなしに周りの風
景をモニター越しに見つめ始めた。

……と、雨が上がり、雲の隙間から丸い月が覗いた。

月の光は薄くかかった雲をくすんだ虹色に染め、アスファルトを
白く輝く波のない海へと変えた。その上を、苛立つ心を抱えた人々
を乗せた車が、オレンジと黄色のライトの尾をはためかせながら滑
っていく。

その時、不意にモニターの画像が乱れ、ブラックアウトした。

僕は反射的にモニターから目を放してビデオカメラをチェックし
た。浅ましいようだが、使い慣れた物が壊れるのは自分の一部がな
くなったようで嫌なものだ。それに……これは高かったのだ。

ところがレンズを地面に向けた途端、モニターに光が戻った。

「……あれ？」

確かに元に戻ったのは嬉しいが、やはり異常があるかもしれない。
僕はもう一度周りを撮ってみることにした。

コンビニの明かり、その前のゴミ箱、駐車場の白線、歩道脇の街
路樹、ガードレール、遠くの信号、砂漠の嵐……あれ？

道路の方にビデオカメラを向けた僕は、また画像が乱れたので眉
をひそめた。

そう言えば、さっきもこっちにビデオカメラを向けた時に画面が
乱れたのだ。ということは、この方向に異常の原因がある……とい
うことになるのだろうか……？

およそ結論とはいえない難い結論に達し、モニターから目を離れた僕
は、意外なものを見ることになった。

そこには女がいた。

……女がいたのだ。

ただ……少し変わっていた。

女はかなりの長身で、長い黒髪が更にその長身を際立たせていた。月の光に遮られて顔立ちははっきりしないが、輪郭は白く輝き、痩せた体つきで手足は長い。この時期、夜はもう寒いというのに、赤い薄手のワンピースの上から大きめの薄汚れたコートを羽織っているだけの服装だ。

まだ雨は霧雨となつて少し降っていたが、女は雨よけの物は一切持っていなかった。いや、それどころか雨のことなどまったく気にしていないようだ。何故か素足で、肩にかけた手には赤いサンダルがぶら下がっている。

女は濡れた黒髪を額からかき上げ、水滴を払い除けた。そして僕の視線に気づいたのか、目線をこちらに向けた。

僕はその情景の異常さと……美しさに魅せられていた。しかし女と目が合ったので、少し焦ってしまった。

見るということは、その対象と同じ条件の情報の世界を共有するということである。言い換えれば、同じ遊戯盤の上にいるということだ。だから特殊な機具（望遠鏡や写真機、ビデオカメラなど）を用いない限り、見る側と見られる側の立場は常に変化する可能性がある。ボールの位置で攻撃する者と防御する者が変化するドッジボールのように、見る側は常に見られる側になる危険性があるのだ。

そして僕は見られるのが好きではない。特に女性には……。

女は僕の思惑などおかまいなしに、こちらに向かって歩いて来た。黙ったままの僕の前を通り、雨のかからない場所に入る。そして小さくため息をつく、体を曲げて手にしたサンダルを地面に放り投げ、僕の隣に座り込んだ。

顔はうつむき、体に張りついた長い髪から雫が絶えず落ちている。

間近で見ると肌がなめらかな褐色であることに僕は気づいた。

「……濡れてるけど、寒く……ない？」

「……………別に……………」

やはり何か話しかけるべきだろうと思って考えた質問に、女は簡潔に答えた。

低い囁くような声で、少し背筋を撫で上げられたような気がした。

「……ああ、そう……………それは良かった」

それだけ言うと、僕は黙り込んだ。ここまで不愛想に反応されると、どう続けていいのかわからない。

その時、不意に女がこちらに顔を向け、微笑んだ。

間近で見る女の顔はとても美しかった。少し面長な顔立ちに、切れ長で大きな……ネコのような目が輝き、眉は黒く弧を描いている。鼻筋は整い、その下の唇には寒さの為か血の気がなかったが、それが却って彼女の美しさを際立たせている。

僕は微笑みの意味をつかみかねて……またその美しさに心奪われて、しばらくの間少しも動けなかった。女は僕のそんな様子を見てもう一度小さく微笑むと、顔を戻した。

それと同時に我に返った僕は、自分がかなりみつともない表情であつたことに気づき、今更ながら焦った。

「靴。どうしたの？」

僕の問いに、女はこちらに顔を向けることなしに、地面に転がったサンダルを指差した。そのサンダルはヒールが高い物だったが、片方のヒールが折れていた。

成程……いや、納得している場合ではない。

「何処から来たの？」

僕が続けた質問に女は面倒そうに答えた。

「西から……………」

「……………何処に行くの？」

「東へ……………」

「……………そう」

ダメだ、会話のきつかけがつかめない。

しかし沈黙を苦痛としているのは僕だけのようで、彼女は僕の存在を忘れたように体に張りついたワンピースを触っている。ワンピースは上に着ている古い……おそらくは男物のコートとは違い、かなり高価そうな物だ。東洋風の細かな模様が刺繍されている。コートに隠れていて見えないが、多分、形としては袖がなくキャミソールみたいな肩紐でとめるタイプだろう。

と想像していたら、彼女がコートを脱いだので、いきなり褐色の肌の肩と背中の上部が露になった。僕は慌てて視線を逸らした。女は立ち上がるとコートを叩いて水気を切り始めた。

何をやってるんだか、僕は。

ふと自分の行動が可笑しく思えた。僕と彼女は初対面で、たまたま同じ場所にいるだけだ。彼女のように互いを無視しても悪いことではないし、無理に会話をするともない、双方が迷惑でない距離を取ることができればそれでいいはずだ。

どうも僕は他人との距離を取るのが下手だ。

自分が何を他人に求めているのか自分でもよくわからないのだ。まったく人とコミュニケーションできないのは恐ろしく嫌だし……でも、人が自分に近づくと拒絶してしまう。

時々、自分は本当に人との繋がりを求めているのか、と疑問に思ってしまう。

やがて、雨が完全にあがった。空は闇と言うより深い青に近く、月は雨で洗い流されたかのように透明な光を放っている。

「……月が、綺麗なな」

僕は特に誰に言うつもりもなく呟いた。

「そうね。綺麗な月……」

驚いたことに、女が返事をした。コートを腕にかけて空を見上げる彼女の背中で、まだ乾き切っていない黒髪が月の光を浴びて淡く輝いている。

「アタシ、今日何処で寝るか考えてたんだけど……決めたわ」

女は淡々とした口調で呟き、僕を見てからかうように微笑んだ。

「貴方の家に泊まるわ」

「……………え？」

『え』と言うよりは『へ』に近かっただろう、間の抜けた声で僕は聞き返していた。

「だから、貴方の家に行くって言ってるのよ。もしかして家がないの？」

「……………いや、あるけど……………」

「ならいいじゃない」

「……………ちよ、ちよっと待つてよ」

僕は混乱した頭で考えながら言った。自分でも声が上ずっているのが情けない。

「それはつまり……………僕と寝たいってこと？」

「別に貴方と寝る必要はないわ……………それに」

女はコンビニの硝子窓にもたれかかり、僕から見て向こう側の脚を上げると、指をワンピースの裾にかけて少し捲り上げた。彼女の美しい太ももが、月の光の下に露になる。

次の瞬間、彼女の目が冷たく光った。

「アタシは穩便に話を進めたいの」

彼女の太ももの内側には、革のバンドで何かが括りつけられていた。

それはどうやら何か黒い金属の物体と、そのホルダーで……………そしてその金属の物体は……………どう見ても小型の拳銃だった。

彼女は鮮やかな手つきで銃を引き抜くと、折り畳んであつた銃身を伸ばして僕に突きつけた。

「……………さあ、案内してくれる？」

女が相変わらずの低い声で囁く。

銃の銃口は丸くて黒く、その奥は見えなかった。視線をずらすと銃口の向こう側に女の黒い瞳が光っていた。

「これ……………本物？」

「試してみる？」

彼女の申し出は僕によって丁重に却下された。それに何と云うか、彼女の乱雑な銃の扱い方や持ち方に不思議な真実味があったのだ。

「……わかった……案内する」

僕は顔の前に突きつけられた黒い銃身を見ながら呟いた。こんな状況なのに、頭の中は妙に落ち着いている。いや、正確には、僕はこの状況を完璧に把握できていなかった。まるで夢の中にいるような曖昧な感覚が全身を覆っている。

女は僕の返事を聞くと、銃を構える手を降ろした。

近くにはコンビ二の入り口があった。走れば数秒で中に逃げ込めるんじゃないかと思ったが、中で二人の店員が雑誌を見ながら笑っていたので、僕はその考えを却下した。

別に人道的立場から考えたわけじゃない。すぐに追いつかれるだろうと思ったのだ。それに突然「銃を持った女に追われてるんだ、助けてくれ！」などと言ったところで信じてくれるかどうか……少なくとも僕なら信じない。

顔を戻すと、女は楽しそうな微笑みを浮かべながら僕を眺めていた。

「……ところでさ……」

僕はビデオを持ち上げて言った。

「これで君を映そうとしたら動かなくなっただ。どうしてかな？」

女は銃口でこめかみを搔くと、少し申し訳なさそうな顔をした。

「ああ、それアタシのせいね。そういう体質なのよ。心配しないでいいよ、アタシ以外はちゃんと映るから」

「……何なんだ、それは？」

僕はビデオの電源を切り、レンズを彼女に向けた。

「それじゃあ、もう一つ質問してもいいかな？ ……名前は？」

「……ドロシー……」

第一話「彼女の銃と僕のビデオカメラの話」 - 3

AM

夢を見た。

夢の中で僕は、曇った暗い空の下、砂漠をさまよっていた。

地面には細かい砂が風によって波状の模様を作り、それは徐々に大きなうねりとなっていた。そしてそれは、地平線の彼方まで続いていた。

砂は柔らかく、一歩ごとにくるぶしの上まで足が埋まる。僕は何かに追われるように、必死になって進んでいた。

不意に足下の感覚が変わり、僕はアスファルトの上に立っていた。周りを見回すと、そこは無人の遊園地の中だった。

時刻は夕方だろうか？ 青く曇った空の下、色とりどりの電飾をつけた無人のアトラクションが、賑やかな音楽と共に動いている。

僕が遊園地の中を進んで行くと、大きなメリーゴーラウンドがあった。暗い遊園地の中で一際明るい光を放ち、カラフルな木馬や馬車がゆつくりと回転している。

僕が周りの鉄製の柵に手をかけて眺めると、ちょうど僕の前を赤い目をしたピンク色の木馬が通り過ぎていくところだった。

何か嫌な感じがする。早くここから逃げださなければ……僕は何かかそう思った。

その時、高らかに電子音のラッパが吹き鳴らされ、木馬の回転するスピードが一斉に速くなった。

僕が驚いて辺りを見回すと、メリーゴーラウンドの向こう側から人の乗った木馬が現れた。空色の角を生やした白馬……その上に乗っていたのは、薄汚れたコートを纏い、頭から血を流した、あのおじさんだった。

おじさんの禿げかけた白髪が強い光を浴びて更に白く輝き、こめ

かみから流れた血は、そこだけ強調されたように赤かった。

おじさんは流れる血にかまうことなく僕を見ると、楽しそうに笑い手を振った。

僕の心臓の動悸が激しくなり、背筋に汗が流れるのが感じられた。そして逃げ出したい欲求は更に強くなった。

しかしおじさんは僕とは対称的に、本当に楽し気に手を降って笑いかけている……僕は反射的に柵を握り締めていた手を放し、おじさんに手を振った。

……しなければ殺されそうな気がした。

おじさんは僕が手を振ったのを見て嬉しそうに微笑むと、木馬から両手を放し、深呼吸でもするように体を反らして、僕の前を通過して行った。

僕は泣きなくなっていた。しかしどういうわけか、逃げ出そうとしても足はその場所から動こうとしない。

逃げ出さなければ！　ここから早く！

僕が両手で柵をつかみ体を動かそうとしている間に、おじさんの乗った木馬は視界の向こう側に消えた。

多分、おじさんはもう少しで反対側から出て来て、もう一度僕に手を振るだろう。

そうしたら、僕はもう一度手を振り返さなければいけないのだろうか？

それは嫌だ、早くここから逃げ出さなければ！

「畜生、あの時助けるんじゃないかった！　あんな奴……やっぱり死ねばよかったんだ！」

僕は柵をつかむ手に力を込めながら叫んだ。

途端、僕は世界崩壊の序曲にも似た振動に襲われ、辺りが真っ暗になった。頭の中を滅茶苦茶に掻き乱されるような感覚と共に、目の前の映像が凄まじい速さで変わっていく。

目が覚める瞬間、水浸しの部屋の中に立つ髪の長い女の姿が見え

た。部屋は暗く、天井からは滝のように水が流れ落ちている。
女は腰まで水につかりながら両腕を広げていた。

AM・10:15

目を開けると天井が見えた。

僕の部屋の天井はだいぶ痛んできている。天井にはヒビが入っており、まるで切れ長な魔女の目のようだ。

壁の時計は十時半を示している。あの時計は確か十五分くらい進んでいたはずだから、今は十時十五分か……。

僕を起こしたのは携帯電話のバイブレーションだった。僕はソファーに寝たまま腕を伸ばし、机の上で踊っている携帯電話を取った。電話はリヨウからだった。

『何だよ、寝てたのか？』

どうも寝ぼけた声を出してしまったらしい。僕はさっきの夢の内容を思い出しながらその通りだと答えた。

『いつまでも寝ぼけてるんじゃないぞ、俺なんか……』

その時電話の向こう側で、女の甘える声と、それを追い払うリヨウの声が聞こえた。

「……女がいるのかい？」

『ん？ ああ、まあな』

リヨウの話によると、昨夜あの後二人組の女の知り合いと会ったので、二人とも部屋に連れ込んだらしい。

「寝たの？」

僕の質問にリヨウが苦笑した。

『当たり前だろ？ 何言ってるんだよ、女が部屋に泊まりたいって言ってるんだ、やるに決まってるじゃないか』

僕はソファーに座り直すと少し考えてから返事をした。

「……ああ、そうだよ……うん、僕もそう思うよ」

リヨウは僕の口調の変化にはかまわず続けた。

『ところで、アユミとはどうなったんだ？』

その名前を聞いた途端、携帯を握る僕の手の力が強くなった。

……あの女……か。

「どうって……どうにもなってない。あれっきりだよ」

自分でも声に力がないのがわかる。

『何だ、そうなのか』

リヨウは教師が物わかりの悪い生徒に話すように続けた。

『お前さあ、何を恐がってるんだよ。やりたいようにやればいいじゃないか、お前は遠慮し過ぎるんだ。そんなことじゃ……』

「うるさいな、放っておいてくれよ！」

受話器の向こう側で、リヨウが驚いたように息を呑む。

……しまった。

僕は一瞬ひどく後悔したが、

『悪い悪い、そんなに怒るなよ……』ところで、昨日のことなんだが』

僕は思わず安堵のため息をつきそうになった。どうやら彼の怒りには触れなかったらしい。

リヨウの持ち出した話題は、昨夜の処刑のことだった。

『あのオヤジ、死んだかな？』

リヨウは天気の話でもするかのように軽く話した。

「……さあ、どうだろうね？ ……でも死んだらまずいよね」

僕は慎重に言葉を選んだ。

すると、リヨウは意外なことを言った。

『死んじやいないよ、誰かさんが救急車なんか呼んだからな』

「……知ってたのか」

『ああ、今朝ジンに見に行かせた。あいつ怒ってたぜ、あのオヤジが俺達のことを話したらどうするんだってな』

黙ってしまった僕をからかうようにリヨウが続けた。

『人道的処置ってやつだな。まあ今回は大目に見てやるよ。だがジンに殺されなくなったら、そういうことはやめるんだな』

電話の向こうで女が呼んだらしくリヨウが動くのが感じ取れた。

『くだらないな、あんな奴生きて何になるんだ。ああ、心配するなアイツは訴えたりなんかしないさ、そんな勇気もない負け犬だ。もし警察が動いても……親父が揉み消すさ』

台詞の最後の部分を、リヨウは吐き捨てるように呟いた。

女の声が更に大きくなった。かん高い笑い声が転げ回る。どうやらリヨウも移動しているらしい。リヨウの演説は続いた。

『この世の中には無駄な人間が多過ぎるんだよ。結局世の中弱肉強食で動いているんだ、だから弱い人間は何をされても文句を言えやしないのさ』

受話器からシャワーの音が聞こえてきた。

『どうして人を殺しちゃいけないんだ？俺達は都会に生きる獣だ、自由に生きて自由にやるんだ……そして羊には羊の役割がある。お前だってジンギスカンになりたくはないだろう？』

リヨウがシャワーの中に入ったらしく声が聞き取りにくくなった。しかし次のリヨウの台詞は、低い声で呟いたにも関わらず、はっきりと聞き取れた。

『俺に従え、それが生きる道だぜ』

……電話が切れた。

僕は再びソファーに寝転がった。窓の外の太陽が眩しい。

リヨウの言うことももっともだ。どんなに綺麗事を言っても、今の世の中正しいことが必ずしもうまくいくわけではない。

そして僕にも欲望はある。

僕は天井を眺めながらしばらく物思いに耽り、やがて立ち上がった。

僕の下宿先は昨夜のコンビニから少し離れたワンルームマンションだ。お世辞にも広いとは言いがたい部屋のほとんどを、ベッドとソファーと机と椅子が占領している。

壁には趣味で買ってきた絵葉書や自分で撮った写真が何枚か張られているが、それ以外はガランとした部屋だ。

……ただし、今朝はいつもと違うものがあつた。

僕はベッドの前に立って、それを見下ろした。

ベッドには、あのドロシーと名乗った女がいた。僕の方に顔を向ける形で、毛布にくるまって眠っている。寝相は悪く、長い脚はほとんど剥き出しだ。僕はベッドの脇に身を屈め、彼女の寝顔を覗き込んだ。

昨夜、僕に案内されてこの部屋に入った彼女は、さっさとベッドを占拠して眠ってしまった。

勿論何もなしだ。僕もソファアに座っている間に眠ってしまったらしい。リヨウが聞いたなら何と言うだろう？

……そうだね、リヨウ。僕もそう思うよ。

ドロシーの寝顔は意外とあどけなく、小さく開いた唇の隙間から微かな寝息をもらしている。僕は音をたてないよう、慎重に彼女の下半身の方へと移動した。

ドロシーの褐色の脚は朝日を浴びて鈍く輝き、白いシーツの上になまめかしい曲線を描いている。

ワンピースはハンガーにかかったままだ。

僕は一瞬ためらった後、意を決してドロシーのなめらかな右脚に指を這わせ、毛布に隠れた部分へと指を滑り込ませた。

舌の表面が痛いくらいに乾いている。と、

「……おはよう」

明らかに寝起きのものとは思えない、はつきりとした声と共に、僕の頭に銃が突きつけられた。

「何してたの？」

ドロシーは慌てて指を引っ込めた僕を見ながら上半身を起こした。勿論、銃は依然として僕に向いたままだ。

「……ああ、これを探してたの？」

僕が銃を見つめているので、ドロシーは銃を軽く持ち上げた。

「寝る時は枕の下よ……貴方みたいな人もいるしね」

それからドロシーは毛布を手際よく体に巻きつけベッドから降りた。一瞬、毛布の隙間から褐色の背中と白い下着が覗け、僕の動悸が激しくなった。

ドロシーはそんな僕を横目で見ると鼻で軽く笑ってからかうように言った。

「それとも違う物を探してたの？」

つくづく勘に触る女だ。僕は平静を装いながら返事をした。

「まさか。何で君なんかに……」

「へえ、傷つくなあ……アタシってそんなに魅力ない？」

ドロシーは無断でキッチンの冷蔵庫の中を物色しながら言った。

「そういう台詞は冷蔵庫を開ける前に言ってほしいね」

「ゴメンゴメン。ところでこれ食べていい？」

ドロシーは少しバツの悪そうな顔で振り返ると、手にしたパンの袋を振った。

ドロシーはよく食べた。

僕の部屋の机は脚の長い大きめの机で、椅子も二つついている。はつきり言って一人暮らしの狭い部屋には不釣り合いな物だ。

しかし、やはり今朝はいつもと違う。

普段はガランとしている机の上は、大量の食べ物と食器と、そしてインスタント食品のパックに占拠されていた。

「……君は何者だ？ どうして銃なんか持ってるんだよ」

僕は目の前の不格好な目玉焼きを見ながら呟いた。

テレビをつけてみたが、銃を持った女がうつろっているなんてニュースはやっていなかった。

……少年達による暴力事件もだ。

代わりにアメリカで起きた爆破事件の速報が流れていた。

ドロシーは二枚目のトーストにこれでもかと言つくらいにイチゴジャムを塗りつけると、

僕に朝食は摂らないのかと尋ねた。

「食べない……いやそうじゃなくて質問に答えてくれ」

ドロシーは楽しげに笑うと、トーストを食いちぎった。

「さあね、何でしょう？ ……もしかして魔女だったりしてね」

ダメだ、答える気がまったくくない。

僕は机の上を軽く叩きながらできる限り嫌味っぽく言った。

「僕の友人が話してたよ、もし女が来て部屋に泊めてくれと言ったら普通は寝るものだって」

ドロシーは目玉焼きの皿に手を伸ばすと、ナイフとフォークで器用に切り分けながら言った。

「それはそいつが今までに寝た女の話でしょ？ アタシはアタシよ」

「それはそうだけど」

銀色のフォークがタンポポ色の黄身の膜を突き破り、半熟の黄身がドロリと流れ出す。

「それにさあ、貴方……なんて言うかあまり性的な魅力を感じないタイプだしね。色も白いし、顔も可愛いし……」

ドンッ！

卓の上に乗っていたジャムの瓶が、衝撃でひっくり返り床に落ちた。ドロシーが撲たれた猫のように硬直し、神妙な顔をして素直に謝る。

「悪いこと言ったみたいね……ごめん、謝るわ」

「……いいや、気にしなくていいよ」

僕は痛む手を摩りながら呟いた。

ドロシーは食事を終わると、ハンガーにかけてあったワンピースを取って着替え始めた。頭からスッポリと被り、皺を気にしながら背中のボタンを留めていく。

時々、自分でも自分の感情が抑えきれなくなる時がある。最近の言葉を借りると『キレる』というヤツだろうか……だが僕のそれは、ジン達のそれとはまったく違うもののような気がする。

まるで自分の中に、自分とは違う化け物が住んでいるような……ふと、僕は机の上にドロシーの銃が置いてあるのに気がつい

た。

テレビでよく見るリボルバーで、昨日はやけに長く見えた銃身にはどうやら消音機がついているらしい。こぼれた卵の黄身とトーストの屑の横で朝日を浴びて黒く光っている。

「これが安全装置だっけ？ …… これでいいのかな？」

振り向いたドロシーは、僕が銃を構えているのを見てもそれほど驚かなかった。それどころか軽く微笑むと、顔を戻して背中最後のボタンを留め始めた。

つけっぱなしのテレビでは昔風の刑事ドラマが流れていた。犯人は人質を取り、銃を片手に立てこもっているようだ。

「手を挙げる。おとなしくすれば命だけは助けてやる」

登場人物の台詞に合わせて、僕はドロシーに銃口を向けた。

しかしドロシーは気にする様子もなく、ボタンを留め終わると僕の方に視線を向けた。彼女の黒い瞳がまっすぐに僕を見つめている。

『生物界では基本的に優れた能力を持つ個体が生殖し子孫を残すことができる。しかし人間の場合、それは更に複雑な条件を持つことになる』

僕は銃を構えたまま何かの文章を思い出した。そうだ、この前の模擬試験の問題文だ。

ドロシーは銃を気にする様子もなく歩いてくる。相変わらず僕をまっすぐに見据えたままだ……瞳は冷たく透き通っている。

僕はグリップを持つ手に力を込めた。

『……人間とは文化を持った生物である。その為生殖の条件は運動能力や身体的な条件のみではなく、経済的能力や、社会的な地位も有効な条件となる……』

ドロシーの歩みは止まらず、僕らの距離はほんの一メートル程度

となった。この距離だったら幾ら素人の僕でも外すことはないだろう。

『……また文明の発達に伴う様々な武器の開発は、運動能力のない者でも能力に優れた者に対して勝つ可能性を高めることになった。そしてそれは銃器の発達によって一層大きくなってきている……』

ついに僕と彼女との間に残された空間は、手を伸ばせば届くほどのものとなった。

僕は彼女の視線を感じながらもそれを無視した。僕の視界にはドロシーのほっそりとした下半身のみが見えている。

「……ひざまずけよ……命乞いをしろ……僕の方が強いんだぞ……」
僕はドロシーの下腹部に銃口を押しつけた。彼女の弾力が銃を通じて伝わってくる。

「それを返して。お願い」

頭の上から穏やかなドロシーの声が聞こえた。

見上げると、そこには穏やかな黒い瞳があった。

僕は駄々をこねるような気持ちで彼女を見つめていたが、不意に体から力が抜けた。

「……わかった……返すよ」

僕の手から銃が奪われ、頭の中が真っ白になった。

テレビの中では、立てこもった犯人が刑事役の主人公に射殺されていた。

AM・11:25

「出かけようか？」

太ももに銃を縛りつけながら、ドロシーが言った。

「……何処へ？」

僕が力なく尋ねると、ドロシーは玄関に干してあったコートを抱

えて振り返った。

「そうね、とりあえず靴を買いに行こうかなって思ってるんだけど」
ドロシーは踵の取れたサンダルを指でぶら下げて笑い、ドアを開けた。

外はよく晴れており、正面のマンションのクリーム色の壁に陽光が反射して眩しかった。

第一話「彼女の銃と僕のビデオカメラの話」 - 4

P M . 1 : 2 7

空は高く青く澄み、天上から伸びた白い雲のハンカチが灰色の影をつけながら空を舞っている。

太陽は白い光を放ち、黒く伸びた電線が空を区切っている。高いビルは影絵の背景のように道行く人々の上にそびえ立っている。

「どう？ 似合う？」

歩道橋の上でビデオカメラを構えて取り留めなく風景を撮っていた僕は、声をかけられて振り返った。

そこには、さっき買ったカウボーイハットを被ったドロシーが立っていた。彼女と二人で繁華街までやって来た僕は、彼女の買い物につき合わされることになったのだ。

「……君の体質、防犯カメラにも効くんだね」

僕は歩道橋の手すりにもたれかかった。

「さっきのお店、いきなりビデオカメラが故障したから大騒ぎしてたよ……」

「そうだった？ 気づかなかったわ」

「……………そうだろうね」

街に出てきて最初に入った大きな洋服店で、ドロシーは店員の騒ぎにかまうことなく店中の靴を一時以上かけて物色し、最終的に赤いエナメルのサンダルを購入していた。そして彼女は、展示用に飾られているカウボーイの人形にも目をつけたのだ。

「ほら、やっぱり銃はこうやってしまうのがいいよね」

ドロシーが戦利品を見せびらかす。それは西部劇でよく見る、腰に巻くタイプの銃のホルダーだった。展示用だったせいか、ベルトには意味不明な銀の星形の飾りがついている。

今のドロシーを例えて言うなら、さしずめファッションショーか

ら抜け出してきたカウガールといったところか。

「いいのかな？ それ展示用だろ？」

「いいのよ、お金は払ったんだし、お店の人だっていいって言ってたわ」

「もしかしたら、防犯カメラが壊れたからそっちに気を取られてたんじゃないかな？」

「そうかもね」

ドロシーは楽し気に笑うと、僕の隣で手すりにもたれた。

確かにドロシーは金を持っていた。正直な話、あの古いコートのポケットから札束が出てきた時には自分の目を疑ったが。何だって彼女があんな大金を持ってるんだ？

もともと、尋ねれば魔法で出したのだと答えそうなので聞くのはやめておいた。

ちなみにコートとヒールの折れたサンダルは店に引き取ってもらった。勝手に置いてきたと言った方が正しいかもしれない。

札束を何処にしまったのかはわからない。

「ところで、何を撮ってたの？」

僕はドロシーに尋ねられて口籠った。

「……町の風景……かな」

「ふーん……」

ドロシーは頬が触れるかと思うくらいに僕の顔に顔を寄せ、手すりの上に体を乗せて下の方を覗き込んだ。しかし特に撮るべきものが見当たらなかったのだらう、少し戸惑ったような表情で僕の方を向いた。

「……で、何の辺りを撮っていたわけ？」

ドロシーの横顔に見とれていた僕は慌てて返事をした。

「だからね……」

何が『だから』なのかよくわからないが、僕はインテリ臭く少し気取って説明を始めた。

これは僕の悪い癖で、人に対して自分の考えを述べる時に何故か

気取った態度をとってしまったのだ。特に気取るようなことを考えているわけでもないのに。

「……だから、別に風景を撮るからと言っても、山とか海とか……『特別』な所を撮る必要はないんだ。いつも見慣れているような町の風景でも、光の加減や角度によってとても綺麗になる瞬間がある。例えば、道端に捨てられた空き缶や、その上を通る人の影なんかでもね」

更に良くないことに、僕は話し慣れていないせいもあって、一度話し始めると相手の反応を伺うこともせずに話し続けてしまう。少なくとも女の子に対しては絶対にやってはいけないことだ。

「だから、僕はそんな風景を見つけ出して撮るのが……」

僕はそこで、ドロシーがこちらを向いていないことによりやく気づき、話を中断した。

ドロシーは手すりに両手をついて町の風景を眺めていた。そして僕の方を振り向くと、目を輝かせて笑った。

「凄いいね。貴方の話を聞いてると、まるで自分が御伽噺の世界にいるみたいな気がしてくる。でも、なかなかそんな風景は見つけられないな」

「……まあ、これは僕の考えだし……人によって見つけられる物は違うと思うよ」

ドロシーを飽きさせてしまったのだばかり思っていた僕は、彼女の真剣な表情に驚いて慌ててつけ足した。

ドロシーが僕の話の話を聞いていてくれたのは嬉しかった。何か心の奥底に溜まっていた物がすっきりとしたような気がする。人に自分の考えを話すだけで心が軽くなるとは驚きだ。

もっとも、話してしまってから自分の考えが片寄った頭でっかちなものだという事に気づいてしまい、かなり恥ずかしい思いもしたが……彼女が喜んでくれたことを考えれば、それも決して悪くない。

「僕は結構、夕方の空を見るのが好きだな。夕焼けの色は毎日違う

し、綺麗な夕焼けに会えるというのはとても運のいいことなんだ」

「夕焼けか。悪くないわね」

「それと綺麗な女の人を見るのも好きだ」

「正直ね」

「……相手によるさ」

僕はドロシーに向かって微笑んだ。

その時、大学生風の男が歩道橋の上に現れた。

男はタバコをくわえながら、いかにもだるそうに歩いていたが、僕の方を見ると眠そうな目を開けて声をかけた。

「よお、久しぶりだな……どうしてるんだ？」

「……何だ、斉藤か……」

斉藤は僕の高校時代のクラスメイトで今はこの町の大学に通っている。僕とは特に親密な交流があったわけではないが、お互いに嫌っているわけでもない。

実を言うと、僕は彼が歩道橋の上に現れた時から彼のことに気づいていたが、あえて話しかけようとしなかった。つまり、無視していたのだ。

Q・理由は？

A・………言いたくない。

「今はこの町の予備校に通ってる。そんなに勉強はしてないけどね」
僕はできる限り平静を装って答えたが、斉藤は僕より隣のドロシーの方に注目していた。

ドロシーは僕達の会話に興味はないといった様子で空を眺めていたが、斉藤はドロシーと僕がそれほど深い仲でないのを感じ取ったらしい。

「やあ、どうも、俺、斉藤って言うんだ。あいつとは高校からの知り合いで……」

僕を無視してドロシーに近づき、馴れ馴れしく声をかける。しかし、ドロシーの返事は素っ気なかった。

「……アタシはドロシー。よろしく……」

「君、綺麗だね。もしかしてモデルとかやってる？」

「……やってない」

「やりたいとは思わない？ 俺の知り合いに業界の奴がいるんだけど」

「……別に」

僕の時と同じだ。まったく会話のきっかけがつかめないでいる。しかし斉藤は僕とは違い、そう簡単に諦める気にはならないらしい。いきなり蚊屋の外だった僕の方に話し始めた。

「しかし、こいつがこんな美人を連れてるなんて意外だなあ。知ってる？ こいつ高校の頃は凄く頭が良かったんだぜ」

斉藤が僕の肩に手を置いた。タバコの嫌な臭いが漂って来る。

「でも不思議だよなあ、大学は全部滑っちまったんだろ？ 滑り止めも全部ダメだったんだっけ？ あれはどうしてだ？ 風邪でもひいてたのか？ ……まあ、あれだよなあ、幾ら頭が良くても本番に弱ければダメってことだよなあ」

どうしてこんな奴にそんなこと言われなきゃいけないんだ？

僕の視線が足下の石で止まってピントがぼけた。目の前が暗くなる感じがする。

「……関係ないだろ！」

僕の腕が振り上げられ、斉藤の腕を振り払った。自分で出した声の大きさに自分で吃驚する。

斉藤も驚いたようだったが、口元に軽薄な笑みを浮かべると謝った。

「悪い悪い、気に触ったか？ それはすまなか……」

斉藤の笑みを目にした瞬間、薄暗かった僕の視界は急速に狭まり真っ白に反転した。そしてまるで誰かが僕の体を操っているかのように、僕の腕が斉藤の襟元に伸び襟をねじり上げた。

頭の中には斉藤に対する言いようのない殺意があった。でも隅の方にはやけに冷静な部分があり、自分自身の行動を眺めていて……そう、こんなことでも何にもならないってことがわかっていた。斉藤はしばらく軽薄な笑みを浮かべていたが、僕が真剣なことに気づいて表情を変え、僕の腕をねじり上げにかかった。ろくに運動もしていない僕が腕力で敵うはずもなく、あっさりと腕を取られる。途端、顎の骨に鈍い衝撃が走り、頭の中が揺れた。僕は背中から手すりに激突し、倒れ込んだ。

「何いきなりキレてんだよ！ 気持ちワリいなあ！」

斉藤は血走った目で僕を見下ろし吐き捨てた。

「……すまない」

僕は目を伏せて呟いた。頭と体の奥底には、まださっきの衝動が後味悪く残っていたが、痛みのおかげで何とか落ち着けた。

「お腹が減ったな。何か食べに行こうか？」

顔を上げると、ドロシーが近くまで来ていた。

「ああ、それなら俺がいい店を知ってるからそこに……」

斉藤は僕を無視してドロシーに手を伸ばした。しかしドロシーは軽く斉藤の手を払うと僕の方に手を伸ばした。

「立てる？」

僕は道端の石になったような気がしていたが、ドロシーに声をかけられて信じられない物を見るように彼女を見上げた。

「なあ、そんな奴にかまってる暇で俺と一緒にに行こうって」

斉藤が馴れ馴れしくもドロシーの肩に手をかける。しかし、ドロシーは振り返りもせずに斉藤の手を振り払った。

「……勝手に触るな、気持ち悪い」

ドロシーの台詞に反応して、斉藤は乱暴に彼女の肩に手をかけ強引に自分の方を振り向かせた。血色の悪い顔が大きく歪んでいる。

「何だって……？ もう一回言ってみろ」

ドロシーは面倒臭そうに髪をかき上げた。

「別に大したことは言っていないわ。アタシは勝手に体に触られるのは嫌いだし、自分の昼食の相手は自分で決める。何か失礼なことを言ったのなら謝るけど。これだけは譲れないわ。ごめんね」

「……！ バカにしゃがって！」

斉藤はもう一方の手で彼女の肩を押さえつけた。瞬間、ドロシーの右手が凄く速さで動いた。気がついたとき、ドロシーの右手は人差し指と親指で銃を形作っており、銃口は斉藤の右目の直前で止まっていた。

「言っただけよ、触られるのは嫌いだって。一度ならともかく二度目は許さない……目を潰されなくなったら失せなさい」

斉藤は凍りついたように立ち尽くしていたが、ドロシーの肩を離してフラフラと後退すると、一目散に歩道橋の上から消えた。

「……やれやれ」

ドロシーは僕の方を振り返り、微笑んだ。

「みつともないとこ見せちゃったね」

僕は足下を見ながら呟いた。多分、ドロシーは僕のことを軽蔑しただろう。できれば彼女には、こんな自分は知られたくなかったのだが。

「そうね、かなりみつともない」

ドロシーは僕の前に立って素っ気なく言った。そして僕の横を通り過ぎながら僕の背を軽く叩いた。

「さあ、行こうか」

「……何処へ？」

一瞬、何を言われたのかわからなかった僕が驚いて尋ねると、ドロシーもまた不思議そうな顔をし、

「……だから、何か食べに行くのよ」
と答えた。

第一話「彼女の銃と僕のビデオカメラの話」 - 5

P M . 2 : 0 7

「人を殺したいと思ったことはあるかい？」

歩きながら、僕はドロシーに尋ねた。

「殺したこと、じゃなくて？」

ドロシーの返事は、僕の予想を遥かに上回っていた。

週末のせいかな通りは多い。とは言っても、気をつけてさえいれば、まず人にぶつかることはなかっただろう。

しかしドロシーの返事に戸惑っていた僕は、正面から歩いてきたサラリーマン風の中年の男とともにぶつかってしまった。

「あつ、すいません」

「バカ野郎、気をつける！」

反射的に謝った僕に対し、中年の男は振り返りもせず吐き捨てる。僕は去っていく男の背中を見つめながら答えた。

「……ああ、殺したくなったこと……だ」

「貴方は人を殺したいと思ったことがあるの？」

「あるよ、幾らでもある。ついさっきもそう思った」

僕はあまり他人に自分の考えを言うタイプではない。しかし、何故だかドロシーには話したくなった。

彼女なら答えを出してくれそうな気がする。僕が閉じ込められている、この問題に。

「自分でも些細なことだとは思うんだ。誰かが僕の悪口を言ったり、嫌なことをしたり……酷い時には、そいつがそこに『いる』というだけで殺したくなってしまう。勿論、僕は本当にやったりはしないけど……いや、それが可能な状況でさえあれば、僕だって人殺しをするかもしれない」

僕の脳裏に昨夜のおじさんの姿が映った。

そして、お前も同罪だと言ったりヨウの顔も……。

「嫌ならやめれば？」

ドロシーは車の行き交うスクランブル交差点の前で立ち止まり、斜め向かいのファミリーレストランを見ながら言った。

「僕だつてやめたいよ、だけど止まらないんだ。まるで自分の中に化け物がいるみたいだ……何か嫌なことが起きた瞬間、そいつは僕を支配するんだ。そして僕はそいつに逆らうことができない」

僕はドロシーの横に並び、車の流れを見つめながら呟いた。

「……でも、どうして僕は人を殺したくなるんだらう？」

すると、ドロシーが僕の方を見て言った。

「気持ちいいからよ」

「……………何だつて？」

僕はドロシーの言ったことが理解できずに聞き返した。ドロシーは冷静な顔で続ける。

「怒るっていうのはどういう行為だと思う？」

「さあ。何だらう？」

「怒るっていうのは結局、ストレスの解消よ」

ドロシーは車の流れに視線を戻して言った。

「人間は物事がうまくいかなかった時、自分の欲求が受け入れられなかった時、それを解消したくて『怒る』のよ。目の前の障害を打ち破る為にね。幼稚園児のお菓子の取り合いから核戦争まで、争いの原因はほとんど変わらない」

「……まあ、そういう考え方もあるよね……」

僕の曖昧な反応を気にせずドロシーは続けた。

「怒りに暴力が伴うのは、それがストレスを解消する最も簡単な手段だから。相手と面倒な交渉を続けることなしに権力や腕力で相手が行動できないようにすれば……ねえ、とっても気持ちいいと思わない？」

「……それがすべてじゃないと思うよ。世の中には、もっとちゃんとした理由で怒っている人だっていると思う」

僕の反論に、ドロシーは物わかりの悪い生徒に向けるような微笑みを浮かべた。僕は最近、人からこういう態度をとられることが多い。

「アタシだってそう思う。でも、それは少なくとも貴方のことじゃない」

信号が青に変わり、ドロシーは僕を残して歩き出した。

「人殺しは最も簡単な問題の解決法よ。だって、相手がこの世から消えてなくなるんだもの、面倒な交渉を続けることも相手の要求を飲むこともない……素晴らしいことよね。でも気をつけた方がいいわよ、殺すってことは問題に対して他の方法で相手に勝つことができないうって自分で認めたようなものだからね」

僕はドロシーに追いついて言った。

「……君はこう言いたいのか？　僕は現実の問題に対して何もできない人間で、僕は……それを認めたくないから人を殺したくなるんだって？」

「へえ、頭いいじゃない。その通りよ」

ドロシーが振り返りもせずには答える。その声は楽し気だった。

頭の中がカツと熱くなった。

僕の求めていた答えはこれじゃないと思った。

僕は乱暴にドロシーの肩をつかみ強引に振り向かせようとした……正直、殴ってやるうかとさえ思った。しかし振り向いたドロシーの手にはいつの間にか銃が握られており、それが僕の眼前に突きつけられた。

瞬間、意識が混乱した。すぐ目の前にいるはずのドロシーの声が、ひどく遠い所から響いてくるようだ。

「アタシはさあ、キリストじゃないから人を殺すなどとは言わない。殺されそうになった、レイプされた、本当に大切なものを傷つけられた……これならまだ仕方ないと思えるわよ。でも、貴方には人を殺すだけの理由はないわ。まさか貴方のちっぽけなプライドが『大切なもの』だなんて言うつもりはないでしょうね？」

「……君はそう言うけど……僕はそれがないと生きていけないんだ」
喉の奥から絞り出すように、僕は呟いた。

「ちっばけなプライドでもそれがないと生きていけない。僕は……」

「僕は不幸なんだ……」

僕らの周りを沢山の人達が通り過ぎてゆく。

混乱した頭の中で、どうして誰もドロシーを止めないのだろうか
考えた。白昼堂々、女が道のと真ん中で銃を構えているというのに
……誰も本物の銃だと思っていないのだ。僕は気がついた。ドロ
シーの格好はまるで撮影中のモデルだし、僕は小型のビデオカメラ
を持っている。多分、みんな何かの撮影かりハーサルだとも思っ
ているのだろう。

「幸せな国ね。銃を構えても誰も何も言わない」

ドロシーも同じことを考えていたらしく、周りを見回して呟いた。
何故かその声はとても優しくかった。不意にドロシーは銃を腰に戻し、
微笑んだ。

「まあ、アタシにも貴方を殺す理由はないし……それに昨日は泊め
てくれたしね。ありがと、礼を言うわ」

そう言うと、ドロシーは僕に背を向けて歩き出した。しばらく突
っ立っていた僕は、ドロシーとは逆を向いて、家の方向に戻ろうと
した。

これでいいんだ。僕は思った。……やっとな逃げ出せたのだと。

大体、あの女は半ば強引に僕の世界に入って来たのだ。そして僕
の一番見られたくなかった所を暴き立てた。もうこれ以上、あいつ
と関わり合いになる必要なんてない。

僕は横断歩道を渡りきった。

信号は点滅して赤になりかけている。

その時、振り向いた僕の視界に小さくなってゆくドロシーの後ろ
姿が飛び込んできた。

今でも、何故あんなことをしたのか自分でもわからない。実際、やっている途中だつて自分が何をしているのかわからなかったのだから。

順を追つて話そうこうだ。

僕はいきなり短く舌打ちをすると方向転換して、元来た横断歩道に走り出たのだ。横断歩道は五十メートルくらいの距離があり、信号はとづくに赤になっていた。そして僕が渡ろうとした道路の車は、信号が青になったのを見てアクセルを踏んでいた（当然のことだ）……そこに僕が飛び出したのだ。

幸運だったのは、すべての車のドライバーが僕に気づいてブレーキをかけてくれたことで……僕はこの国の交通マナーの良さに本当に感謝しなければならぬと思う。今後、水たまりの泥水を跳ね飛ばされたくらいでは怒ったりなんかしないと、その時誓ったほどだ。話を戻すと、横断歩道に飛び出した僕はブレーキとクラクションの音と誰かが怒鳴る声を完全に無視して走り続け、あるうことが横断歩道に突き出す形で止まった車（この人も僕の姿を見てブレーキを踏んでくれたのだ！）のボンネットの上を踏み越えて横断歩道を渡り切り、ドロシーの姿を追つて人混みに突っ込んでいった。

僕が今願うことは、その車のボンネットがそれほどへこんでなくて……運転手が僕の顔を覚えていないことだ。

そして、僕はドロシーに追いついた。

「……何してるの？」

ドロシーは息を切らして歩道に座り込んでいる僕を見て言った。

「……言われっぱなしってのも……僕のプライドが許さないんだ……」

僕はやっと立ち上がると笑いながら言った。

「それに、さつき肩に触って悪かったね……触られるの、嫌いなん
だろ？ これじゃあ斉藤のことを悪く言えないな」

ドロシーは悪戯っぽく笑って答えた。

「相手によるわよ」

気がつくと、手にしていたはずのビデオカメラがなくなっていた。
走った時にベルトが外れたのだろうか？ 高かったのに……僕は思
ったが、不思議と悔しくはなかった。

「ところで、今思ったんだけど」

「何？」

「僕は不幸なんだ、って台詞は何か変だよな？ ……妙に笑えるな
あ」

ドロシーは僕の顔をまじまじと見つめ、呟いた。

「何だ。本気で言ってたの」

第二話「黄色い煉瓦で造られた交差点の話」 - 1

P M . 2 : 3 7

昼時を過ぎたせいか、ファミリーレストランの中に人は少なかった。

適当な席を探そうと店内をざっと見回した僕の耳に、ラジオの音楽番組の音に混じって、不意に聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「ええつと、sinの二乗足すcosの二乗は1であって……」

見ると、窓際の四人がけの席に一人の少女が座っていた。陽の光に背を向ける形で頬杖をつきながら参考書を読んでおり、短めに揃えられた黒い髪が濃紺のブレザーの上に影を落としている。テーブルの上には何冊かの参考書とコーヒークップが置いてあった。

少女は僕の視線に気づいたのか、少し吊り目つぱい大きな目をこちらに向けた。

「あつ、ウソ、先輩じゃないですか!」

「やあ……カナちゃん、久しぶり」

僕は女子高生……若松加奈に手を振った。

カナは僕と同じ予備校に通っている、名門私立女子高校の三年生だ。彼女は通っている高校の名前と、それにつり合うだけの容姿で有名だった。

実際、彼女の容姿はテレビなんかで見る同じ年頃のアイドルやタレントと比べても見劣りしないほどで、色白の肌にかかるストレートの黒い髪と控えめな宝石のような瞳……それと薄桃色の小さな唇がとても魅力的な少女だ。

彼女に誘われ、僕はドロシーの同意を得て三人で同席することになった。

「すごい、美人! ねえ先輩、この人先輩の彼女ですか?」

カナはドロシーを見て歓声を上げた。

「違うよ、こいつは宇宙人で僕の命を狙ってるんだ」

僕は着席しながら真面目な顔で言った。

「アハハハハ、そうなんですか？」

戸惑うかと思ったが、カナは笑い出した。普段は落ち着いていた子だが、今日は妙にはしゃいでいる。

「そんなところね。よろしく、地球人さん」

ドロシーも席に座ってカナに微笑んだ。もともと彼女の場合、先にメニユーの方に手が伸びていたが。

「宇宙人っていうと、何処から来たんですか？ バルカン？」

「多分、クリンゴンだ」

「……それ、酷いですよ」

僕とカナが交わした会話の響きから、ドロシーは自分がからかわれていることに気づいたらしい。少し怪訝そうな表情でメニユーから目線を上げた。

「ああ、クリンゴンっていうのは映画に出てくる宇宙人なんです。

怪物みたいな戦闘民族の……」

カナの説明を聞いて、ドロシーが僕を睨みつける。僕はウェイトレスが運んできたコップに手を伸ばすと、誤魔化すように音をたてて飲んだ。

「……すみません、何か気まずい雰囲気ですね。先輩は私につき合ってくれただけなんですよ」

カナは僕らの様子を見て心配そうに言った。

「私、トレッキーなんです。ああ、トレッキーっていうのはスターレックのファンのことなんですけどね、でもなかなか詳しい人がいなくて。それで先輩とはよくスタートレックについて話すんですよ」

しばらく説明を続けた後、カナは照れたように笑ってつけ加えた。
「個人的にはDS9のシリーズが好きで……あ、シスコ艦長は理想のタイプなんです」

カナに興味を抱く男は多かったが、カナの方は一向にそんな連中には興味を示さなかった。彼女は本当に気に入った相手にしか心を開かないタイプだったからだ。まあ、その態度が却って彼女の人気を高めているのだから美少女とは得な生き物だと思う。

しかし、多くの人は彼女が良家の子女だからこのような態度をとるのだと思っているようだ但实际上には少し違う。これは僕を含めて数人の人間しか知らないことだが、彼女は非常に変わった……いやユニークな思考回路を持っているのだ。

「数学の先生がですね……あ、そいつタコみたいなおじさんなんですけどね。明日いきなりテストをするって言ってますよ。しかも三角数の！ 私達は文系なのに、まったく何を考えてるんでしょうね？ あの先生、禿げてて夏なんか頭から湯気出してるんですよ。いっつも『暑い、暑い』って、こっちが暑苦しくなっちゃいますよ。それに細かいことばかり注意してネチネチ苛めるんです。私のクラスに髪の毛染めてる人がいるんですけどね、その人なんか可哀想ですよ。あの人未だに髪の毛染めてる奴は不良だーなんて思ってるんですね」

カナはそこまで一息に喋ると冷めたコーヒーを飲み干した。口調は悪いが、それほど悪意のこもっていない喋り方で、話すことを楽しんでいる感じだ。

「髪の色とか服装とかで、人間が悪いかどうかなんてわかるわけないじゃないですか。ねえ、そう思いませんか？」

「まったくだよ」

僕はカナに解答を頼まれた数学の問題に目を通していた。問題自体は簡単なものだったが、僕は参考書を見つめながら別のことを考えていた。

「……で、どうなの？ 仕事の方はうまくいってる？」

僕の言葉に、カナの目がスッと細くなった。

「……ま、ボチボチですね」

僕達の雰囲気が変わったので、ドロシーが不思議そうな顔をして

カナと僕を見つめた。

カナは小悪魔のような目でドロシーを見ると、隣の椅子に置いてあった鞆を持ち上げてテーブルの上に置いた。

一見すると普通の通学用鞆だが、よく見てみれば素人目にも相当に高価なものだということがわかる。カナは鞆の蓋を開けると、表紙に『K & K』と書かれた分厚いファイルを取り出した。

ファイルには、よく集めたなと思うくらいにスタートレックのシールが貼られており、中にはびっしりと細かい文字が並んでいた。

「今週は月曜日と水曜日に一人ずつ、木曜日にがんばって三人……この日は学校が創立記念でお休みだったんですよ。それから何と今日の午前中に一人！ 私って本当によく働いてますよね」

「……大したものだよ」

僕が思っただまに呟くと、

「そんなこと言ってくれるのは先輩だけですよ……」

カナはファイルを眺めながら呟いた。

ドロシーは横からファイルを眺めていたが、どうやらその内容に気づいたらしい。

「……売春……か」

カナはファイルを閉じると、花がほころぶように微笑んだ。

「ビジネスです」

PM・2:45

「最近は法律ができちゃって、仕事がしにくいんですよ。おじさん達も怖がってるんですよ……それで友達に頼んでネットでお客さんを探してるんです。まあ、その分お金の払いはいいから、こっちは楽なんですけどね」

料理が運ばれて来たので一時中断した話はカナによって再開された。カナは僕達と一緒に頼んだケーキをフォークで壊しながら話を続けた。先程の彼女の台詞ではないが、その口調は有能な実業家の

ようだ。

「知り合いには大きな組織に後ろ楯をしてもらって集団でやってる子もいるんですけど。やっぱり恐いですからね、そういうの。でも、個人でやるのも大変なんです」

「何か企業努力でもしてるのかい？」

僕は運ばれてきた定食を申し訳程度に口に運びながら尋ねた。今日は朝食も抜いたし運動もしたので珍しく空腹だったのだが、カナの話の聞いていると食欲がなくなってくる。

僕の隣では同じ定食を二つ注文したドロシーが平然と食べている。多分、このペースでいけば僕より早く食べ終わるだろう。

……一体どういう胃袋をしてるんだか。

「そうですね。やっぱり、他よりサービスがいいんじゃないですか？ 色々……ね。でも、同じ相手とは何回もしません。愛人とかそういうのは嫌いなんです。あ、そうだ先輩、この制服どうですか？ 専門店で買って来たんですけど、やっぱり男の人の意見も聞かなきゃいけないと思うんですよ。おじさん達は可愛いって言うてくれたんですけど、あんまりアテになりませんからね」

道理でいつもと制服が違うと思った。

「そうだな……うん」

僕は返事に困って何気なく呟いた。

「君は凄いな……いつもそう思うよ。でも」

「でも。何ですか？」

瞳を覗き込むように尋ねられ、僕は自分でもよくわからない返事をした。

「……僕は、女の子は砂糖とスパイスでできてると思ってたよ」
えっと、これは何だったわけ？

……そうだ、確かマザーグースの歌の一節だったような気がする。まずいな、嫌味だと思われるかもしれない。

しかしどういうわけか、カナは虚ろな目をして呟いた。

「……私も、そう思っていました。やっぱり先輩も、売春なんかして

る子は変な子だと思いますか？」

「いや、別にそうは思っていないよ。ただ、一步間違うと危険な仕事だし……君の体のことも気をつけないと」

「体にはちゃんと気をつけてます！ 避妊だって完璧だし、エイズだって、ちゃんとチェックしてます！」

カナは強い口調で反論した。大きな目が更に見開かれ、色白の肌に赤みがさす。カナは一瞬息を止めると白い糸きり歯を噛み合わせた。

「私の体は私の物です。どうしようと私の勝手じゃないですか！」

カナの声がどんどん大きくなる。まるでこらえていた感情が爆発したように。今までのカナがとても明るい態度だったので、僕は余計に驚いた。

「それとも何ですか？ 将来の結婚相手の為に綺麗な体でいろって言うんですか？ 俺はお前を愛しているから他の男と寝るのは許さない？ それって変だと思いませんか？ 愛っていうのは恋人の体を所有することですか？ それは私の体を買うのとどう違うんです？ 私の体は私の物です、親の物でも恋人の物でもありません。どう使おうと勝手じゃないですか！」

カナは凄まじい勢いで捲し立てると、力尽きたようにうなだれた。店内の他の客や従業員が、僕らの方を盗み見ながら何事か囁きあっている。

「……何かあったのかい？」

僕は可能な限り穏やかに尋ねた。普段の彼女はこんなに感情を表に出す方ではない、どちらかと言うと感情を隠す方だ……こんな彼女は初めて見る。

カナは不意に顔を持ち上げると唇を歪めた。

「今朝の客がですね、こう言っただけですよ。身体を売るなんて最低だ、お前みたいな奴がいるからこの国は悪くなったんだ、って……お前なんか死んじまえて」

カナはしばらく口を噤んだ後、再び唇を歪めて笑顔を作り、強い

口調で吐き捨てた。

「こんな朝早くから女子高生を買ってる奴に言われたくはないですよね！」

それからカナは僕の隣に視線を向け、ドロシーに尋ねた。

「……ねえ、貴女はどう思いますか？」

ドロシーは一旦食事の手を休め、箸を口元に寄せてこんなことを言った。

「貴女はどうして売春をしているの？」

「……お金……かな？」

少し考えてから、カナが答える。ドロシーは納得したような表情を見せると、再び定食に箸を伸ばした。

「金儲けの為だったら、客に何を言われても我慢しなさい。それがビジネスつてもものよ。もっとも、自分には売春婦としてのプライドがあるって言うんだったら話は別けどね」

カナは少し口籠ったが、しばらくして微笑んだ。

「……そうですね、私も甘いこと言っていましたね」

カナはため息混じりに呟いた。

「でもね、お金だけじゃないんです。私、夢があるんですよ」

「初めて聞くなあ。何なの？」

僕の問いに、カナはいつもの笑顔に戻って答えた。

「笑わないで下さいね、私、エンタープライス号に乗りたいたんですよ」

カナは不覚にも少し笑い声をもらしてしまった僕を軽く睨むと、テーブルの上の参考書を指で叩いた。

「人生で大切なことって何だと思いますか？ 数学の問題を解くこと？ いい学校に進むこと？ それとも結婚して家庭に入って専業主婦になって、子供を生んでオバサンになって夫の我儘に耐えること？ 冗談じゃないですよ」

カナはしっかりとした口調で続けた。

「私、思うんですよ。折角の人生なんだから、自分の好きなように

生きてみたいって。女だからとかそういうんじゃないで、自分の能力で何処まで行けるか試してみたいじゃないですか。私、高校を卒業したら家を出て、貯めたお金で海外に行こうと思ってるんです。それで今、英語を勉強してるんです」

「それは凄いなあ」

僕は本心から呟いた。

カナは薄く微笑むと遠い目をして呟いた。

「でもやっぱり、理想の職場はエンタープライス号だな。だって、地球の危機が救えるんですよ？ あーあ、あれに乗れるなら私、物理だって勉強するのに」

二つ目の定食をほぼ食べ終わったドロシーは、そんなカナを見て微笑んだ。

「いい夢を持ってるわね。でも、それだったら売春はやめておきなさい」

「どうしてですか？」

「女を買うようなバカと一緒にいるとせつかくの夢が汚れるわ。大丈夫、急がなくても貴女はちゃんと成長できる。バカな男の金なんか貴女の夢には必要ないわ……そうでしょ？」

「……そうでしょうか？」

カナは少し考え込んでいたが、やがて瞳を輝かせて言った。

「そうですね！」

P M . 3 : 2 8

「……さっき言いかけたことだけ……」

「何でしたっけ？ さっきの話って？」

カナは僕のそばに寄ると首をかしげた。

僕達は遅い昼食を終えてレストランを出ていた。ドロシーは少し離れたガードレールの上に座っている。

「ほら、さっき、君が変だと思うか？ って聞いて僕が答えた時の

ことだよ」

「……ああ、体に気をつけろってやつですか？ あの時はいません、私、ついカツとなって……」

「いや、それはいいんだ。で、あの時言おうとしたのは健康のことじゃなくてさ、君自身のことなんだよ」

「……私自身のこと？」

「そう、君のこと。僕はさ、君のことは本当に強いし頭もいい子だと思うよ。社会に出ても絶対に成功すると思う……だからこそ、売春はやめた方がいいと思うんだ。だって勿体ないじゃないか。もし何かあったらどうする？ 君が今朝会ったっていう男もそうだけど、世の中には君が考えている以上に変な男がいっぱいいるんだ。そういう連中は、君が体を売っているバカな女だと思って何をしてもいいと考えてるんだよ。もし殺されてもしたら取り返しのつかないことになる。だから、悪いことは言わない、今は安全な仕事をした方がいいよ」

カナは途切れ途切れに呟いた僕の言葉を真剣に聞いていたが、ふとこう尋ねた。

「私……ちゃんと立派な大人になれるかな？」

「どうしてなれないって思うんだい？」

「……………」

「大丈夫、僕がカーク船長だったら絶対に君をスカウトするよ」

カナは僕の言葉に微笑み、それから少し悲しそうな瞳で僕を見つめた。

「先輩の言葉はアテになりません。私、先輩がリョウさん達としていること知ってるんですよ」

「……………」

カナは体を寄せてきた。彼女の黒髪が僕の胸に当たり、暖かな体温が伝わってくる。

「……私、先輩のこと心配です。先輩は人には優しいけど、自分のことを何かで縛っているようで……私、さっきの先輩の言葉は先輩

自身に一番必要なことだと思います。何て言うか……先輩はもつと我俥になってもいいと思うんです」

そう言うと、カナはパツと僕から離れて微笑んだ。

「御忠告ありがとうございます、先輩！ 私、もう売春はやめます！」

カナは『売春』という言葉が誰かに聞かれてはいないかと慌てて周りを見回す僕を見て、本当に可笑しそうに笑った。

「ねえ先輩？ 私がもしエンタープライス号に乗ることになったら、先輩も一緒に来てくれますか？」

僕の心の中に甘いピンク色の光が射した。……彼女と僕が一緒に行くって？

だが僕の答えは、最初から決まっていた。

「……僕にそんな資格はないよ……」

カナは一瞬寂しそうな顔をしたが、すぐに元の表情に戻った。

「先輩、今日はスケアクロウでパーティーがあるんですよ。私も行きますから待ってて下さいね」

そう言うと、カナは用事があるとかで去っていった。

P M・3：36

「……うん……そうなの、やめるの……ここら辺が引き際かなって思ってたさ。うん……ありがと、いきなり言ってごめんね。……ううん、そんなことないよ。ねえ、今度遊びに行こうね、クミも部屋に閉じ籠ってちゃダメだよ。……そうだ、さっき先輩に会ったよ。ほら予備校でいつも窓際に座ってる人……そうそう、結構カッコイイ人……えっ？ リヨウさんって……やめときなさいよ、クミはヤバイ男ばかり好きになるんだから。だから拒食症になんかなるんだよ。……アハハ、ゴメンゴメン……でもさあ、今思っただけで、リヨウさんと先輩って似てるよね。……うーん、そうだなあ」

歩道を歩きながら携帯電話をかけていたカナは、足を止めて空を

見上げた。おぼろげにオレンジがかり、薄く雲がたなびいている。

「……うん、目が似てるかな？ 二人とも寂しそうな目をしてるね。まるで檻に閉じ込められた野生の獣みたい……」

その時、カナの背後から金属音が響き、赤い空き缶がすぐ脇を転がっていった。

振り返ると、少し離れた所に二人の女がいた。二人はカナを睨んでいたようだったが、やがて走り去った。

「……………何、あれ？」

カナはしばし携帯からのクミの声に答えるのも忘れて立ち尽くした。

そしてそれから、全然関係ないがスケアクロウにはこの前買ったセーターを着て行こうと思った。

第二話「黄色い煉瓦で造られた交差点の話」 - 2

P M . 3 : 1 3

銀色のレバーをサイドに入れて、リヨウはアクセルを踏み込んだ。マスタングのメタリックボディが咆哮を上げ、命令に忠実に加速する。血のような深紅の車体は夕陽を浴びて更に毒々しく輝き、マスタングは制限速度も振り切って前を走る標的達に襲いかかる。

「すごい、カッコイイ！」

交差点に差しかかっていたマスタングが流れるような動きで前を走っていたBMWを追い越したのを見て、後部座席の右側に座っていた女が感嘆の声を上げた。

「本当！ さっきのBMW、交差点でおたおたしてるよ。下手なのにあんなの乗り回すからだよね」

「言ってるー！ それに見た？ 助手席に座ってた女、センス悪かったよねえ。ねえ、リヨウもそう思うでしょ？」

左側に座っていた女が相槌を打ち、運転席のリヨウに尋ねる。

「……ああ、お前達の方が上だよ」

リヨウは少しスピードを落とすと、バックミラーに映った二人の女の姿を見た。

リヨウは昨夜と同じ黒いコートを纏い、耳には逆十字のピアスをつけていた。車内が暑いせいかコートの襟元は大きく開かれ、窓の隙間から吹き込む風を受けて銀のピアスと共に揺れている。

後部座席に座っている女達の名前はアリカとアイカと言って、リヨウが大学で声をかけた二人だ。あまり大学に行かないリヨウが二人に目をつけたのは、二人が大学内でもかなり目立つ存在だったからだ。

ハンドルを軽く叩きながら、リヨウは二人に尋ねた。

「……ところでさあ、前から聞こうと思ってただけど、どうして

二人は同じ格好をしてるんだ？」

二人の服装はまったく同じだった。

二人はまったく同じタイトなＴシャツと厚手のジャケット、ピンクのジーンズを身につけ、同じ派手な赤のスニーカーを履いていた。襟元と袖に黒いラインの入っている白のＴシャツの胸部にはまったく同じ『A』の文字がプリントされ、胸の形まで……おそらくは最新の下着の効果によって……同じだった。

髪型も二人は同じように髪を括り上げ、同じように染めていた。

元々顔立ちが似ているせいもあるのだろうが、二人の顔は精巧な化粧法によって見分けがつかないほどに似通っていた。

数少ない相違点はアリカが右側の耳にハート型のピアスをつけ、アイカが左の耳にダイヤ型のピアスをつけていることと、アリカの方が若干丸顔なくらいだろうか？ 正直、昨夜共に過ごしたリヨウにだって二人の違いを五つ以上見分けることは不可能だった。

「それはね、リヨウ」

アリカがリヨウの質問に答えようとすると、アイカがアリカの頬に自分の頬をすり寄せた。

「私達が親友だからだよ」

二人の声が重なり、そして同時に笑い出した。

「私ね、初めてアリカちゃんに大学で会った時、すっごく自分とそっくりで吃驚したの。そうしたらアイカちゃんも同じことを考えてたのね」

「それに二人で話してみるとね、趣味とか好きな物とかも同じだったのよね」

「勿論、男の子の趣味もね」

「そうそう、でね、私達は思ったわけよ。私達は親友になる為に生まれてきて、そして出会ったんだって」

「だから私達は同じ格好をして同じことを体験することにしたの」

「……同じ体験？」

リヨウが尋ねると、アイカとアリカは交互に喋り始めた。まるで

「二羽の鳥がさえずっているようだ。」

「そう、同じ体験。私達は同じ服を着て同じ部屋に住むの」

「そして同じ景色を見て同じ物を食べるのよ」

「勿論バイトも一緒、講義も一緒」

「ノートなんか半分書けばいいのよ」

「そう、そして男とつき合う時も一緒よ」

「やっぱりいい男は共有しなきゃ、一人占めは良くないわ」

「そうすれば男を取り合うこともないしね」

「男は困らないのか？」

リヨウの問いに二人はクスクス笑って答えた。

「確かに最初はみんな戸惑うみたいね、でも結局みんな嫌な顔はしないわ」

「だって二人の女の子と何の問題もなくつき合うなんて滅多にできることじゃないもの」

「二人の女の子と同時にやれるなんて尚更よ」

「ただしデート代も二倍かかるけどね……あ、でもリヨウは別よ」

「そうそう、私達リヨウの為なら何でもするからね」

「……それは嬉しいな」

リヨウはハンドルで軽くリズムをとりながら笑った。

「でもさあ、まったく同じなんて疲れないか？ 幾ら友達でもさ」

「「そんなことないよ」」

二人は言った。

「私達は友達なのよ、同じ物を共有するのは当然よ。私達は完全に平等なの、だから他の友達みたいに出し抜かれることも裏切られることも喧嘩することもないわ」

「私達は本当の友達なのよ」

アリカとアイカは手を握り合って顔を寄せている。リヨウは二人の様子をバックミラーで眺めていたが、不意に口元を歪ませた。

「……でも俺としてはアイカちゃんの方が好みだな」

リヨウの言葉に、アリカは瞬時にアイカの手を突き放した。

しかしアイカはアリカにかまうことなくリヨウに聞いただけだ。

「ねえリヨウ、それ本当？」

「ああ本当だ、アイカちゃんの方が可愛いよ」

「やった〜！」

「アイカ！ 貴女私を裏切る気！？」

アリカが悔しそうに叫ぶ。しかしアイカは平然と答えた。

「いいじゃないアリカ、これはリヨウが言ってることなのよ。それに私知ってるんだからね、アリカがバイトの客と寝たの。あれ私だつて狙ってたんだから！」

「それとこれは話が別よ！」

「それにこの前の試験はアリカの方が成績良かったじゃない！」

「あれは当てずっぽうで書いたものがたまたま正解だったのよ！」

同じ答案なんてできるわけないでしょ！？」

「知らないわ、そんなこと。おかげで来年もう一度取らなきゃいけなくなったじゃない。どうしてくれるのよ！」

「友達ねえ……」

リヨウは眩き、夕陽に照らされて金色に輝く窓辺の日よけを動かしながら考えた。

「そうか、あっちがアイカだったのか……見分けがつくのはいいことだな」

リヨウは後部座席で口論を続ける二人を無視して車を走らせた。

洪水のように降り注ぐ西日の中を紅のマスタングが突き抜けてゆく。

「……友達……か……」

リヨウはもう一度呟いた。

その瞳は何処か遠くを見つめていた。

P M . 3 : 3 0

「ねえ、あれ若松じゃない？ ……ほら」

信号で停車した時に、突然アイカが窓の外を指差した。

しばらく冷戦状態で黙りこくっていたアリカも、アイカにつられて窓の外を見た。

確かに、道路の向こう側にカナがいる。

「ホントだ、若松だ」

「……若松って、若松加奈か？」

赤信号に苛立っていたリヨウは振り返らずに言った。

「そう、体売りまくってる高校生。知ってる？ あいつヤクザの愛人だって噂だよ。それでヤクを買う為に金を稼いでるんだって」

「そうそう、でもって病気持ちなんだって」

「へえ、それは凄いな」

リヨウはいつの間にか口を合わせてカナの悪口を言ってる二人にうんざりしながら呟いた。実際のところ、リヨウは二人よりもカナについてよく知っているし……実は数少ない気に入っている者の一人でもあった。

……確か、あいつと仲が良かったよな？

「若松ってさあ、ちょっと可愛いからって調子に乗り過ぎなんだよね。何かこつちを見下してるような態度とるしさあ」

「そうそう、自分は汚いオヤジ達と寝てるくせにね」

「でも今日は若い人連れてるね。私達と同年くらいかな。私だったら売春してる奴となんか絶対つき合わないなあ。リヨウもそう思うでしょ？」

「あ、でもあれって確カリヨウの……」

リヨウは何気なくカナの方を見、そしてその隣の人物に気づいた。
「あいつ……」

「あの人、確カリヨウの仲間でしょ？ 言っという方がいいよ、あんな女とはつき合わない方がいいって」

「そうよ、あんな性格の女は最悪よ」

「……お前達のほうがよっぽど最悪だと思うけどな」

「え？ リヨウ、何て言ったの？」

リヨウは前方に顔を戻すと、冷ややかに言った。

「降りろ、お前達」

「降りろって……ここで？」

「嘘でしょ？ 今日と一緒にスケアクロウに行くって……」

二人は必死にリヨウの機嫌を直そうとしたが、リヨウの態度は変わらなかった。

「用事を思い出した。それからお前達はスケアクロウに来るな」

「な、何で……!?」

アリカとアイカが声を揃えて悲鳴を上げる。しかしそれがリヨウの神経を逆撫でした。

リヨウは振り返ると殺気立った目で二人を睨んだ。

「降りろと言ったら降りるんだ！」

「何なの？」

「どうして？」

道路に残された二人は、走り去ってゆくマスタングを見送りながら呆然と立ち尽くした。向こうを見るとカナが男と別れて歩いていく。

「あいつのせいだ」

「そうだよ絶対。だってリヨウはあいつの話をしたら急に怒り出したんだもの」

「……………」

「どうしてやろうか？」

アイカの言葉に、アリカは近くに落ちていた空き缶を拾った。

P M . 3 : 3 6

リヨウはアクセルを踏んだ。

更なる力を得たマスタングは加速し続け、街はその形を留めることなく後方へと消え去った。

制限速度の標識も、道路案内の掲示も信号も、周囲の車も全て消えていく。

「……畜生、何処なんだここは……」

P M・4：46

『生物の種と言うと常に不変的な物であるように思われるかもしれないが、実は生物を分類するということはなかなか難しいことなのである。』

第一に生物とは何かと考えると、生物とは自分の固有の情報（例えばDNA、RNAなど）を持ち、それを分裂や生殖などの方法によって永久に残していこうとする物質の化合物であり、この点で他の唯一の元素からなる鉱物などの物質とは異なるのである。

つまり生物とは、どういうわけかは知らないが、地球上に誕生した科学物質の結合したものが自分を永遠の存在としようと思いついたものなのである。であるから生物の特徴とは動くことでも知能を持つことでもなく、自分の情報を残そうとすることなのである。

この考え方をいけば、動物、植物、細菌、更にはタンパク質のかけらとRNAしか持たないウイルスでさえ同じ『生物』という仲間と言える。更に地球上の生物は一つの大きな系統樹にそって結びつけることができ、その構造も多少の違い……例えばDNA等の情報物質が核によって包まれていないとか、酸素呼吸をしないとか……はあれ、基本的に自身の情報を伝える器官とその情報に従って体を構築・維持する組織で構成される点では変わりがない。もっともウイルスは情報のみの存在であり、体を作る器官を持たない点で異常だが、これはウイルスがある種の生物のDNA等が他の器官から分離した後に独自に活動し始めた物であると考えればよいだろう』

「あの子……カナちゃんだっけ？ 可愛い子だったじゃない。どうして拒絶するの？」

「別にいいだろ、そんなこと……それに、どうして君は踊ってるんだよ？」

カナと別れてから、僕は近くの本屋に入った。特に理由があったわけじゃないが、僕は目についた生物についての本を読んでいた。店内には軽快なフランクギターとビートが響いている。暇だったのか、ドロシーはラジオから流れている曲のリズムに合わせて踊っていた。

「いいじゃない、踊りたいから踊ってるのよ。それにパティ・スミスは本屋で踊って親友のレニー・ケイと出会ったのよ。知ってる？」

「……知らないよ（誰だよそれは……）」

「こっちの質問にも答えなさいよ。あの子はいい子じゃない、しかもどついうわけか貴方に好意まで持ってる。アタシが貴方だったら即ホテルに連れ込むわよ？ あ、これ全米フェミニスト団体には内緒ね。脱退させられちゃうわ」

「……………（入ってるのか？）」

僕はドロシーの質問を無視して本の続きを読み始めた。

『一般的には生物においての種とは互いに交配可能な生物の集団である。原始の海で誕生して以来、生物は様々な形態（植物、動物、菌類 etc. . . . それはつまり生物の情報のバリエーションである）をとってきたが、種とは同じ情報を伝える為の仲間であり、その団結は仲間内から突然変異、もしくは他の要因によって交配不可能な個体が誕生するまで続くことになる。』

しかし、ここに別の意味の『種』を持つ動物がいる。それは人間による文化的な『種』である。例を挙げると、黒人と白人は肌のメラニン色素量の差に代表されるわずかな差しか違いのない、同一の『ヒト』と言う種である。大袈裟に言っても互いに地方種の一つであり、交配も可能である。しかし長い期間、白人と黒人は同じ人間種であると思われていなかった。これは何故か？

もう一つ例を挙げると、同じ人種であり外見上の違いがまったく

ない二つのグループでも、例えば一方がキリスト教のグループであり、もう一方がイスラム教のグループである場合、互いをまるで人間でないように扱うことがある。この場合、互いを同じ人間だと思わない理由は内包する情報物質の違いではなく、互いの持つ文化の違いである。

人間は地球上で初めて知能を持ち、文化を持った生物である。そして人間はまた、地球上で初めて遺伝情報以外の要因による種の分類をした極めて珍しい生物なのだ。

その場合の分類要因は個体群の持つ文化や生活習慣であり、つまり異なる文化を持つ個体群は互いをまるで別種の生物のように考えるのである。冷静に考えてみたまえ、頭に羽飾りをしていて色が黒くて生で魚を食べているからと言って殺す必要が何処にある？

最後に私がフリーセックス主義者でもヒッピーでもないことを言うておいてこの章を締めくくりたいと思う』

僕は本を本棚に戻した。

読みながら考えたことがある。人間の分類は宗教や言語などの大きな文化の違いだけではなく、ほんの些細な違いによっても起こるのではないかと。例えば好きな野球チームの違いや服の好みの違いによっても、人はまるで別の生物のように扱われることがある。

特にこの国では、些細な嗜好の違いによって小さなグループが形成される。そしてそのようにして形成されたグループは、残念ながら相容れないことが多いようだ。偏差値の違いによっても人間は分類されるし、運動能力の違いによっても、体格の違いによっても分類は起こる。ファッションの知識、会話の巧みさ、女性におけるほんのわずかな頭部の形や体脂肪率の差……最後のことに關しては僕も反省すべきだ。

当然、僕自身も社会的に分類されてしまっている。さしずめ僕の社会的分類は『浪人生、しかもやる気なし』そして街での分類は『リヨウのグループのメンバー』だ。それ以外の何者でもない……そ

の分類からは逃れられない。

いつの間にか、僕の後ろではドロシーが踊りながら歌詞を口ずさんでいた。スタイルの良さと動作の派手さが相まって、まるでシプシーの踊り子のようなようだ。

「何で無反応なのよ、人がせつかく踊ってるのに」

ドロシーは何故か慌てて拍手を始めた近くのサラリーマンの方に手を振ると、次に流れ始めた曲に合わせてリズムをとりながら僕のそばに来た。

「じゃあ、踊らなくなつていいだろ？」

「それじゃあ生きてて面白くないじゃない。人生は楽しまなきゃ」

「それは嫌味かい？」

「勿論」

僕がため息をついて視線を反らすと、ドロシーはステップを踏みながら呟いた。

「まあ、別にアタシが口出しすることじゃないとは思っけどさあ……何て言うか、貴方は妙なことで心を閉ざしてるような気がするから……あ、気に触ったらごめんね」

相変わらずこの女は嫌なところばかり突いてくる。僕は本棚に額を当てると横目でドロシーを見た。……我ながら情けない目をしていると思う。

「僕は誰かを愛したりなんかしないよ……」

「本当？」

ドロシーは僕の目を見ながら尋ねた。僕は彼女の瞳を避けるように視線をずらした。

「そつだよ、僕には誰かなんて必要ない……僕は一人で生きていく。僕に恋愛なんて必要ないよ」

「……それって本当？」

「しつこいなあ！」

僕は乱暴な動作で向き直るとドロシーを睨みつけた。背にした鞆が反動で本棚に当たる。ドロシーは僕の態度に動じたようには見え

なかったが、踊るのをやめて静かに僕を見つめた。

「……そういう視線はやめてくれ……僕のことを変な奴だと思ってるのか？」

「別に。ただ……」

「何だよ」

ドロシーは軽く息を吐くと呟いた。

「……そういうことは泣きそうな目をして言わない方がいいわよ」
僕は全身の血が沸騰したような感覚に襲われた。

その後のことはよく覚えていない。僕の両手がドロシーの首をつかんだと思った瞬間、鳩尾の辺りに衝撃を受けて目の前が真っ暗になった。

最後に見たものは、ルビーのように色鮮やかなサンダルだった。整理して考えると、僕はドロシーに鳩尾を殴られて気絶したらしい。そして彼女は、一人で僕を本屋から運び出したのだ。これでも五十五キロは体重があるのに。

ちなみにこれは後から聞いた話だが、一連の様子を見ていた本屋の店員は、

「……失礼ですが、店内で大声を上げないでいただけますか？」
と言ったらしい。

テレビの評論家ではないが、僕はそれではこの国はダメだと思う。

第二話「黄色い煉瓦で造られた交差点の話」 - 3

P M . 5 : 2 7

「俺の家に裏庭があつてさあ、小さい頃、いつも遊んでたんだ。庭は広くて周りには高い塀があつた。木も何本も生えていてさ、俺はそれに登つて外の景色を眺めるのが好きだったよ。小さい頃は人見知りの激しい性格でな、いつも一人で遊んでた……変なガキだったかもな。」

それが不思議だよな。俺が大きくなるのに従つて、庭が小さくなつていくんだ。本当だぜ、だんだん小さくなつていくんだ。昔は塀まで走つてもなかなか着かないような気がしたけど、今じゃほんの数歩で辿り着いちまう。昔は大きく見えた木も池も、すっかり縮んじまつてる……こないだ久し振りに帰つてみて驚いたよ。あの塀つてこんなに低かつたんだな、ってさ。」

お袋は相変わらず木に水をやっていた。……何となく、お袋も縮んだような気がする。親父もそうだ、昔はもつと大きかったような気がするのに……どうしてなのかな？」

リヨウはタバコの煙を吐き出した。煙は白い布のように空中にたなびき、目に見えない微細な繊維が風に吹かれて解けてゆく。

「それってさあ、やっぱり土地の値段が上がったからじゃないか？」
リヨウの隣で話を聞いていたジンは、タバコの箱を開きながら言つた。

「俺の親も家を買いたいけど金がないって言つてたな。とにかく狭くつてさ、いつも雨漏りするんだ。まったく貧乏臭くつて嫌になるよな。いつまでも汚い家に住みやがつて……リヨウ、聞いている？」

「……聞いているよ」

リヨウは道路の脇に止めてあるマスタングにもたれた。吐き出さ

れたタバコの煙が風に乗ってジンの顔にかかる。ジンが咳き込むと、リヨウは顔を背けたまま軽く笑った。

「リヨウ、今日はどうしたんだよ。女を連れてくるって言ってたのに連れてこないし、妙に不機嫌だし……何か嫌なことでもあったのかよ」

途端、リヨウの雰囲気が変わった。

相変わらず道路の方を向いているので表情は見えないが、リヨウの無言の圧力を感じ取り、ジンはそれ以上話すのをやめて取り出したタバコを箱の中に戻した。

その時、二人の前に三人の男が現れた。年頃はリヨウ達と同程度で、いずれも髪を派手な色に染めている。男達は車の周りを取り囲み、二人を睨みつけていた。

「……誰だっけ、こいつら？」

リヨウの問いに、ジンが慌てて返事をする。

「知らないのか？ こいつらが俺達の縄張りを荒らしてる奴らだよ。この前言ったじゃないか！」

「……そうだっけか？」

リヨウはジンの説明を聞きながら男達を眺めた。

すると、三人の中から体格のいい男が歩み出てリヨウの近くにやってきた。

男はリヨウよりも背が低く、よく鍛えられて引き締まった体をしていて、典型的なラップグループのような服装に身を包み、絶えず薄く開かれた厚い唇の間から、金色の犬歯が覗いている。

「いい車だな、神野？」

男はマスタングの車体を軽く叩いた。男の拳には銀色の大きなナツクルが詰められており、表面に『POWER ORDER』と彫られている。

男は拳を車体に押しつけ、そのまま横に滑らせた。ナツクルと車体が嫌な音をたてる。男は厚い唇に薄笑いを浮かべて話し始めた。
「お前がこの街のリーダーなんだってな？ だがそれも今日までだ。」

これからは俺達、K i l l e r - B e eがこの街を仕切る。わかつた……ギャツ!？」

「おっと、悪い悪い。もしかしたらその顎が燃えるんじゃないかと思つてな……確か、脂肪つて燃えるんだろ？」

リヨウは面白そうに笑うと、顎を押さえて呻いている男の前にタバコの吸い殻を投げ捨てた。

「て……つめえっ!」

男が血走った目でリヨウを睨みつけ、残りの二人も左右に別れて身構える。

「ジン。お前の言う通り、土地の値上がりが原因かもしれないな」
リヨウは右耳のピアスを指で弾き鳴らした。

P M . ? ? ? ?

夢を見た。

夢の中で、僕は大きな車の後部座席に座っていた。

車内は薄暗く、小さな室内灯に照らされて、シートの赤い色がかるうじて見分けられる。

外には雨が降っており、窓についた水滴が光を閉じ込めながら次々とガラスを横切っていく。水滴の角度から考えるとかなりのスピードで走っているはずなのに、エンジンの振動はほとんど感じない。窓ガラスに側頭部を押しつけると、表面についた水滴が髪に染み込み、ひんやりとした感触が伝わってきた。

「……この車は何処に行くんだろっ？」

僕は外を眺めながら呟いた。

すると、窓の外に遊園地の風景が現れた。美しくライトアップされたアトラクションの数々が、雨の夜空の下で騒がしく動いている。「何処にも行きはしないよ」

突然の声に振り返ると、僕の他には誰も乗っていないと思っていた後部座席に一人の男が座っていた。

夢の中だからだろうか？ 男の位置がひどく遠くに見える。顔も服装もよく見えないが、体格は僕と同じくらいだろうか。

「……どういうことだ？」

僕は体を起こして声をかけた。

「簡単な話さ」

男は話し始めた。この声……何処かで聞いたような気がする。

「この車には運転手がない。それにハンドルは少し左にきつたままで固定してある。だからいつまでも同じ所をグルグルと回っているだけだ。この車は何処にも行かない……いや、行けないのさ。簡単な理屈だろ？」

「危なくないのか？ 運転手がないなんて」

どうも落ち着かない。相手の表情が見えないせいかな？

「危ないことなんか何もない。この車は誰ともぶつからない、誰も乗せることはない、誰に傷つけられることもない……そして何処にも着かない。いい車だ」

男は笑ったようだった。声はしないが、シルエットが少し揺れている。

「本当にいい車だ。ここは居心地がいい……一生こっししているのも悪くはないな」

「……冗談じゃない、これから下ろしてくれ」

男の不自然に陽気な態度が僕の不安を増長させる。男は嘲るような口調で言った。

「そんなこと少しも思っちゃいけないくせに……」

途端、車の速度がいきなり上がり、僕は反動で姿勢を崩した。凄いい速さで窓の外の景色が回転し、ミキサーにかけられた果物のように各々の輪郭を失ってゆく。

男の姿が、遊園地の景色が、すべてが闇に溶け込むようにして消えてゆく。

「お前は誰なんだ!？」

僕が叫ぶと、地の底から響いてくるような声が車全体を揺らした。

「ここから出たくないんだろう？」

……そして目が覚めた。

P M . 5 : 4 5

目を覚ますと、一人の男の姿が見えた。

男は白いシャツの上に人形のように横たわり、僕を見つめていた。痩せた体で手足が細長く、藁人形のような体型だ。

安っぽい服装は、何処か体に合っていない。

顔はまあ端正と言っていていい方だったが、ひどく虚ろな目と生気のない表情が、男の全体的な評価を落としている。

まるで地球で迷子になった宇宙人みたいだ、と僕は思った。

そう、確かにその男は、何処か人間になりきれていない感じがした。

数秒の混乱の後、僕はそれが鏡の天井に映った自分の姿であることを確認した。

バスルームの扉が開き、バスタオルを体に巻きつけたドロシーが出てきた。

「……あ、目を覚ましたの？ 良かった、やっぱり殴って気絶させたのは悪かったかなって思ってたさあ」

ドロシーは長い髪を拭きながらベッドの横を通り過ぎた。僕はドロシーの姿を眺めてからもう一度目を閉じた。

ドロシーへの怒りはもうない。それよりも自分に対する嫌悪の方が心を満たしていた。

「……ここは何処だ？ どうして僕たちはここにいるんだ？」

「なかなか哲学的な質問ね」

ドロシーは部屋にあった小型の冷蔵庫を開けながら僕の質問を混

ぜつ返した。

僕は痛む頭を押さえながら起き上がった。少し考えて、ここが何処かはすぐにわかった。多分ラブホテルの一つだろう……確かあの本屋の近くにはこの類のホテルが多い。

部屋はかなり広く、妙に大きい円形のベッドと、古いテレビと冷蔵庫がある。

ベッドの脇には小型の机があり、僕の鞆が置かれていた。

「……哲学には果てしなく遠そうな所だね」

汚れた床を見回して、僕は呟いた。薄暗い照明で誤魔化しているつもりなのだろうが、掃除が行き届いていないのが簡単に見て取れる。天井の鏡は大きなヒビ入りだ。

「そうでもないわよ」

ドロシーはベッドの端に腰かけた。手には冷蔵庫から出したジュースの缶を持っている。

「だって、この上なら少しは人生を楽しめるもの」

「……それは確かに哲学的だね」

ドロシーは目を細めるとジュースを飲み始めた。

湯上がりの肌は薄く色づき、ほのかに湯気が立ち昇っている。黒い髪は流れるように肌の上を這い、小さな水滴が肩口に透明な飾りを作っている。

ドロシーがジュースを飲む度に、形の良い胸が上下した。

「どうやってここに僕を入れたんだ？ 受付で怪しまれなかった？」

僕はベッドに横たわって呟いた。

「新手のSMだって言ったら納得したみたいよ」

「……………」

ドロシーはクスクスと笑いながら僕の隣に横になり、腕を伸ばしてジュースの缶をベッドの脇に置いた。

体を伸ばしたせいで、バスタオルがずれそうになっている。ドロシーの均整のとれた美しい肉体は、野生の動物のように力に満ち、存在感があった。

鏡の中のドロシーを眺めていた僕は、その隣の僕自身の存在に気づいて目を背けた。

「……ねえ、これ何かな？」

ベッドの脇を探っていたドロシーが、何かに気づいて声をかける。途端、僕の下で金属音がすると、かなりの振動と共にベッドが回転し始め、周りにければしいライトがついた。

「な、何だ!？」

不意を突かれて混乱したが、間もなく僕はベッドが回転する機能を持っているのだと気がついた。それにしても……随分と昔にテレビや映画なんかでは見たことあるが、こんな物が本当に実在するとは知らなかった。しかも自分が乗ることになるとは……。

「ハハハ、楽しいね。まるでメリーゴーラウンドに乗ってるみたいだ」

吃驚して飛び起きた僕とは違って、ドロシーは楽しそうに笑っている。

僕を見つめる瞳が、誘うような光を帯びた。

「……メリーゴーラウンドは嫌いだよ」

僕は投げやりな動作で体をドロシーの方に向けると、彼女の肩をそつと抱いた。ドロシーの手が僕の背中に伸び、暖かな濡れた感覚が背中に伝わってくる。

ベッドは僕の頭の芯に鈍い振動を与えつつゆっくりと回転し続ける……何だか意識に霞がかかっているようだ。このベッドにはこんな効果もあるのだろうか？ 何となくデパートの展示台の上に乗っているような気もするが……。

ドロシーの手が僕の背中をまさぐり、首筋へと移動した。僕とドロシーの距離はほとんどなくなり、彼女の匂いや体温まで感じとれる。僕はドロシーの頬に手をかけ、唇を近づけた。

その時、僕の脳裏に嵐の中で回転するメリーゴーラウンドの映像が爆発的に広がった。滝のように降り注ぐ雨の中、狂ったように回転を続けるメリーゴーラウンド……赤や黄色やオレンジのライトが

嵐を切り裂いて光り輝いている。

「……何？ どうしたの？」

僕は頭を抱えてうずくまっていた。心臓の底が抜けたような虚脱感と敗北感が全身を支配している。

「大丈夫？ 体の調子が悪いの？」

ドロシーが再度心配そうに尋ねてくる。

「ダメなんだ……」

「……何が？」

「何もかもだよ、こんなことできない」

僕の言葉にドロシーは機嫌を悪くしたようだった。

「まあ、勝手にホテルに連れ込んで悪かったわよ、誘うようなこともしたしね。でも、アタシも殴ったのは悪いと思ってるし……貴方のことは結構気に入ってる。アタシってそんなに魅力ない？」

最後の台詞に妙に力を入れてドロシーが尋ねる。

「君は綺麗だよ。とても魅力的だ。でも僕に君を抱くだけの価値はないんだ」

「何それ。もしかして病気持ち？ それとも身体上の欠陥か何か？」

「……昔から何かが違うような気がするんだ。自分が普通の人間じゃないような気が……僕は人間じゃない、人間以下の何かだよ……だから君やカナちゃんに愛される価値もないんだ」

僕は自分でもよくわからないことを呟き続けた。両目から涙が流れているのがわかる。

「人を愛するのが恐いの？」

ドロシーは僕の前に横たわって言った。

「……怖いよ。何もかも恐いんだ、君もカナちゃんも……全て」

僕は目を開けて天井を見上げた。天井の鏡にはライトに照らされて歪んだ僕とドロシーが映り、ベッドの外の景色がゆっくりと回転している。

「まるでメリーゴーラウンドの中にいるみたいだ」

呟き、僕は天井を見つめ続けた。

天井の僕も僕のことを見つめている。そしてあの瞳の中には僕の姿が映っているはずだ。そして、やはり僕の瞳の中にも……。

その時、部屋の電気が消され、周囲のけばけしいライトも消えた。ベッドの回転が緩やかになり、横でドロシーが起き上がった気配がする。

「……まったく」

ドロシーは呟くと、バスタオルを外して僕を抱き寄せた。

「バカな男にはつき合いきれないわ」

ドロシーの肌は少し湿りけを帯びていた。二つのやわらかなふくらみの向こう側から、心臓の鼓動が伝わってくる。

完全な闇の中だというのに、そこはとても暖かい、心休まる空間だった。

「気にしない方がいいわ」

不意にドロシーが呟き、僕の顔に彼女の息がかかった。

「そんなことは気にしない方がいい。何も怖がる必要もない……貴方の恐れるものは貴方を傷つけることはできても、貴方を殺す力はない。戦わなければならないものは、もっと別のところにあるのよ」

僕にはドロシーの言っていることがよく理解できなかったが、不思議と不安が取り除かれたような気がした。

ドロシーは僕の背を軽く叩き、歌を歌い始めた。それは聞いたこともない言葉の、奇妙な歌い方の歌だった。しかし、その不思議な歌には何処か懐かしい響きがあった。

「……カッコ悪いなあ、僕はさ……」

呟き、僕はドロシーの体に顔を寄せた。

歌声が少し止まり、ドロシーの体が微かに揺れる。

僕は少し笑って目を閉じた。

再び流れ出した歌声を耳に、ドロシーの体温と動きを肌に感じながら、僕は瞼の裏を眺め続けた。

果てしなく続く暗闇の中で、世界がゆっくりと回っていた。

僕も世界の中心で胎児のように体を丸めながら、ゆっくりと回っ

て
い
た。

第二話「黄色い煉瓦で造られた交差点の話」 - 4

P M . 5 : 4 5

優雅な金属の破片が肌の上を滑っていく。その後を追うように、赤い血の筋が歪な十字を描いた。

「いいか？ この世の中で安心して生きていく方法は二つある。一つは誰にも邪魔されない力を得ること。もう一つは力ある者に従うことだ……何も恥ずかしいことじゃない。昔から国家っていうのはそうやってできてきたんだ。お前の親父も俺の親父もそうやって生きてきたんだ。ただ違うのは、その順番くらいだ。俺の親父だって負け犬の一人だよ。ただお前の親父は更に下の負け犬だ……聞いているか？」

リヨウはナイフの腹で地面に倒れた男の頬を何度も叩いた。よく詰まった脂肪が金属を弾き、薄っぺらな音をたてる。男は何とか目を開いて反応しようとしているらしいが、意識が混濁しているのだろう、微かに頭を動かすのみだった。この様子では自分の額に逆十字の傷がつけられたことにも気づいていないかもしれない。

商店街はそろそろ買い物客で混雑し始める頃だが、リヨウのいる細い路地に人通りはない。その代わりと言っては不足かもしれないが、地面に敷き詰められた灰色のタイルの上には赤い血が点々と飛び散っていた。

その時、ジンが戻ってきた。顔を上気させ首筋に汗をかいている。「あの二人は逃げてったぜ、リヨウ、やっぱりすげえなあ！ 何てったって三人相手だぜ？」

ジンは興奮冷めやらぬ様子で話し続けた。表情が柔らかいせいか、いつもより童顔に見える。

「なあ、そいつはどうするんだ？ ……殺すのか？」

ジンの質問にリヨウが悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「そうだな、殺すのも悪くない……」

そう呟くと、リヨウは逃走を試みて地面を這っていた男の尻を蹴り上げた。男がやけに高い悲鳴を上げて路上を転げ回る。リヨウは蹴った反動で崩れた姿勢を戯けた身振りですて直すと、地面に這いつくばっている男の前方に回った。

苦痛に耐える男の眼前、タイルの隙間にナイフを突き立てる。

「男の子だもんねえ、喧嘩もしたくなるよな？ 自分が一番強いって思いたくなるよな？ ……え？ それで女の子にもてたいって？」

リヨウは薄笑いを浮かべて一人で喋り続けた。

「よくわかるよ、その気持ち！ だって男の子だもんねえ。強くなつて世の中のおいしいところを楽しんで、沢山の女の子を犯すんだ……きつと楽しいよねえ」

リヨウは男の耳元に口を近づけた。男の顔には、明らかに先程までとは異なる汗が流れている。額の逆十字から汗と共に血が流れ、鼻筋を通って地面に落ちた。

「……だが、お前は負けた」

リヨウが甘い声で囁く。

「お前は負け犬だ。負け犬だ、負け犬だ、負け犬だ、負け犬だ、負け犬だ……」

執拗に繰り返される嘲りの言葉に、逆上した男が拳を突き出した。しかし一瞬早くリヨウが地面のナイフを抜き、男の喉元に突きつけた。

ナイフは男の喉を突き破る直前で止まり、汗の量が更に増える。

このまま顔が萎んでしまうのではないかと思われるほどに。

「……わかったな？ お前は負け犬だ」

リヨウの言葉に、男がぎこちなく頷く。喉のナイフを意識しながらの動きだったので、喉の筋肉が必要以上に緊張し、ぶるぶると震えている。

「負け犬に待っているのは服従か死だ。どっちがいい？」

リヨウは男の瞳の中に服従の色を感じ取りながら、ナイフを再び

タイルの隙間に刺した。

「ナイフが汚れている……お前達の血だ。汚いと思うよな？」

男がもう一度頷く。リヨウはニッコリと微笑むと、

「舐める」

短く命令した。リヨウの目は冷たく……最早人間を見る目をしていなかった。

一瞬の沈黙の後、男が舌を伸ばしてナイフの刃を舐め始めた。

「情けないなあ、こいつ……」

ジンはリヨウのそばに寄って話しかけた。

リヨウは男の舐めているナイフを足で押さえつけていた。男は舌を傷だらけにしながらもナイフの刃を舐め続けている。

「……何か言ったか？」

男を見下ろしていたリヨウが不意にジンの方を見た。

ジンは妙な違和感を覚えた。まるで出来の悪いロボットが、いきなり首を動かしたように不自然で急な動きだったのだ。

リヨウの目からはまったく感情が読み取れず、まるでカメラのレンズのようだった。

「……いいや、何でもない」

ジンは自分が実験用の動物になったような感覚に襲われて言葉を濁した。

「おい、いつまでやっているんだ」

リヨウは抑揚のない声で呟くと、地面からナイフを抜いた。その拍子に唇の端を切られた男が悲鳴を上げて上体を起こす。

「いいか、このことは警察には話すな。もし言ったら殺す……わかったな？」

リヨウの言葉に、既に意識があるのかどうか、虚ろな目をした男が頷く。

男の口からはジンが気持ち悪くなるほどの血が流れていたが、本人はあまり痛みを感じていないようだ。

「ちっ……却って汚れちゃった……」

短く舌打ちし、男の服でナイフの刃を拭う。

次の瞬間、リヨウは男を蹴り飛ばし、男は頭を地面に打ちつけて気絶した。

「……ジン」

リヨウがジンの名を呼ぶ。ジンが緊張しながら返事をする、リヨウは魔法が解けたようにいつもの雰囲気を取り戻していた。

「パーティーに行こうか？　そろそろみんな集まってきているはずだ」

リヨウはナイフをしまうと、男には目もくれずに歩き出した。

慌てて後を追おうとしたジンは、自分が大量の汗をかいていることに気がついた。

P M . 6 : 3 8

アユミという女がいた。

彼女は高校二年生で、リヨウの仲間の一人だった。

身長は百五十過ぎ、脱色した髪に日焼けした浅黒い顔をしていた。体つきは全体的に脂肪がつき、かなり遅しかったが……本人はダイエットを生き甲斐にしていたらしい。

彼女は中学から大学までエレベーター式に進学できる私立学園に通っていたので、浪人生の僕をバカにした態度をとることが多かった。小学生の頃の彼女がどれほど成績優秀で、どんなに苦労して難関の中学に入ったかということ、僕は何度聞かされたことだろうか？　実際、僕は彼女が入学試験中三教科目にお腹が痛くなったことだっけ知っているくらいだ。

まあ……確かに当時の彼女は成績が良かったのだろう。学校のレベルから考えると納得のいく話だ。

しかし、今現在の彼女が小学生時代のボキャブラリーの半分でも持っているかどうかについては甚だ疑問だ。先程紹介したような自慢話を除けば、僕は彼女がテレビドラマと化粧品と男以外のことを

話しているのをほとんど聞いたことがない。音楽は聴くようだが、彼女が聴く音楽には頻繁にテレビで放送されるか、最低でもヒットチャートの上位に入るといふ条件が必要であり、彼女はテレビで名前を見ない、もしくは彼女が興味を持っていないアーティストは全てくだらないものだとの考えを持っているようだった。

個人的には、彼女の知識と見識の狭さと、自分の考えへの頑固さについては賞賛を贈りたいほどだ。一度、僕が彼女に些細な間違いの指摘……天動説を説いたのはニュートンではなくコペルニクスだということ……をしたら、逆に怒られたことがある。彼女が言うには、そんなことを知っていることの方が変なのだそうだ。

アユミという女について僕が話すことはこれくらいだ。つけ加えるなら、彼女はリヨウに抱かれたがっていた。しかし彼女とリヨウとが最終的にどのような関係に至ったのか、僕は知らない。

ここまで話してきた内容から、僕が彼女に好意を持っていないことはわかってもらえただろう。実際、彼女は僕が苦手とするタイプの女性の一人だったし、向こうにしても僕のこととは異性としての対象外だったはずだ。

しかし世の中というのは不思議なものだ。

例を挙げるとすれば、それは僕が彼女と寝たということだろうか。

P M ・ 6 : 3 8

玄関のベルが鳴った。

何をするでもなく壁の時計を眺めていた僕は、反射的に椅子から立ち上がると玄関へと急いだ。

ドアの前に立ち、身なりを整えると、僕は一気にドアを開けた。そこには制服姿のアユミが立っていた。アユミはベルを鳴らすことに集中していたが、ドアが開いたのに気づくと手を止めて僕を見た。

アユミは肩から白い鞆を下げしており、鞆には小さな人形が数体ぶ

ら下がっていた。怪我をしたのか右膝に大きな絆創膏を貼って上から医療用のテープでとめている。

「……待つてたよ」

僕はアユミの機嫌の悪さを感じながらも無理に笑顔を作った。

「今、何時？」

アユミは僕を押しやるように中に入った。

「六時三十八分だよ……もしかしたら三十九分かもしれないけど」

アユミは軽く鼻で返事をすると思手に入り込んで部屋を眺めた。怪我のせいか右膝を軽く引きずっている。

「変な部屋。何もないんだ」

「……約束は五時のはずだろ？……何かあったのかい？」

「別に何も。友達とカラオケに行ってただけ。だから喉が乾いちゃったわ、何か飲み物ある？」

僕が冷蔵庫に牛乳があるとと言うとアユミは機嫌を悪くした。

「アタシが牛乳嫌いなもの知ってるでしょ？ 飲むとお腹痛くなるんだから！ アンタとは違ってアタシは繊細なの、わかる！？」

アユミは冷蔵庫を開けて中から飲みかけのウーロン茶のボトルを取り出した。ろくな物がないわね、と呟く。

「……それなら外に食べに行かないか？」

僕が必死に不快感を抑えながら尋ねると、アユミはいかにも面倒臭そうに断った。

「やりたいんでしょ？ だったら、さっさと始めなさいよ」

アユミが空になったウーロン茶のボトルを捨てて。そして口の周りを拭くとベッドの方に歩き出した。

「誘ったのは君の方じゃないか……」

僕は服を脱ぎ始めたアユミから目を背けて呟いた。こんな言い方は言い訳っぽくて嫌いだ。自分でも情けないと思う。今にも彼女は怒り出し、帰ってしまうかもしれない。

しかし次のアユミの言葉は、完全に僕の予想を裏切るものだった。「アタシだってリョウに言われたんじゃないや、アンタなんか誘わ

ないわよ」

「……何だつて？ 何て言った？」

僕は彼女の言ったことが理解できなかった。

アユミはカッターシャツのボタンを外す途中の手を止めて叫んだ。

「リヨウに言われたのよ！ アンタと寝たら俺も抱いてやるって！

あいつは女を知らないから教えてやれって……そうじゃなきゃ、

誰がアンタみたいな浪人男を誘うっていうのよ！ どうしてこのア
タシが！」

僕の中で、もしかしたらアユミが僕に好意を持っているのかもしれない希望が音をたてて崩れた。誘われて以来、僕が今日という日に
どれだけの期待と不安を抱いていたか。

いや、アユミに僕の心情の理解を求めるのは酷というものだ。彼女
は常に自分の感覚や価値観のみで物事を考える。そしてそこから
導き出される解答、それに続く行動は非常に純粋なものだ。好きな
男に抱かれる為に、嫌いな男を誘うくらいに……僕は本当に彼女の
ことを尊敬すらしている。

……しかし、どうしてリヨウはアユミにそんなことを言ったんだ？

椅子に力なく座り込んだ僕の前にアユミが立った。

彼女は制服を脱ぎ捨て、下着とだぶついた靴下のみを身につけて
いた。右膝の絆創膏が痛々しい。

「どうするの？ するの？ ……しないの？」

アユミの表情は陰しく剥き出しの敵意が現れていた。妙な話だが、
僕はこの時初めてアユミのことを綺麗だと思った。

冷静に考えれば答えは一つだろう。アユミとはこのまま何もせず、
リヨウにはアユミと寝たと嘘をつく。そうすればアユミはリヨウと
想いを遂げ、僕らの関係にも傷はつかない。もしかしたらアユミは
僕に感謝して好意すら持つてくれるかもしれない。

勿論、寝たりはしないだろうが、いい友達にはなれるかもしれな
い。

だがそれは、あくまでも冷静に考えれば……だ。

その頃の僕は受験に失敗し、浪人生活にも行き詰まっていた。リョウ達の他に特に知り合いと呼べる者もなく、一日に誰とも会話しない日が多かった僕は、人との親密な交流に飢えていた。それが女性とのものであれば尚更だ。

当時の僕を満たしていたのは果てしない挫折感と孤独感、それに抑えがたい性欲だった。

僕は人の温もりを必要としていた。

「……約束は守れよ……リョウに言うよ……」

僕は床に視線を落としたまま呟いた。アユミがあからさまな蔑みのため息をもらす。

「アンタさあ、最低だよな」

……僕だっけそう思う。

「それで？ どうなったの？」

「……別に……やったんだよ」

微かにドロシーが息を吐くのが聞こえ、ベッドのスプリングが軋んだ。

「よくは覚えていないんだよ……初めてだったし、頭の中が真っ白になって、緊張して……いや、これは違うな。僕の場合そうじゃないんだ。逆に頭は妙に冷静だったよ。緊張はしたけどね。何て言うか、もう一人僕がいて、それが慌てている僕を眺めているような感じだった……そうだ、昔小学校の体育の時にもそんな感じがしたな。僕はクラスで一番運動が苦手だったから、何をやってもうまくいかないんだ。野球とかやってて思うんだよ、どうしてバットを球に当てることくらいできないんだろうってね……あんまり関係ないかな？」

僕は少し手を伸ばした。ドロシーが近くにいると思ったが、手は何にも触れなかった。

「……まあ、別に慌てたり迷ったりするほど、僕がやらなければならぬことはないことはなかったんだ。彼女はもう服を脱いでいたし、ベッド

にも寝ていた。少しだけ明かりもついてたから彼女が何処にいるのかもわかった。日焼けしてない部分で、彼女が実は色白だったこともわかったよ。それと彼女が本当に僕のことを嫌悪しているのもわかったね」

バッテリーボックスには強い風が吹いていた。さっきまで砂をいじっていたベンチの裏とはかなり違う。

僕の前にはピッチャーの大柄なクラスメイトがいて、僕をバカにした目で見ていた。ベンチには同じチームの男子と数人の女子、それと担任の女の先生がいて、数人の者が声を出していた。多分、「やればできる」とか「がんばれば打てる」とか言っているのだ。そして僕は、同じベンチに座っている数人の男子が僕の方を諦めたような顔で見ていることに気がついていた。

運動が得意な彼等はクラスの中心的な存在で、その栄光は教室よりもグラウンドで多く示された。実際、この授業は彼等の栄光を高める為だけにやっていると言ってもそれほど間違いではない。僕は彼等の大半が僕と同じチームにいるので、今日は僕のチームが勝つだろうと考えた。

彼等は次の打者のことを相談していた。

その時、僕は自分が打てないということを確信した。

……実際にそうだったんだけど。

アユミはキスをすることを許可しなかった。僕が行為を終えるまでの時間を少しでも引き延ばすことを許可しなかったのだ。

僕のおすべき行為は二つのみとなった。つまり、『入れて』『出す』のだ。例え二人の間に何の愛情も信頼も快樂もなくても、『入れて』『出す』だけで行為は終了を迎える。

手続きというものは幾らでも簡略化できるものだ。

初球はストレートだった。ボールは山なりの軌道を描きながら僕

の前を通過した。僕はバットを振ったが、かなり振り遅れた。

ベンチの方から「よく見て打て」と声がかかる。担任の高い声が一番耳に障った。

僕は自分がやらなければならないことを考えた。ボールを『よく見て』『打つ』のだ。

二球目は、バットが遥かにボールと違う軌道を通った。

「30cmはずれてたかな？」

僕はそう判断した。頭の大部分は恥ずかしさとやり場のない怒りで混乱していたが、何故か片隅の方では、そんな自分の醜態を冷静に観察していた。

ただ残念なことに、この冷静さはボールを『打つ』ことには何も役立たなかった。

三球目はバットを振る前にボールがミットに到着した。多分、『よく見る』ことに集中し過ぎたのだろう。

僕はどんな表情でベンチに戻ろうかと考え始めた。

アユミの体は締めまりなく柔らかかったが、包み込むような暖かさがあった。僕は少し安心した。思ったよりもアユミの肌が心地よかったからだ。

その時、僕はアユミに見つめられていることに気がついた。

部屋は暗かったので、アユミが本当に目を開けていたのかどうかはわからない。しかし僕には彼女の視線がはつきりと感じられた。そしてその視線には何の感情もこもっておらず、まるで理解の及ばない未知の生物を見つめているようだった。

「目を閉じてくれないか？ 見つめられてると何もできない」「……じゃあ、これでいい？」

アユミは僕に背を向けると四つん這いになった。

僕が何も言えずにいると、アユミは急に可笑しそうに笑い出した。声を上げてケタケタと……多分、本当に可笑しかったのだろう。

野球の試合は、予想通り僕のチームの勝利に終わった。

お前がいなければ、もっと点が取れてたんだからな、とチームの一人が言った。

それを聞いていた担任が彼を怒ったが、僕は実際にその通りだと思っていたから別に嬉しくなかった。

小学校における僕の体育以外の成績は良く、僕は担任のお気に入りであったようだ。しかし僕は担任のことがあまり好きではなかった。彼女は成績で人を判断したし……僕は彼女の丸い顔に張りついたような笑顔が恐かった。

「それでしたわけ？ ……どうしてそこまで？」

「知らないよ。DNAに聞いてくれ」

僕はドロシーの体を探しながら呟いた。

「初めてだったしね……その頃はセックスをすれば何かが変わると思ってたんだ。何かがね」

確かに気配はあるのに、ドロシーの位置がわからない。その時、僕は彼女が自分のことを魔女だと言っていたのを思い出した。

「……でもね。結局何も変わらなかった……希望がなくなった分、前より酷くなったくらいだ。あつという間に終わったしね。彼女はすぐに帰ったよ。気分が悪くなったって言ってた。本当に何もいいことはなかったんだ。でもね、僕はまだ彼女の体温を覚えているんだ。そして落ち込んだ時にはあの温もりを思い出す……こんなことを言っても彼女は気持ち悪く思うだけだろうけど……それが僕を支えてるんだよ」

あれからすぐにアユミは学校で問題を起こして退学になり、この町から消えた。聞いた話では地方の親戚の店で働いているらしい。

彼女は確かに良い生徒とは言えなかっただろうが、問題を起こすような要領の悪い性格でもなかった。何故、彼女がそんなへまをやらしたのかはわからないが、彼女が幸せに過ごしていればいいと本当に思う。

「笑っちゃう話だよ。リヨウなら何て言うかな？」

その時、僕は不意にドロシーが本当に部屋にいるのか不安になった。

「ドロシー？ …… ねえ、聞いてる？ 本当にここにいる？ …… ドロシー？」

僕は飛び起きてベッドの上を探した。その時、部屋の窓が開けられた。壁の一部が四角く切り取られ、群青の夜空と入れ代わる。そしてそこには、夜空に背を向けて立つドロシーのシルエットがあった。

「ちゃんと聞いてるよ。アタシはここにいる…… 心配しないで」
「…… そうか、良かった…… 本当に」

僕はやわらかな枕に頭を埋めて呟いた。

その時、何故か涙が自然に零れ出た。

頬を伝った涙は、自分のものとは思えないほどに暖かった。

第二話「黄色い煉瓦で造られた交差点の話」 - 5

PM・7:45

「久し振りに泣いたせいかな？ 何かすっきりした気分だよ」

僕は大きく背を伸ばし、深呼吸をした。

「……何もしなかったのに？」

ドロシーが呆れたように言う。

「やっぱり、貴方何処かおかしいんじゃない？」

「実はね、僕は宇宙人なんだよ」

僕が軽く受け流すと、ドロシーはバカにされたような顔をしたが、すぐに吹き出した。

「ハハハ、宇宙人と魔女の組み合わせか……悪くないね」

僕らは無断で近くのマンションの屋上に上がり込み、缶入りの紅茶で宴会を開いた。街を通り抜ける風は強く、気温は低かったが、これはこれでそれなりに洒落たお茶会だ。時計を持ったウサギがないのが残念だが……あれ、気狂いの帽子屋とお茶を飲むのはドロシーじゃなかったっけ？

「夜景が綺麗ね。まるで星の海みたい」

ドロシーが紅茶の缶を片手に呟く。

周囲に高い建物のない十二階建てのマンションの屋上からは、近くのラブホテル街から繁華街の明かりまでよく見えた。昼に斉藤と揉めた歩道橋はどの辺りだろう？ こうして上から眺めていると、何もかもが小さく見える。

「……僕には遊園地に見える。バカ騒ぎの繰り返しだよ」

「見解の違いつてやつね」

ドロシーは手すりに腰かけると、風に乱れる長い髪を手で押さえつけて振り返った。

「そうだね。昔から、遊園地って言葉をよく連想するんだ……どう

してかな？」

「昔、迷子にでもなったんじゃない？」

「そうかもしれない。何て言うか、いつも何処かに閉じ込められているような気がするんだ。メリーゴーラウンドみたいにグルグル回っているんだよ」

「アタシもメリーゴーラウンドは嫌いよ。だって何処にも行けないんだもの」

僕はドロシーの隣に腰かけた。

「君は何処に行くところがあるのかい？」

ドロシーは僕の方を見ると、何処か含みのある微笑みを見せた。

「アタシは海へ。それからその向こう、朝開きの海の彼方へ……」

「……何なんだい、それは？」

「トップシークレットよ。お楽しみがなくなるわ」

僕はドロシーの奇妙な言動にはとづくに慣れていたので、特に気にすることもなく話を続けた。

「目的があるっていうのはいいことだね。僕は何処にも行けないよ。僕の時間は止まっているんだ。ここからは抜け出せない」

「時間と友達じゃないのね」

「僕は魔法が使えないからね」

冗談めかして言うと、ドロシーはクスクスと笑って僕の胸に顔を寄せてきた。

僕はドロシーの肩を抱き、引き寄せて抱き締めた。すぐ近くに彼女の心臓の鼓動を感じる。このまま抱き締めていれば、いつか僕らの心臓は一つになることができるだろうか？

「何が見える？」

僕はドロシーの耳元に口を寄せて囁いた。

「ビルの上に綺麗な星が見える。オレンジ色の小さな星」

ドロシーは僕に抵抗することもなく体を委ねていた。僕の問いに答える時に、胸の中を空気が移動するのが感じ取れた。

「僕は違う所を見てた。不思議だね、こんなに近くにいるのに別の

所を見ているなんて」

「貴方とアタシは違う人間だから……」

落ち着いた声でドロシーは言った。

「そうだね、違う人間だから違うものを見るんだね……でも、少し悲しい」

「どうして？」

「……昔、恋をすれば一つになれると思っていたから。恋をすれば、その人と一つになれるって……そうすればもう寂しくない」

「それは無理よ。他人は他人、貴方は貴方よ」

「……そうだよ」

ドロシーは軽く息を吐くと言った。

「他人が何を見ているかはわからないわ。でもそれを聞くことはできる。聞いてよく考えれば理解もできる。決して一つにはなってくれないけど、そうすれば世界は広がるわ」

僕はドロシーの肩に額を当てて目を閉じていたが、顔を上げると本当に街の明かりが星のように見えた。

世界は一つではない。住む星が同じでも、それを眺める者の数だけ異なる世界が存在する。そして世界は、眺める者の立ち位置によってもその姿を様々に変える。

その者の考え方、信仰する宗教、社会的地位、脳の構造、その時の感情……複雑な条件に応じて世界は様々に姿を変える。僕が美しいと思うこの世界は、アナタにとっては吐き気を催すものであるかもしれない。

僕は地上に降り注いだ数多くの星を見つめた。あの星の中では、僕と何の関係もない人達が生活しているのだろう。家族で夕食の途中だろうか？ 一日の話をしているのだろうか？ テレビを見ているのだろうか？ あるいは夜空の星を眺めているかもしれない。

そして僕は離れたところからそれらを眺めている。多分、誰も僕のことには気づきはしないだろう。そして僕もあの星の住人達のこと

を何も知らない。それでも僕は星を眺め、彼等は生活を続けている。幼い頃、僕は自分が世界の中心にいると思っていた。

自分から見えない所で人が動いていることを自覚していなかったのだ。

しかし世界は一つではない。僕もアナタも一つずつ世界を持っている。それが重なることも衝突することもないかもしれない。アナタは僕とは何の関係もなく人生を終えるかもしれない……そしてアナタは、世界を酷い所だと思っているかもしれない。

それでも僕は、この世界はそれほど悪くないと思っている。僕にはそう見えるのだ。

アナタには世界はどう見えるのだろうか？

「そろそろ行こうか？」

永久に続くかと思われた時間は、ドロシーの言葉によって終わりを告げた。

「行くつて……何処へ？」

「九時から約束があるんでしょ？」

「スケアクロウでの集まりのこと？」

僕は不機嫌に呟きながらドロシーの体を求めた。

「別に行く必要はないよ。あいつらとの関係はうまくいってないし、会いたくない奴も多いし……」

それにしても、ドロシーはどうしてスケアクロウのことを知っているのだろうか？ カナとの話を聞いていたのだろうか？

「正直、行きたくはないんだ。君は知らないだろうけど、あそこには僕の良くない仲間がいる。僕はそいつらとはもうつき合いたくないんだ」

「……そうなの」

僕はドロシーの肩を両手でつかみ、少し体を離して彼女の瞳を見つめた。月の光に照らされて、ドロシーの瞳は美しく輝いている。

人の目をまっすぐに覗き込んで話をするなんて、生まれて初めて

かもしれない。

「僕は君のことが好きだ」

自分でも意外なほどに流暢に、想いが言葉となって流れ出た。言ってしまう後は楽だった。ただし自分の声が自分のものではないような気がしたが。

「僕は君といると……何て言うか、気取らなくてすむし、とても楽なんだ。君はとても変わっているけど……そこが魅力的なんだ」

変わっている、という言葉は愛の告白に使ってもいいのだろうか？ 少し疑問に思ったが、それでも僕は言葉を続けた。

「僕は君といれば変われそうな気がする。まだ出会ってから丸一日もたつてないけど、僕には君が必要なんだ」

「……それは……」

ドロシーは、彼女には珍しく言葉を詰まらせると目を伏せた。

僕の勘違いでなければ、彼女の瞳は悲しげだった。しかし数秒の沈黙の後、再び僕を見つめた瞳には、いつもの悪戯っぽい光が宿っていた。

「ダメ、アタシは行くところがあるんだから」

ドロシーは屈託なく微笑むと、踊るようにして僕の手を振りほどき、後方に逃れた。

「どうしてだ？ ……どうして僕じゃダメなんだ！？」

僕は叫ぶようにドロシーの背中に呼びかけた。

ドロシーは僕に背を向けたまま階段への歩みを止めた。ビルの谷間を吹き抜けた一陣の風が僕達の間の空気を押し流し、ドロシーの長い髪が音をたててはためく。

「……ほら、パーティーに遅れるわよ」

風がやんだ時、ドロシーは笑顔で言った。

PM・8:00

「知ってる？ 自分の声って耳の骨に響くから、自分では少し低く

感じるんだって。ってことはさあ、私の声は自分で感じてるより高
いってことよね……ねえ、クミ。私の声って高いかな？」

雑誌を読んでいたカナは、小さなコラムに目を止めて隣にいるク
ミに話しかけた。

「知らないわよ、そんなこと。私は貴女の頭の中に潜り込んだこと
はないから、貴女が自分の声をどれくらいの高さに感じているのか
なんてわかりっこないわ。個人的な感想としては、貴女の声はバカ
みたいに高くはないと思う。ただしデリケートな作業を行っている
時にはかなり神経に障るけど！」

リズムカルにキーボードを叩きながら、クミは少し怒ったように
答えた。

江藤久美はカナと同じ年の少女だ。かなり背が高く、長い髪を無
造作に後ろで束ね、厚めの黒縁の眼鏡をかけている。服装は大きめ
の白いブラウスと、くすんだ色合いのロングスカートだ。

「それはゴメンね、クミ。それにしてもクミは面白いこと考えるね。
人の頭に潜り込んだことはない……か。そうだね、一度、人の頭の中
に潜り込んでみたいね。男とかがどんなことをしてるのか気にな
るよね。特に私を抱いてる時なんて、男はどんなことをしてるのか
な？」

カナは机に肘をついて考え込んだ。こちらは制服から着替え、体
にぴったり合った黒のセーターと短めのチェックのスカートを身に
つけている。薄らと目元に施された青色の化粧が、カナの瞳に更に
光を与えている。

そばにはティーカップが置かれ、白い湯気を立ち昇らせていた。
上品に顎に添えられた指はなめらかな曲線を描き、黒い睫と瞳は濡
れたように深い色をしている。

「やっぱり、射精する時は大したことを考えてなさそうだよね」

カナは髪をかき上げて笑った。

「……私は貴女の発想の不謹慎さの方が不思議だわ」

クミはキーボードから指を離し、背もたれに身体を預けた。

「ほら、これで貴女が朝に会った男が何か言ってきたても大丈夫よ。携帯からの操作一つでインターネットを通じて警察と会社に売春のことが伝わるようにしてあるから……勿論、貴女の名前や存在は一切出ないけどね」

「流石はクミね」

カナが褒めると、クミは少し頬を赤らめてそっぽを向いた。

二人がいるのは狭い単身者用マンションの一室だった。隙間なく並べられたパソコン等の機材と専門書によって、一層狭くなっている。

クミはカナの中学生時代からの友人だ。彼女はカナと同じ中学校に通っていたが、三年生の春から不登校を始め高校には進学していない。今は親の名義で借りているこの部屋で一人暮らしをしており、カナ以外は誰もこの部屋にやってくることはない。もともと、少し前に大きな地震があつてからしばらくの間は、カナもこの部屋には寄りつかなかったが。

そしてまた、ここは若松加奈と江藤久美によって経営されるデイトショップ『K&K』の事務所でもある……いや、あつた。

「大体、カナには援助交際なんて無理だと思つてたわ」

「そうかな？ 一番効率のいい仕事だと思つただけだなあ」

「カナ。貴女は結局、自分が一番可愛いと思つてる。そんなタイプは援助交際なんてしない方がいいわよ」

「クミは自分が嫌いなね」

カナが呟くと、クミはため息をついてキーを叩いた。

「貴女は結局、自分しか愛していないのよ。みんなが自分を愛してくれると思つてる……貴女は他人を利用していただけよ」

「……何かあつたの？ クミ。機嫌が悪いけど」

クミはモニターから顔を遠ざけると、夕食用のハンバーガーを口にした。

「別に。ただ前から言いたかつたのよ……今日は色々あつたしね」
カナはクミが不機嫌なことには慣れているので、慎重に穏やかな

口調で話を続けた。

「確かに私は自分を中心に考えるけど、それを悪いと思ったことはないよ。自分を傷つけるほど他人に奉仕するのは間違ってると思うしね」

「悪かったわね、どうせ私はろくでもない男に騙されたわよ」

カナは眉をひそめた。

「別にそんなことは言っていないよ」

クミが恋をしたのは中学二年の冬のことだ。

普段のクミは落ちていた雰囲気の近寄りがたい優等生に見えるが、実はそれは本当の彼女ではないということを、カナはその時に知った。

彼女の他人への距離の取り方は極端だった。必要以上に遠ざけるか、自分をなくすほどに近づくか。その二つしかない。

彼女は学内では本当の自分を出していなかった。勿論、成績が良いののは誰もが知る事実だったが、まるで他人が自分の私生活を知れば自分が死んでしまうと信じてでもいるかのように、自分の考えや意見を口に出すことがなかった。

実際、少女漫画やアイドルグループに憧れる内気な少女であることは、学校でもカナしか知らないことだったのだ。

自分とは対照的なカナに、どうしてクミが自分の内面を曝け出したのかはわからない。カナがその時点から学校の外の世界を眺めていて、同じく学校と距離を取っていたクミがそれに憧れたのかもしれないし、お互いに親とはうまくいっていなかったからかもしれない。対照的な二人だが、根元の部分で繋がるところがあったのだらう。

しかし恋愛の仕方はかなり違った。

クミが恋をしたのは年上の男だった。カナから見ると偉そうなことを言うだけの何の実力もない高校中退のフリーターだったが、クミは彼に異常なまでに心酔していた。

確かに、内気なクミが明るくなったのはカナもいいことだと思っていた。しかし問題なのはその関係だった。

男は会う度にクミに金を要求した。計画的で無駄使いをしないクミは、中学生としてはかなりの額の貯金を持っていたし、またクミの親も子供には金さえ与えておけばいいと思っているタイプだったので、クミが男に渡した金額はかなりの額になった。

しかし、所詮は中学生だ。自由にできる額には限りがある。クミは次第に男に金を渡すのが困難になっていった。

クミが男と別れた……いや、捨てられた時、彼女の心と体は既にボロボロになっていた。カナはクミが男と別れたことに安心していったが、事態は更に厄介な方向に進んだ。

クミは男にどんなに酷い目にあわされても男を恨むことはしなかった。それどころか自分に責任があるように思い込む傾向があった。そしてまた、クミはその年頃の少女としては大柄でしっかりとした体格だったが、本人は女らしくないと気にしていた。この二つに失恋が拍車をかけたのだ。

クミは食事の量を極端に減らし、無理なダイエットを始めた。同時に、学校を休むようになった。毎日のようにクミの家に通ってダイエットをやめさせようとしていたカナは、ついにクミから話を聞き出した。

「だって……彼の隣に別の女がいたの……私より綺麗で、痩せてる女が……それで彼が私のことを、太ってて嫌な女だって……だから私はもつと痩せなきゃ……そうしないと彼が会ってくれないもの……」

そう言って、骨と皮のみの体となっていたクミは飲んだばかりの牛乳を吐き出した。

カナはその時に思ったのだ。自分が彼女についてあげなければ、と。

クミの男への想いを断ち切らなければならない。実の娘のことに無関心なクミの親はあてにならない。

カナは自分の手でクミを立ち直らせると決意した。

「何度も言ううただけどさ、私は恋愛でも自分を第一に考えるべきだと思うよ。誰かの為に自分を捧げるっていうのは、それはそれで凄いことだと思っけどさ。それでも私は自分の意見を持つべきだと思う。恋愛はビジネスと同じだよ。お互いの利益にならないなら別れるべきだよ。私達は男の奴隷じゃないわ、人生の取引相手よ」

「それはね、カナは可愛いから。カナだったら男は幾らでも寄ってくるもの。楽しかった？ 汚いオヤジ達にちやほやされて」

「クミ！」

カナの鋭い声に、クミはビクリと体を震わせた。

「……ごめん、カナ……言い過ぎた……」

呟いて、憑き物が落ちたようにうなだれる。

「何か……あつたの？ クミ？」

明らかにいつもと違うクミの様子に、カナは真剣な表情で尋ねた。

「……あの男に会ったの。さっき夕食の買い出しに行った時に……」

「あの男って、まさか」

「そう。あの中学の時の奴よ」

クミは拳を握り締めて呟いた。

「また別の女の子を連れてた。それも昔の私と同じ、中学生くらいの子を……」

「何て奴……！」

カナは険しい表情で拳を握り締めた。

「私……あの男の姿を見てね、物陰に隠れたの……私は何も悪くないってわかってるのに……それでも、まだあの男と向き合うことはできないの」

中学三年生の時、クミはカナと話し合って親元を離れることにした。学校をやめる必要はないとカナは言ったが、クミは今までのすべての関係を断ち切りたがっていた。

クミの親はもつと大きな部屋を用意できると言ったが、クミは断った。そしてその代わりに、クミは最新のパソコン設備を手に入れた。

クミはデスクトップに表示されている自分に送られてきたメールを見つめた。

「カナには悪いけど、この世界はまだ外見が大きな判断材料なのよ。それなら、私はそんな世界はいらないわ」

クミはパソコンのケースを撫でながら呟いた。

「この中は私にとっての天国よ。ここは『外見』のまったくない世界。自分の考えと知識を直接やり取りできる世界……昔、何処かの評論家が言ってたわ。表現した物こそが、その人の真実だって……私もそう思う。この中で私は痩せっぱちで大柄な女じゃない。一人の表現者なのよ」

最近、クミはネット上で様々なアイドルや漫画・アニメ・ゲーム関係の評論や、それについての表現活動を行っている。今ではかなりの有名人らしい。もっとも、クミは決して現実の場に姿を現すことはなかったが。

「でもそれじゃ、誰がクミを抱き締めてくれるの？」

カナが言うと、クミは寂しげに微笑んだ。

「現実の世界では誰かと話することもできないのよ……私はね」

「クミは自分で自分の価値を見限ってるんだよ。私はクミって凄い人だと思う。あんな男とは比べ物にならないくらいにね」

そう言って、カナは立ち上がると、クミを背後から抱き締めた。

「……ありがとう。貴女には世話になりっぱなしなのに、酷いことを言ってしまった」

クミはカナの胸に頬を寄せた。

「気にしない気にしない。私は自分勝手な女だって言ったでしょう？ 私は、何の面白みも実力もない、自分にプラスにならない人間と関係を持つのは時間の無駄だと思ってる。でも、そんな私がクミとはうまくいってるんだよ？ つまり私はクミの能力を、とても買

つてゐること。クミは私の有能なパートナーだよ。私達は無敵のコンビなんだから……あ、こんなこと言うとまた人を利用してゐて言われるかな？」

クミは顔を上げて微笑んだ。

「そんなことないわ、私も貴女から沢山のものを貰ってるから……私達の間には、公平なビジネスが成り立ってるわ」

P M . 8 : 4 5

「どうする？ 私はこれからスケアクロウに行こうと思ってたけど、やっぱり一緒にいようか？」

カナは平静を取り戻したクミに尋ねた。

「ううん、いいわ。もう落ち着いてから……」

クミは大きく深呼吸すると、さっぱりとした顔つきで微笑んだ。

「スケアクロウに行くんだったら、リョウさんの写真でも撮ってきちゃダメ？ 壁紙にでもしようかと思ってるの」

「クミ、貴女って本当に男を見る目がないわね」

カナの台詞に、クミは少し拗ねたように言い返した。

「カナだって男が目的なんだろう？ 貴女の趣味だって悪いわよ」

カナは意味深な微笑みを浮かべながら、ううん、と背伸びをした。「クミの悪いところは自分の経済的価値を低く見積もり過ぎることだよ。やっぱり才能ある人間は有効利用しなくちゃね」

「その男もそんな人間なの？」

カナは楽しげに答えた。

「それはわからない。でも何か気になるのよね。女の勘ってやつかな？」

そしてカナは何を思ったのか、クミに近づくと彼女の頬に軽くキスをした。

「今度、一緒に遊びに行こうね。アミとかマコトも誘ってさ。人生は楽しまないかね」

クミは真っ赤になった頬を誤魔化すように、乱暴にカナを振りほどいた。

「行くんだったらさっさと行きなさいよ！ まったく、貴女はわけがわからないわ！」

クミが怒鳴るのも気にせず、カナは笑いながら玄関のドアを開けた。

「じゃあね、行ってくるわ。そうだ、アメリカ行きの話は考えなくてね！」

カナはドアの隙間から手を振ると、あっという間に走り去った。

「何なんだか、まったく……」

クミはしばらく怒ったふりを続けていたが、やがて堪えきれずに吹き出した。

「……何なんだか、まったく」

今度は笑いながら同じ台詞を呟いたクミは、久し振りに幸せを感じている自分に気がついていた。

それから、あることを思いついた。

一時間後。

クミの目の前のモニターには、パソコンを使って『あの男』を社会的に破滅させる完璧なプランが表示されていた。

「今まで何で思いつかなかったんだろ。そうよ、何も直接会わなかったってあの男一人破滅させるくらいわけないじゃない」

クミは早速作業にとりかかった。

やがてお腹が減ってきたので、クミは夜食用に取っておくつもりだったハンバーガーも食べることにした。

「……また買い出しに行かきゃ」

P M . 9 : 3 8

「快樂とは部分的に肉体を抜け出すことであり、小規模な蘇生であ

る。そして死とは恐らく彼岸へと続く痙攣であろう。ちょうど赤ん坊の泣き声が、快樂の頂点における叫びと似ているように」

「それって誰の言葉？」

ドロシーが尋ねる。

「え……つと、マルコム、ド……シャザル……かな？」

僕は壁の落書きの続きを読んだ。

辺りは暗く、中途半端な電灯の光がその暗さを余計に際立たせていたが、その小さな落書きは、他の落書きの中で不思議と僕の目を引いた。

「それってどういう意味？」

ドロシーが僕の腕を取って囁く。

「さあね、よくわからないな。何となくわかるような気もするんだけど」

「まあ、落書きってのはそんなものね」

ドロシーが小さく笑ったのが聞こえた。

クラブ『スケアクロウ』はオフィス街の一角、とあるビルの地下にあった。狭い螺旋階段を降りるに従って、壁を突き抜けて聞こえてくる重低音が大きくなってゆく。

「実はね。さつき屋上にいた時、君を後ろから襲って犯してやろうかと思っただよ」

「へえ？」

「言い方は悪いけど、それくらい好きだってことだよ。ここまで人を好きになっただのは初めてだよ」

「物は言いようね。でも、そこまで好きになってくれたのなら、どうしてそうしなかったの？」

僕の体にもたれながら、からかうような口調で尋ねてくる。

「……それができないくらいに君のことが好きになっただよ」

僕が言つと、ドロシーはクスクスと笑って僕の瞳を覗き込んだ。た。

「本当？」

「……本当だよ」

僕はドロシーの瞳を正面から見つめ返した。

……もう、恐怖は感じない。

やがて螺旋階段が終わり、僕達は分厚い扉を開け放ってスケアク
ロウの中に入った。

第三話「カカシとセルロイドの美女とライオンがメリーゴーラウンドの中で踊る」

PM・9:40

扉を開くと、光と音の洪水が溢れ出してきた。

パイプや電線が剥き出しのコンクリートの壁には色鮮やかなグラフィックアートが描かれ、床には空き缶やスナック類のゴミが散乱している。

受付の奥の壁には、ここスケアクロウの名前の由来である大きなワラ人形が、殉教したキリストのように磔にされている。絶え間なく続く重低音のビートと点滅する照明のせいで、建物全体が脈動しているようだ。

僕は壁のワラ人形が、僕に向かって手を伸ばす感覚に襲われた。

「ようこそ、スケアクロウへ。素敵な夜をお過ごし下さい」

「あ……ああ、ありがとう」

気がつくと、受付にいた男が僕のチケットをちぎっていた。

タキシードを着崩した格好のこの男、名をオカダという。僕の数少ない顔見知りの一人で、ここスケアクロウの経営者だ。昔は売れないミュージシャンだったらしいが、奥さんを貰ってから真面目にクラブを経営している。

経営者と言っても、自分から積極的に受付に出て一人一人の客を歓迎するほどに親しみやすい人物だ。

と、彼の顔から接客用の表情が消え、見る間に険しいものになった。

「いいのか？ リョウ達がお前を待ってるぞ、殺されに行くようなものだ」

「……男には行かなきゃいけない時がある、って誰かが言ってたよ」「誰が？」

「『にこにこポン』のポロリ……かな？」

「『母を訪ねて三千里』だろ？ お前もいい加減あいつらとは別れた方がいいぞ」

その後、オカダは僕の隣にいるドロシーが料金を払おうとしているのを見て手にキスをするんじゃないかってくらい感激していた。

僕はため息をついて奥へと進んだ。

スケアクロウはこの類のクラブとしてはかなり大きく、ダンスの為のフロアとDJブース、カウンターと休憩用の席が、それぞれ別々に区画されている。

まだ時間が早いせいかフロアで踊る者は少なく、色タイルで床に大きく描かれたミケランジェロの『アダムの創造』を見分けることができた。

このクラブは昔、ある気狂いの芸術家のアトリエで、床の絵はその頃の名残らしい、というもつともそんな話を聞いたことがある。

僕はその絵を見る度に、遠い昔に思いを馳せる。もしかしたら人と人との深く関係を持ち、人間が世界と結びついていたかもしれない時代を……。

だが現代の僕達は、世界との繋がりを確かめる術を持たない。僕は時々、自分の指先にプラスチックが埋まっているような感覚を抱くことがある。僕は世界と結びついてはいないのだろうか。

僕がフロアで踊る者達を見つめていると、いきなり誰かが僕の襟元をつかみ、引き寄せた。視界が回転し、僕は壁に叩きつけられた。「よくも救急車なんか呼びやがったな！」

衝撃で閉じていた目を開けると、ジンの大きく開かれた口が見えた。

「オイ！ 聞いているのか！？」

「……うるさいな。リヨウに会えばいいんだろ？」

僕はジンの手を振り払った。今までジンが苛立つのを見るのは恐かったが、今日は不思議と恐怖を感じない。何と言うか、ジンの怒りがひどく薄っぺらいものに思えたのだ。まるで鎖につながれた飼い犬が、無理をして吠えているように。

ジンはしばらく僕を睨んでいたが、不意に目を逸らすところ言っ
た。

「……向こうの席にいる。ついてこいよ」

僕は今まで何を恐れていたんだろう？　僕はジンの猫背な背中を
見つめながら考えた。

「やるじゃない」

後ろに立っていたドロシーが、僕の肩を軽く叩いて微笑む。

「君に鍛えられたせいかな？」

僕は小さく笑って答えた。

「よお、いい女を連れてるじゃないか」

リヨウは長い椅子の中央にだらしく座っていた。彼の両側には
年下の女の子が座っており、リヨウの御機嫌取りをしている。

「ようこそ、ならず者のたまり場へ……お姫様」

ドロシーが無反応なのを見ると、リヨウはフンと鼻で笑って視線
を僕に移した。

「お前があのおヤジを助けた件だな。俺はどうでもいいと思うん
だが、こいつらがうるさくてな」

「リヨウはこいつに甘過ぎるんだ！」

ジンが腹立たしげに言った。僕に向かってくるでもなく、リヨウ
の椅子の向こうから僕を睨みつけている。

僕とドロシーの周囲をグループのメンバーが取り囲んだ。皆、無
言で僕らを見つめている。どうやら僕は目立ち過ぎたらしい。

「お前もついてないよな。あんなオヤジを助けたばかりに、こん
な目に遭うなんて……まったくバカなことをしたよな？」

リヨウはビールの缶を持ったまま、右手の人さし指を伸ばした。

その先にはドロシーの姿がある。

「いい女だ……貸してくれないかな？」

リヨウの言葉と共に、周囲の男達がざわめいた。どうやら皆、ド
ロシーには目をつけていたらしい。

「断る」

僕の言葉に、ざわめきが更に大きくなった。

「彼女は僕の所有物じゃない。誘いたかったら直接彼女に言ってくれ」

「嫌よ。ろくな男がいないじゃない。貴方の方がいいわ」

ドロシーはゆっくりと周囲を見回すと、僕の肩にもたれかかった。ざわめきがどよめきへと変化する。

……正直、少し嬉しい。

「それじゃあ、自分の体で払ってもらおうか？」

リヨウは立ち上がり、僕の前に立った。僕はドロシーを背に庇つてリヨウを見つめた。

「俺の足元にひざまずいて、靴を舐めたら許してやってもいいぜ？」

「断るって言ったら？」

「うん……どうしようかな？」

リヨウは小さい子供に我俣を言われたように眉をひそめ、僕の顔を覗き込んだ。視界の端で、リヨウの拳が握り締められるのが見えた。

次の瞬間、視界が乱れ、物音が消えた。

僕は数歩後退し、かろうじて倒れることなく持ちこたえたが、そこで膝が砕け、足元に片手をついた。

視界が正常に戻り、コンクリートの床が見えた。口の中に鉄の味が広がり、床に赤い雫が落ちる。意識が混濁し、体全体が冷たくなったが、痛みはそれほど感じなかった。痛過ぎて感覚が麻痺してしまったのかもしれない。

その時、リヨウが手を伸ばし、僕の襟をつかんで引き上げた。軽く貧血でも起こしたのか、天井の照明がやけに明るく感じられる。

「へえ、驚いたな……気絶させないように手加減したのは確かだが、倒れもしないとは思わなかった」

聴覚も戻ってきた。周りの奴らが騒ぎ立てる中、リヨウの顔が間近にある。

「何か言うことがあるだろう?」

ゆつくりと、聞き分けの悪い子供を諭すように、リヨウが尋ねる。

「……リヨウ……」

「何かな?」

僕は必死で頭を働かせた。このままりヨウに謝罪した方が得策だろう。今までの僕ならまず間違いなくそうしたはずだ……でも、今日はドロシーがいる。

僕は口元を拳で拭い、言った。

「リヨウ、僕は自分が間違ったことをしたとは思ってないよ」

周囲の男達が信じられないといった顔をする。

「リヨウ! そんな奴は仲間じゃねえ、殺しちゃえ!」

ジンが椅子の背を乗り越えそうな勢いで叫んだ。

最も意外な反応をしたのはリヨウだった。僕の答えを聞いた途端、目を大きく見開いて動かなくなったのだ。

「……なあ。まさか、それは本気で言ってないよな?」

「………本気だよ」

リヨウの瞳から感情の灯が消えた……そして次の瞬間、大きく燃え上がった。

「殺すぞ! てめえ!」

ほとんど金切り声に近い声でリヨウが叫ぶ。僕の襟をつかむ力が信じられないくらいに強くなった、その時。

「ちよっと待った!」

オカダが僕らの席に入り込んできた。

「店内での騒ぎはやめてくれ! ここでのルールは守ってもらわなきゃ困る!」

周りの男達がオカダを排除しようとしたが、彼はかまわずリヨウに近寄った。

「リヨウ、俺はお前達がやってることくらい知ってるんだからな。もし何かあれば、即刻警察に突き出すぞ!」

「………わかったよ」

リヨウは僕をつかむ手を放したが、それはオカダの言葉に従ったわけではなく、興奮が多少鎮まったからであるらしい。

リヨウはもう、いつもの不敵な笑みを取り戻していた。

「だが、俺はこいつに話があるんだ。話をするくらいならいいだろ？」

「揉め事とはチェックするからな？」

「わかってるよ、話すだけだ……いいな？」

二人は同時に僕の方を見た。オカダの視線が「やめておけ」と言っている。

僕は衣服を整えると、横目でドロシーを探した。見れば座席とフロアの境目の柱に寄りかかり、静かに僕の方を見つめている。

「……わかったよ、リヨウ」

彼女の態度に少し落胆しながらも、僕はリヨウの申し出を受けた。

「じゃあ、こっちに来いよ」

リヨウは指で方向を示した。

「何度も言うが、揉め事は……」

「わかってるよ。それより、メインのDJはいつになったら来るんだ？ これじゃあ俺が回した方がまだマシだぜ？」

リヨウはがら空きのフロアの方を指差した。ただでさえ踊っている人数が少なかったのに、僕らの騒ぎで皆がこちらに集まって来ている。

「もうすぐ来るよ……色々とね」

オカダは自分がこれ以上は干渉できないことを悟ると、妙な台詞を残して引き下がった。

「さて……二人っきりで話をしようか？」

「ああ……わかったよ」

僕達は人垣を割って移動し始めた。

正直言つと、まだ口の中が痛い。これから先は本当に危ないかもしれない。しかし、ここまで来た以上、退けない。

僕がドロシーの隣を通り過ぎる時、ドロシーは二本の指を唇に当

てると、その指を銃身に見たてて僕に向けて撃つ真似をした。

僕は歩きながら軽く心臓を押さえて片目を閉じた。僕らにはそれで十分だった。

これは後から知ったことだが、僕の後ろを歩いていたリヨウはドロシーの身ぶりを眺めていた。

その時、ドロシーはリヨウを見て不思議な笑みを浮かべたそうだ。まるですべてを見通しているかのような目で、彼を見返していたらしい。

「いいか、その女には手を出すな！ わかったな？」

ドロシーの横を通り過ぎた後、リヨウは振り返って皆に言った。不満そうな声を上げる者もいたが、反論する者はいなかった。

第三話「カカシとセルロイドの美女とライオンがメリーゴーラウンドの中で踊る」

PM・10:05

「えっと、ドロシーさん……でしたよね」

柱にもたれたまま目を閉じていたドロシーは、声をかけられて目を開けた。

「……ああ、カナちゃんね」

「先輩は何処ですか？ オカダさんに、リョウさんと先輩が喧嘩してるって聞いて……」

ドロシーがトイレの方を指差すと、カナの顔色がサツと変わった。

「まずいですよ。先輩、殺されちゃいます！」

カナの真剣な台詞に、ドロシーは軽く笑った。

「どうして笑うんです？ リョウさんは恐い人ですよ！」

「それはどうかな？ まあ、おとなしくここで待ってましようよ」

カナはドロシーの楽しげな瞳を睨みながら呟いた。

「……貴女、本当に先輩の何なんです？ 先輩のこと心配してないんですか？」

「どうでしょうね？」

ドロシーは呟き、そうだ、と手を叩いた。

「何か飲み物でも買ってきてくれない？ 喉が乾いちゃった」

「……どうして私が？」

「いいじゃない」

カナは不機嫌な顔でドロシーを睨んでいたが、小さくため息をついてドロシーから金を受け取り、ふと鼻を触って呟いた。

「石鹸、安物使ってますね。三流のラブホテルの物みたいですよ……」

「まあ、どうでもいいですけど！」

そしてカナは精一杯嫌味な響きを込めて言った。

「先輩と寝たからっていい気にならないで下さいね、おばさん！」

声をかけてきた男を突き飛ばしながらカウンターの方向に向かう力ナを見送りながら、ドロシーはしばらく呆気を取られていたが、やがて可笑しさを堪えるように笑い出した。

「面白い子ね」

それからドロシーはトイレの方を振り向いた。

「さて、こっちはどうなるかな？」

「悪いな、ついカツとなっちまった。顔は大丈夫か？」

「ああ……大したことはないよ」

僕達は男子トイレの中にいた。スケアクロウのトイレはクラブのものとしては清潔で、主要な駅のトイレくらいの大きさがあった。

僕は一對一の決闘に臨むガンマンのような気持ちでトイレの中に入ったのだが、僕と二人つきりになった途端、リヨウは態度を変えた。

「周りの奴らのこともあるしな……まあ許せよ」

リヨウは洗面台で蛇口から直接水を飲みながら言った。

「ビールって、あんまり美味くないよな。いつも気分が悪くなる。

どうしてあんなものが売れるんだろうな？　ワインは好きなんだけどなあ」

「さあね……僕はアルコールは苦手だから」

僕は警戒を解くことなく、リヨウの隣の洗面台に少しずつ近寄った。

確かにリヨウの立場上、彼がああするのは当然だ。仮に彼が、本当に怒っていなかったとしても……説明としては筋が通ってる。

「そんなに警戒するなよ。怒ってなんかいなくて」

リヨウはついでに洗った顔を拭いながら言った。

「確かに、お前が生意気なことを言った時にはカツとなったよ。でも、今はお前のことは怒ってない。本当だって。それどころかお前のことは見直したよ。俺に面と向かって言い返す奴なんて滅多にいないからな」

「……そうかな？」

僕は、もしかしたら本当にリヨウが怒っていないのかもしれない
と思い、少し緊張を解いて洗面台の鏡を見つめた。左の頬から顎に
かけて、どす黒く腫れ上がってしまっている。水で冷やした方がい
いかもしれない。

「ところで、あの女は誰だ？ 昼間はいなかったような……」

「昼間？」

「いや、こつちの話だ」

リヨウはそれ以上は何も言わなかった。誰か知り合いにでも見ら
れたのだろうか？

「それにしても、いい女じゃないか。もう寝たのか？」

「……………」

リヨウは僕の無言から、まだ何もしていないと判断したらしい。

僕のいる洗面台に近寄ると、鏡を覗き込んで衣服を整え始めた。

「なあ、あの女のこと好きなんだろ？ ……ほら言ってみるよ」

リヨウが悪戯っぽく笑い、からかうように言う。僕の強張ってい
た顔の筋肉が緩み、自然と笑みを形作ったのが鏡の中で見えた。

「そうだね……彼女のことは好きだよ。彼女の前じゃ、ちよつと格
好をつけたくなるくらいにね」

僕は手を洗いながら、リヨウに立ち向かえたのはドロシーの前で
これ以上格好の悪い所を見せなくなかったからだということに改め
て気づいた。僕も所詮はそこの男と同じように意地っ張りだとい
うことだろうか？

僕は無性に可笑しくなった。そして、それによってリヨウと対等
に話せるようになったのなら悪くないとも思った。

だけどこの時の僕は、まだリヨウのことをまったく理解していな
かった。

「お前は大きな奴だよ」

リヨウは言った。

「他の奴みたいになんかでも無いし、物事をちゃんと自分の頭で考えてる。それに結構、やる時はやるしな……勇気があるよ」

リヨウは手を伸ばすと僕の即頭部の髪をかき上げた。

「正直、大した奴だと思うよ……ただなあ」

「……何だい？ 『ただ』って」

リヨウの手が僕の耳の所で止まった。リヨウの手は冷たかった。

「ただ……その方向は間違ってるな」

次の瞬間、視界が下方に九十度回転し、僕の頭は洗面台の中に押し込まれた。

「お前は何かわかっていない」

リヨウは顔を上げようと僕を信じがたい腕力で押さえつけると、水を溜める為のコックを引き上げ蛇口の栓を全開にした。お前は何かわかってないんだ」

僕は洗面台に頭を打ちつけられた衝撃も忘れて必死に抵抗したが、リヨウの手はがっちり僕の頭を押さえこんでいてびくともしない。しかも親指の爪が肌に食い込み、破れた所から血が流れ始めた。

「血が出てるな……水が赤くなっちゃってる」

ひどく遠くの方からリヨウの声が響いてくる。僕は無我夢中でリヨウを蹴り飛ばして何とか水面上に顔を上げ、激しく咳き込んだ。

途端、リヨウが僕の後ろ襟をつかみ、一気に床に引き倒した。昏倒している間もなく、今度は強引に立たせられる。

一瞬激しい貧血を起こし、頭の中が真っ白になった。

気がつくと、リヨウは僕を自分の体で壁に押しつけるようにして立っていた。

「……俺はお前のことを、高く評価してるんだぜ？」

リヨウはポケットからナイフを取り出すと、刃を出して僕の目の前にちらつかせた。

「だが、お前は能力を間違った方向に使ってしまった……わかるか？」

リヨウの顔は青ざめ、目だけが爛々と光っている。

「俺には力がある。誰にも負けない力がな……俺は年寄りや女とは違う。あいつらは無力で何もできない。だから俺が支配する……簡単な理屈だろ？俺が年寄りを殺して何が悪い？あいつらには若さも力もない、あるのはせいぜい金くらいだ。くだらないとは思わないか？あいつらがこのくだらない国を更にくだらなくしているんだ。俺達にはこの国を良くする義務つてのがあるんだろ？だつたら、あいつらを殺して金を取つて何が悪い。少しはこの国が良くなるつてもんだろ！」

リヨウは僕の髪をつかんで顔を持ち上げると、喉にナイフを突きつけた。

「女だつて同じだ。あいつらは恋だの愛だのと言つてすぐに男を責める。だが、あいつらが本当にそんなものを信じてるのか？あいつらは自分さえ良ければ他人がどうなつてもいいんだ。あいつらは恋だの愛だの言つて発情して子供を生む、それだけだ。少しでも金に困れば、自分の子供だつて売り飛ばすかもな……何処かの金持ちにでもな！」

そこまで一気に喋ると、リヨウはナイフを退けて僕の肩に額を当てた。リヨウの左手は僕の体を抱きかかえ、力なく垂れ下がった右手のナイフが壁に当たつて音をたてる。

「……誰かみたいにな……」

リヨウは僕の肩から顔を上げることなく話し始めた。

「お前だつてわかるだろ？女なんかくだらないんだ……アユミの時にわかつたろ？」

「……アユミ？」

どうしてこんな時にアユミの話が出てくるんだ？

「あれは……君が仕組んだんだろ？確かに……うまくはいかなかったけど」

僕は今まで、アユミについてリヨウと話をすることを避けていた。だが、彼女について聞きたいことは沢山ある。

と、リヨウが不意に顔を上げて笑い出した。

「うまくいく？ そんなわけないだろ？ あいつとお前がうまくいったら奇跡だよ」

「ならどうしてあんなことを言ったんだよ？ 僕と寝たら抱いてやるなんて……」

「あいつはプライドが高いからな。お前と衝突することはわかってた……頭いいだろ？」

リヨウは僕から離れると悪戯っぽく笑った。僕は壁から一步も動けなかった。

「……それじゃあ、まるで……」

「授業の一環さ。あれでわかっただろう。女つてのは自分の欲望の為なら誰とでも寝ることができるんだよ」

リヨウは悲しげに肩をすくめたが、すぐに狂ったように笑い出した。僕は体の中に何か冷たいものが凝り固まっていく気がした。

「彼女とは……約束通り、寝たのかい？」

「そんなわけないだろう」

僕が何とか吐き出した質問に対するリヨウの回答は、あまりにも残酷なものだった。

「俺は女どもとは違うんだ、自分の寝る相手は自分で決める。しつこいから二、三発殴ったらおとなしく帰ったよ。それからすぐだったかな？ あいつが学校で問題を起こしたのは。まったくバカな奴だよな」

「……リヨウ！」

僕はリヨウに向かって拳を振り上げた。しかし僕が拳を振り下ろすよりも早く、僕の喉元には再度ナイフが突きつけられていた。

「お前が俺に勝てると思ってるのか？ いい加減、利口になれよ」

リヨウはナイフを持っていない左手で僕の髪をかき上げ、剥き出しになった耳に口を寄せた。

「俺に従え。それが生きる道だぜ？」

僕らは凍りついたように動かなかった。

髪から流れ落ちる冷たい雫が、汗と混じり合って下着を肌へばりつかせる。

僕の体の内側を、恐怖とも怒りとも判断のつかない嫌な感じが這い回っていた。

リヨウはしばらく何の感情もない目で僕を眺めていたが、不意にナイフを退けた。

「そんなに固くなるなよ。夜は長いんだ、楽しもうぜ？」

そして小さく微笑むと、ナイフの刃を戻してトイレの出口に向かった。

……僕は負けたのだろうか？ 僕は考えた。僕はここに、リヨウと一騎打ちをするつもりでやってきたはずだ。まるで映画のヒーロームイみたい。

客観的に見れば、僕はリヨウに何一つできず、散々痛めつけられたのだから、やはり負けたということになるのだろう。

だけど何かが違う。リヨウも完全に勝ったわけじゃない気がする。まるで違うルールのゲームを二人でやっていたようだ。

ヒーローは正しいから勝つのだと誰かが言っていた。強いから勝つのだとも。

でも、正しいとか強いってのが、一つじゃなかったらどうするのだろうか？

「カッコイいわよ、だいぶ派手にやったみたいね」

トイレを出ると、すぐその壁にもたれてドロシーが立っていた。「いいや、やられっぱなしだよ」

僕はドロシーの横まで行って壁に軽く後頭部を当てた。壁を通してフロアの振動が頭蓋骨に伝わってくる。首をひねるとリヨウ達が見えた。ジンと数人の者が僕を見てリヨウに何か言っている……どうも僕が無事に動いているのが気に食わないらしい。やがてリヨウがフロアに出たので、ジン達は僕の方を忌々しげに見つめながらもそれに続いた。

「昔、正義ってというのは一つだと思ってた。何か一つの大きな真実があるんだって」

僕は壁にもたれながら呟いた。ドロシーは何も言わずにフロアの方を眺めている。

「僕は小さい頃から、他の子とは親しめなかった。でも、それは自分が変なんだと思っていたんだ。普通の子供じゃない自分が変なんだってね」

リヨウは黒いコートを脱ぎ捨てると、フロアの中央に進み踊り始めた。速いビートのテクノミュージックに合わせて、リヨウの体が回転する。

「だから小さい頃の僕は、他人に合わせようと必死だった。いわゆる『良い子』になるうとしてたんだ。宇宙人が地球人に成りすまそうとするようにね……でも、僕は普通の子供にはなれなかった。僕は未だに変な子供のままだ」

僕は大きく息を吐き出した。

「……小さい頃は、たった一つの真実があるんだって思ってた。誰もがそれを目指しているんだと……でも、真実是一个じゃなかった。僕が今まで信じていた真実は、僕を救ってはくれなかった。僕は何をすればいいんだ？ 何処に行けばいい？ ……何を信じればいいんだろう？」

リヨウは降り注ぐ色とりどりの光を浴びて踊っていた。彼の肉体が主の意志に忠実に従い、美しい動きを作り続けている。彼の周りには、その動きに魅せられたように大勢の者が集まり、一緒になつて踊っていた。

「違うから面白いんじゃないの？」

不意に、それまで黙っていたドロシーが呟いた。

「……何だって？」

僕が尋ね返すと、ドロシーは顔を動かさずに続けた。

「普通普通って言うけどさあ、この世の中に『普通』なんてないよ。みんな何かを抱えてる。あの男だってね」

ドロシーの視線の指し示す先には、踊るリヨウの姿があった。僕は先程垣間見たリヨウの激情を思い出した。

「アタシのことは変わってるから好きなんですよ？ あんなこと言われたのは初めてよ。ちょっと傷ついたなあ」

ドロシーは微笑み、僕の左頬に優しく手を寄せた。

「アタシも、貴方のことは変わってるから好きよ」

左頬は少し痛かった。

「先輩、大丈夫ですか？」

不意に後ろから声がかかり、右頬に冷たい物が押し当てられた。

振り向くと、カナが缶ジュースを持って僕を見上げていた。

「ああ、カナちゃんか……吃驚したよ」

「お取り込み中でしたか？」

からかうような口調で言い、カナは悪戯っぽく微笑んだ。

カナは昼間の制服姿とは違って、体に合った黒いセーターを着ていた。透き通るような白い肌が更に強調され、目元に薄く施されたメイクがモルフオ蝶の鱗粉のようで美しい。

「心配したんですよ。先輩がリヨウさんと喧嘩したって聞いたから……」

カナは体を密着させるようにして近づいてきた。タイトなセーターは却って体の線を感じさせる。僕はカナが結構メリハリのあるスタイルをしていることに気がついた。

こんなに可愛い子が売春をするのは良くない。僕が金だけはある中年のオヤジだったらどんな大金を要求されても絶対に買うだろうな、ってことも含めて本当に良くない。僕はカナの折れるんじゃないかってほど華奢な肩をつかみ、優しく押し返して微笑んだ。

「ありがとう、大丈夫だよ。ちょっと殴られたけどね」

僕は頬に手を当てた。ドロシーの前でもそうだが、カナの前でも少し格好をつけてみたくなる。後ろでドロシーが笑ってるんじゃないかとも思うが。

「カツコイですよ、先輩。リヨウさんとやり合うなんて」

……カツコイか。僕は少し可笑しくなった。

「全然カツコよくないね。とんだ茶番だよ」

苦笑交じりに呟いた途端、僕を見つめるカナの視線が戸惑ったようなものになる。しかし僕がどうしたのだろうと思った時には、カナは元の表情に戻っていた。

「そんなことないですよ」

カナはもう一度ニツコリと笑うと、後ろで僕らを眺めていたドロシーを（やっぱり笑ってた）引っ張って少し離れた所に連れて行った。

「……何か嫌がられるようなことを言ったかな？」

僕は少し不安になった。

「どうしちゃったんですか、先輩は？ 昼間より数倍はカツコイじゃないですか」

「そうかなあ？」

ドロシーが意地悪く微笑む。カナは微かに眉根を寄せ、ドロシーを睨みつけた。

「まさか、貴女のせいだとか言わないで下さいね！」

「別にあいつが誰と寝てもかまわないんじゃないの？」

ドロシーの問いに、カナは一瞬詰まってから答えた。

「……あの人が誰と寝たってかまいませんよ。別に自分だけのものにしたってわけじゃないですから……でも」

カナは小さく息を吐き、独り言のように呟いた。

「……あんな変わった人を好きになるのは、私くらいだと思ってたのに……」

「その台詞、あいつに聞かせてやりたいわ。何て言うかな？」

可笑しそうにクスクスと笑われ、カナは少し声を荒げた。

「悪いですか！？ 私は優しいだけで何も面白い所がないよりは変わってるくらいの方が好きです！ すぐに底が見える人なんて何が

面白いんです!？」

「確かにね。でも色々言ってるけど、本当にあいつのことが好きなのかどうか」

「……経済的に興味ある素材だと思ってるんですよ。長い投資をしてもいいって思うくらいにね」

カナは自分がかかわれていることを悟り、意識的に落ち着いた声で答えた。

「私は人生はビジネスだと思います。恋愛だってそうです。どうせ恋をするなら自分にとってプラスになる人の方がいいじゃないですか。先輩はとも興味深い存在です。私はあの人のことを『買ってるんですよ』」

カナの答えに、ドロシーは満足げに微笑んでカナの肩を叩いた。

「貴女みたいな人がいるなら、この国の将来も明るいわね」

それから声を低くして呟いた。

「彼に目をつけてるのは私たちだけじゃないから気をつけなさいよ」
カナはしばらくドロシーを見つめていたが、やがて表情を和らげた。

「貴女も変わった人ですね……何者なんです？」

ドロシーはカナの額に軽く口づけると、笑って言った。

「実は魔女なのよ」

「へえ……私、本物の魔女さんに会うのは初めてです」

カナも額を触りながら微笑んだ。

僕はドロシーとカナが話をしているのを眺めていた。

何か言われてるんじゃないだろうか？ ドロシーには色々と情けないところを見られてるからなあ。

「まあいいか……本当のことだからなあ……」

僕は半分諦めて呟いた。

その時、二人が僕の所に戻ってきた。

「先輩、せっかくスケアクロウに来たんですから踊りましょうよ。」

ほら！」

カナが僕の手を取り、強引にフロアに連れていこうとする。

「ちよっと待ってよ、今日はもう帰るつもりなんだ。これ以上ここにいたら、また騒ぎになるかもしれないし……」

「何言ってるんですか。そんなこと気にしないでいいですよ」

「気にするなって言われても」

カナは僕の言葉に耳を貸さず、やけに楽しげに僕の手を引っ張っていく。ドロシーまで僕を後ろから押し始めた。

「モテるわね、色男さん。夜は長いだよ、楽しまなくっちゃ」

「……わかったよ。だから手を放してくれ」

僕は乱暴にならないよう二人の手から逃れようとした。

……と、その時。スケアクロウの入り口の方で何か騒ぎが起こった。

「何だろ？」

「誰か来たみたいですね」

見たところ喧嘩という雰囲気ではないし、カナが言った通りのようだ。オカダの言っていたメインのDJだろうか？

「面白いのが来たわね」

ドロシーが呟いた。

「リヨウ！」

「何だよ、邪魔するな」

「今日のメインのDJって知らされてないだろ？ どうも『K』らしいんだよ！」

リヨウは踊りを続けながら呟いた。

「へえ、あいつか……刑務所に入ってたんじゃないのか？」

「昨日出所したらいいんだ。それで受付が呼んだんだよ。あいつら仲がいいから……」

「成程ねえ。で、それだけか？」

鬱陶しそうに仲間を睨む。

「そ、それだけじゃないんだよ。あいつらも来るらしいんだ、『カ
ウボーイ』達が……」

リヨウは今度は明らかな不快感を顔に出した。

「あのジジイか……！」

その時、スクエアクロウに数人の者が入ってきた。

PM・10:37

それは変わった集団だった。

……いや、『とても』変わった集団だった。

最初にオカダにつき添われてやってきたのは、まるで格闘家のような立派な体格の男だ。はち切れそうな肉体をシンプルなＴシャツとジーンズで包み、首には大きなヘッドホンをかけている。顔つきは精悍で黒く太い眉の下に獲物を狙う鷹のような眼が光り、両手には大きな鉄製のカバンを持っていた。

彼はこの界限では有名なDJで、通称『K』と呼ばれている。本名は知らないが、そのテクニクと腕っ節の強さを知らない者はここにはいないはずだ。数ヶ月前に何かいざこざを起こして刑務所に入れられたらしいが、最近になって出所したんだろう。

次に現れたのは数人のけばけばしい服装の女……いや、女装した男達だった。ラメや羽飾りで派手に飾りつけた服を纏い、顔からはみ出るんじゃないかってほど化粧を塗りたくった顔で、けたたましく笑いながら話をしている。最も痩せた男が入り口の方に振り返り、羽飾りをはためかせて誰かを呼んだ。

呼ばれてやってきたのは、思わず息を呑むほどに美しい女だった。年は二十代前半といったところだろうか。しかし、童顔とも言える顔に年相応の表情はなく、まるで人生に疲れた熟年の女性のような疲労と倦怠に満ちている。

身長は高くもなく、低くもない。胸から腰にかけてのラインは信じられないほど豊かでなめらかな曲線を描き、濃い青に染められた髪は短く切り揃えられ、幾つもの小さなカールを作りながら顔にかかっている。肌は本当に血が通っているのか疑問なほどに白い。大きな青い瞳が、鏡のようにフロアの電飾を映し込んでいる。

彼女は背中や胸元が大きく開いた黒いシンプルなナイトドレスで着飾っており、純白の羽飾りを肩にかけていた。ドレスの丈はかなり短く、逆に床まで届きそうな羽飾りが、細く白い脚を中途半端に隠している。

何故、僕が女装の男の中に混じった彼女を女性だと判断したかにしては、僕自身はつきりとした根拠が思いつかない。男の勘というやつだろうか？ とにかく、極めて優れた芸術作品が見る者に訴えかける何かを持つように、彼女の美しさには迫力があつた。

初めてドロシーを見た時にもその美しさに心奪われたが、彼女の持つ美しさはドロシーのそれとはまったく異なるものだった。ドロシーには野生の獣のようなしなやかさと存在感、そして危険な香りがあるが、彼女は繊細な硝子細工のような細やかさと透明感、そして今にも壊れてしまいそうな儚さに満ちている。

僕は彼女が人間ではなく、精巧なセルロイドのマネキンだと言われていれば信じたかもしれない。実際一目見た瞬間には、彼女が男か女かということよりも、果たして本当に生きている人間なのかどうかの方が判断できなかったのだから。それほどに、彼女からは生きている人間の雰囲気が出なかった。

彼女は形の良い細い眉をひそめて隣の男と何かを話している。表情から察するに、ここに来たくはなかったようだ。やがて彼女は隣の男では話にならないと判断したらしく、男に軽く手を振って最後尾へと移動した。

「……あ、カウボーイだ」
とカナが呟いた。

最後尾にいた男……カウボーイは壮年の外国人で、白が混じりつつある灰色の髪にエメラルド色の瞳をしている。背はかなり高く、痩せた体に白い花崗岩を刻んだような筋肉が張りついている。

最初に外国人と言ったが、実際には日本人とアメリカ人との間に生まれた混血で、ごく自然に日本語を話しているのを聞いたことが

ある。職業は実業家でアメリカに本社を持ち、世界各国に支社を抱える国際的な会社の社長なのだそう。リヨウの父親の会社もそうだが、具体的に何をしているのかは知らない。

勿論日本にも支社がある。それは隣の町にあるそうだが、彼はこの町の方が気に入っているらしい。

Q・ところで彼は何故『カウボーイ』と呼ばれているのか？

A・それは彼がいつもカウボーイの服装をしているから。

カウボーイは被っていた大きなカウボーイハットを指でずらすと、少し腰を屈めてまっすぐに彼女の目を覗き込みながら話を始めた。

二人はしばらく話をしていたが、どうやらカウボーイが説得に成功したらしい。女は不機嫌そうにカウボーイの胸を叩き、女装集団に加わった。カウボーイは苦笑いを浮かべると、西部劇そのままの飾りのついた上着を整え、僕達の方へ歩いてきた。

女装集団とセルロイドの美女が通過し、カウボーイも僕らの前を通り過ぎる……と思ったら、彼はドロシーの前で足を止めた。

「何でしょうね、先輩」

いつの間にか僕の背後に隠れたカナが囁く。

「さあ……」

僕がカウボーイを見るのはこれが初めてではない。先程も言ったが彼はこの町が気に入っているらしく、アメリカにいるよりもこの町にいらっしゃる方が多く知人も多い。ここスケアクロウでも何度か見たことがある。もともと、リヨウが彼を毛嫌いしているので、僕は話をしたことも近寄ったこともない。

「これはこれは。こんな所で同類に会えるなんてね」

カウボーイは流暢に喋りながら帽子を脱いだ。ドロシーに向かって優雅に一礼し、腰を曲げたまま顔を上げる。

「踊ってくれないかい？ カウガール」

間近で見るカウボーイの瞳は、本当に深いエメラルド色をしてい

た。細かい皺の刻まれた精悍な顔の上で、宝石のように輝いている。
「うーん、どうしようかなあ？」

ドロシーは焦らすように言い、僕の方を見た。

「連れもいるしなあ」

「それは残念だな……でも踊るだけならいいんじゃないかな？」

カウボーイはドロシーの視線を追って僕の方に目を向けた。

その瞬間、僕の体がわずかに震えた。恐かったのではない、彼の瞳に吸い込まれるような感じがしたのだ。僕は彼の視線から逃れようとした。しかし僕が目を逸らすよりも先に、カウボーイの視線からは力が消えていた。

「それに彼には、もう一人美しいパートナーがいるじゃないか。一人占めはよくないな。君が僕と来てもかまわないだろ？……そうは思わないかな？」

カウボーイが肩をすくめながら僕とカナに尋ねる。僕が戸惑っている間に、カナが後ろから顔を出した。

「いいですよ。ドロシーさんはその人と踊って下さい。私は先輩と踊りますから」

カナは『美しい』の一言で警戒を解いたらしい。

……意外とわかりやすい性格かもしれない。

確かにカウボーイには人を惹きつける不思議な魅力がある。もっとも、それは彼の個性の強さからくるものであり、彼が一般的な社交術に長けているからではない。おそらく、彼の個性が理解できる者以外には嫌われやすいタイプだろう。

それにしても、別に上流階級のパーティーで社交ダンスをするわけじゃないんだから、男女のペアで踊る必要が何処にあるんだ？

「そうね……でもどうせだったら、もっと大勢で踊った方が楽しいかな？」

僕の心を見透かしたかのように、ドロシーがカウボーイを待っている女装集団に目を向ける。それに気づいたのか、先程セルロイドの美女の隣にいた男が近くまでやってきた。

「ハ―イ。アタシはミンクよ。よろしくね」

飴玉を舐めるような猫撫で声で『彼女』は自己紹介をした。喋る時に口と目が淡水魚に似た動きをするのが印象的だ。背は高く、カウボーイと比べても見劣りしていない。百九十近くはあるんじゃないだろうか？

……さっきから僕の方を見つめているように見えるのは、きっと気のせいだろう。

「先輩、見つめられてますね」

「……………気のせいだよ」

周囲の者は皆、怯えたように遠巻きにこちらを眺めている。多分、こっちの方が正しい反応なのだろうが……カナはすっかり慣れたらしく（それでも僕の背中に張りついたままだけど）、興味津々カウボーイ達を眺めている。

何だか違う世界に迷い込んでしまったようだ。

「ここに来るなと言っただろうが！」

不意に音楽が止まり、大きな声が放たれた。

見ればリヨウがこちらを睨みつけている。リヨウは瞳を怒りに燃やしながら、僕らの……いやカウボーイ達の方に近づいてきた。

以前、カウボーイとリヨウはここで対立したことがある。僕はその場にいなかったので詳しいことは知らないが、以来リヨウはカウボーイ達のことを必要以上に嫌っている。カウボーイとその仲間は、この街で彼の思い通りにならない唯一の存在なのだ。

「何だ君か。しかし来るなと言われてもねえ」

カウボーイが動じた様子もなく目を細める。リヨウは僕を一瞥すると短く舌を鳴らし、再びカウボーイを睨みつけた。

「黙れ！ ここはお前達のような奴等が来る所じゃない！」

「しかしねえ……」

カウボーイは大袈裟に肩をすくめてみせた。

「私達は全員金を払ってチケットを買っている。だからここにいる

権利があるはずだ。それに今日は『K』の復帰を祝いに来たんだ。大目に見てくれないかな？」

どうも音楽が止まったのはDJの入れ替えをする為だったらしい。どうやら交代があることを知らせていなかったらしく、『K』はオカダと共にDJブースから前のDJを追い出そうとしていたが、リヨウとカウボーイが揉めていることに気づいて僕らの方に目を向けた。

「君は手を出すな」

カウボーイは『K』に手を振り、リヨウに向かって言った。

「彼とは長いつき合いだ……今日は騒ぎを起こしたくないんだよ」

「そうよ、リヨウちゃん。一緒に踊りましょうよ？」

ミンクが隣から声をかける。

「気安く名前を呼ぶな！」

リヨウは激怒してミンクを睨みつけた。

「俺はお前達のような気持ち悪い奴らが一番嫌いなんだ。ここから出て行け！一緒にいるだけで気分が悪くなる！」

「何ですって!？」

ミンクが口を大きく開きながらリヨウに詰め寄った。

「何が気持ち悪いって言うのよ？アタシ達の何が悪いって言うの!」

「近寄るな!」

リヨウがミンクに向かって手を振り上げる。しかしその手はカウボーイによってつかみ取られた。

「まったく、年寄りに無理をさせるね君は!」

リヨウとカウボーイの腕力が拮抗し、二本の腕が小刻みに震え始める。二人が睨み合っている隙に、ミンクは悲鳴を上げながら仲間の影に隠れた。

「キャーッ、キャーッ、恐かったわー!」

……さっきまでの威勢の良さは何処に行ったんだ？

理解に苦しむ僕の横には、いつの間にかセルロイドの美女がいた。

彼女は冷めた目でカウボーイとリヨウを眺めていたが、

「……くだらない……」

吐き捨てるように呟いた。

「この野郎……！」

リヨウは腕力を振り絞ってカウボーイの手を振り解いた。

「なめた真似をしやがって！」

「リヨウ！　ここで騒ぎを起こすんじゃない！」

リヨウが殺気立っているのを見て、オカダが慌てて駆け寄ってきた。フロアは静まり返り、皆が僕達の方を見つめている。

「リヨウさんやめて下さい！　ここで誰が踊ろうとかまわないじゃないですか！」

いつの間に僕の後ろからいなくなったのか、カナがリヨウの前に立って叫んだ。

「……若松か……お前はそいつらの味方をするのか？」

リヨウは虚ろな声で言った。リヨウはカナの売春を知っても態度を変えなかった数少ない人間の一人だ。それどころかカナのことを気に入っているようでもあった。もしかしたら、カナならリヨウと対等に話せるかもしれない。僕の心に楽観的な考えが浮かんた。

しかし、その考えはやはり甘かった。

リヨウは無表情にカナを突き飛ばし、カナは背中から床に倒れた。

「リヨウ、女の子に何てことをするんだ！」

「……………退けよ」

カナとリヨウの間に割って入った僕に、リヨウはひどく疲れたような口調で呟いた。

「退けよ……もうこれ以上、俺を怒らせるな」

「リヨウ、ここは踊る為の場所だ。僕達だけのルールが通用する場所じゃ……」

「お前は黙ってる！」

リヨウは僕を乱暴に押し退けた。

「それ以上言ったらお前もこいつらと同じだ。ただではすまないぞ！」

「なあ、もうこいつは俺達を裏切ってるんだから同罪だよ？」

ジンが小さく呟く。しかしリヨウはジンの話など聞いていなかった。

「君はどうして私達を目の敵にする？」

「お前達がここにいてだけで……地球上に存在するだけで俺の世界を汚してるんだ。だから俺はお前達が許せないんだ」

カウボーイは小さく笑った。

「成程、君はこの星の王様か。だが私にも私の世界がある。私の友人達にもね。そしてそれは他人の思い通りにはならない世界だ……特に君みたいなガキにはな。君が私達の世界を認めないと言っのなら私にも考えがある」

カウボーイは拳を手の平に打ちつけた。

「まったく、年寄りは大切にしろと最近の家庭では教えないかな？ 手がかかって困るよ」

「ちょっと待て二人とも、店の中で騒ぎを起こすな！ おい『K』、黙ってないで何とか言ってくれ！」

オカダが髪を掻き毟って叫ぶ。『K』は騒ぎに目もくれずに機材をチェックしていたが、やれやれとため息をつくと低い声で言った。「さっきの奴が言った通り、ここは踊る為の場所だ。喧嘩をするなら外でやれ」

言いながら、二つのカバンを同時に開く。中から二枚のレコードを引き抜くと、ガンマンが銃を扱うように両手の指でクルリと回し、プレイヤーに置いて針を乗せた。

最初に心臓をつかむような低い重低音が響き、不意に音が消えた。一瞬の静寂の後、つんざくような高速のブレイクビーツがフロアの沈黙を撃ち破った。

さっきと同じ機材を使っているはずなのに、まるで音が違う。何

重にも重ねられたビートが複雑な音の空間を造り出し、リヨウ達の騒ぎに気を取られていた人々がたちまちのうちに反応した。

フロアにいた全員がブースの近くに押しかけ、一斉に足を踏み鳴らす。それはスケアクロウ全体が揺れるような光景だった。

「……やるねえ」

カウボーイは呟き、リヨウに言った。

「すっかり場の主役を奪われたね。これ以上私達が揉めても無意味なんじゃないかな？」

リヨウはフロアの様子を見て口元を歪めると、踵を返して立ち去った。

「いいか、お前もDJだったら何があるうとレコードを回すのをやめるんじゃないかねえ」

『K』はレコードを回しながら、ブースの隣で不機嫌そうな顔をしている自分が追い出したDJに言った。

「DJってのは、絶対に音を止めちゃいけないんだ。例えば客が一人しかいなくても、それこそフロアで銃撃戦が起こってもな」

そして『K』は次のレコードの音をチェックし始めた。

音が止まったのはアンタがいきなり後ろから引きずり下ろしたからじゃないか。まだ若いDJは思ったが、『K』が恐そうなので言うのをやめた。

「大丈夫かい？」

「ええ、少し突き飛ばされただけですから……」

カウボーイに尋ねられ、僕はリヨウの後ろ姿を眺めながら呟いた。カナは例の女装集団に混じって話をしている。さっき突き飛ばされた時に助けられたらしい。

「……ドロシー？」

僕はドロシーの姿を探した。ドロシーは少し離れた所で僕とは違う方向を眺めていた。その視線の先には、あのセルロイドの美女が

いてドロシーを見つめ返していた。

女は表情を変えることなくドロシーを見つめていたが、不意に視線を逸らした。

「踊ろうか？」

「……そうね……」

女の姿を目で追っていたドロシーが、カウボーイに尋ねられてこちらを振り向く。その瞳は、僕が見たことがないほど悲しげだった。ドロシーは僕の前に立つと軽く僕の肩を叩いて微笑んだ。

「貴方も一緒に踊ろうよ。リョウって子もこれ以上は手を出せないわ」

そしてドロシーは、カウボーイの差し出した手を取りフロアの方に歩いていった。

あの女とドロシーは顔見知りなのだろうか？ カウボーイとも初対面には見えない。

「世の中には僕の知らない世界があるんだな……」

時の流れは一つではない。僕から見えない世界にも様々な人達がいて、様々なことを考え、行動している。それはとても当たり前なことだけど、つい忘れてしまうことだ。

そして僕は、そのすべてを知ることができない。

……悲しいことだ。

「先輩、私は先に行ってますね！」

カナはすっかり打ち解けた女装の男達と腕を組んで歩いて行った。「変わった子だな……」

僕はカナを見て微笑んだ。今までの僕は、何とかして『普通』に近づこうとしていたけれど……今は心から、目の前にいる変わった……でも魅力的な存在のことを、もっと知りたいと思う。

その時、僕の隣で声がした。

「貴方……あの女には気をつけた方がいいわよ」

青い髪をかき上げながら呟いたのは、あのセルロイドの美女だった。

第三話「カカシとセルロイドの美女とライオンがメリーゴーラウンドの中で踊る」

「君がこの国に戻っているとは知らなかったよ」

大音響の中、カウボーイはドロシーの耳に口を寄せて囁いた。

「ところでさっきの子は誰だい？ ……君の新しい恋人かい？」

「そんなところね。どう評価する？ バート」

「悪くはないね。でも今のままじゃダメだ。ものにはならないよ」

「昔の貴方に似てるわ」

「おいおい、冗談だろ？」

カウボーイは勘弁してくれといった顔をしたが、すぐに笑って言った。

「個人的には、あの可愛い子猫ちゃんの方が気に入ったな。あれは大物だ」

「カナのこと？ ……ま、それは認めるけど。バート、貴方の趣味も変わらないわね」

「わかってないね、引つ搔かれるくらいがいいんだよ」

「……パールの様子はどうか？」

ドロシーの問いに、カウボーイの顔から笑みが消えた。

「……良いとは言えないね。相変わらず境界線を彷徨ってる」

「そう……」

ドロシーは悲しげに目を伏せた。

「踊ろうか？ せっかく『K』もいるんだから」

カウボーイが元気づけるように言った。

「リヨウ……盛り上がってるな、フロア」

リヨウとフロアを交互に見つめながら、ジンは呟いた。

「行きたいんだったら勝手に行けよ」

リヨウは誰もいなくなったカウンターで椅子に腰かけていた。フロアに人が移動したので、ウェイターさえいない。

「何だよ、あいつらも根性ねえよな？」

ジンは大袈裟に手を振って言った。リヨウのそばにはジン以外に仲間はおらず、皆フロアで踊っている。ジンは更に大袈裟に喚いていたが、リヨウが無関心なので少し離れた席に座った。

「言いたくはねえけど、今日のリヨウ、少しおかしいぜ？」

「……黙っている」

ジンはこれ以上の刺激は危険だと思い、飲み物を探しにカウンタ―の中に入った。

リヨウは取り出したナイフを手の中で弄んでいたが、何かの弾みで留め金が外れ、飛び出した刃に指が少し傷ついた。

「……………絶対に許さねえ」

リヨウは指の血を舐めると、ナイフをカウンターに突き立てた。

「くだらない……」

「何がくだらないんです？ えっと……」

「……パール」

セルロイドの美女は、下から睨むようにして僕を見つめた。

顔にかかった青い髪が白い肌に影を落とし、大きな瞳は金色のアイシャドウに囲まれている。遠くから見た時はわからなかったが、左目には緑色のカラーコンタクトが填められており、何となくワニの瞳のような印象を僕に与えた。

「名前はパールよ。ここではね」

セルロイドの美女……いやパールは、少し掠れた小さな声で呟いた。

「パール……さん、何がくだらないんです？」

僕は彼女の言わんとすることを何もつかめないまま尋ねた。

「貴方のすべての行動がよ。何もかもね」

パールはフロアの方に目をやった。

「別にあんな男を庇うことはないのよ」

「カウボーイのこと？」

僕は彼女の目線を追いながら尋ねた。

「そうよ。あの男は最悪よ、いつも偉そうなことばかり言って……
実際には、そんなこと何も信じちゃいないのに……くだらない」

パールは何処からか取り出した小さな容器を軽く振り、中身を手のひらの上に出した。それは大量の星形の錠剤だった。

これについては少し知っている。最近頻繁に出回っているドラッグの一つだ。

ドラッグと言っても、これは依存性や中毒性の低い、あくまでも一夜を楽しく過ごす為のものだ。僕も試しに飲んだことがあるが、ほとんど効果がなく、次の朝に頭が痛くなっただけだった。きつと体質が合わなかったんだろう。

何にしても、まともな健康状態なら個人差はあるが特に悪い効果は起こらない……はずだ、正しい使用法を守ってさえいれば。

しかしパールの手にある錠剤の数は、通常の使用量を遥かに越えていた。

「……それは多過ぎないか？ へたをすれば死んでしまうよ？」

パールはワニの方の目で僕を見ると唇を歪めて笑った。

「何を言ってるの？ 死にたいから飲むのよ」

僕は反射的にパールの手から錠剤を奪おうとした。しかし彼女が防ごうとしたので、錠剤は全て床に落ちてしまった。

「何をするのよ！ あれがないと……！」

パールは床に散らばった錠剤を信じられない物のように見つめ、もう一度錠剤の容器を取り出した。考えるよりも早く僕の手が動き、容器を弾く。容器は床に落ち、残っていた錠剤が散乱した。

「……どうして……どうしてよ!？」

パールは怯えるような目で僕を見た。その視線は焦点が定まっておらず、不規則にゆらゆらと揺れている。いきなり体を屈めると、パールは錠剤を拾おうとした。

「ダメだったら!」

僕は足下の錠剤を靴で踏みつけた。しかしパールは服が汚れるの

も気にせず僕の靴に指をかけ、引き剥がそうとする。

「あ、あれがないと……せつかく彼の目を盗んで隠したのに！ 何で……何でよ！」

泣きじゃくるような声は最後には金切り声となった。僕は錠剤の屑を後向けに蹴り飛ばすと、床に屈んで彼女の両腕をつかんだ。

「君の物を取ったのは悪かった。でも冷静に……」
「うるさい！」

パールは僕に腕をつかまれたまま大きく体を動かした。彼女の力は予想外に強く……更に困ったことに、彼女の細腕は自分の力にも耐えられそうになかった。僕は何とかして余計な力を入れずにすむ場所を探そうとした。

……その時、彼女の両手首に幾筋もの傷跡が見えた。

僕が手首の傷に気を取られた隙に、パールは少し離れた場所に錠剤が二つ落ちていることに気づいて体をひねった。

僕が我に返った時には、彼女は僕の手を振り解いていた。

「ダメだ！」

僕は後ろからのしかかる形で彼女を止めようとした。

後から考えると、僕は彼女の体に触りまくっていたわけだが、その時の僕は彼女のことを一人の成熟した女性とは考えていなかった。ただ、我侭で感情的な……壊れやすい子供のようなだった。

パールは僕が両手を床に押さえつけても錠剤を取ろうとした。そしてついに床に顔を擦りつけながら舌を伸ばし、床を舐めながら錠剤を舌ですくいとった。

「……何てことを……」

「え……えへへ……へへ」

パールは僕が上から退いたので体を起こして床に座り込んだ。そして口元を腕で拭くと顎を上げてゆつくりと錠剤を飲み込んだ。

「ハハハ……ハ……ハハ……ハハハハハ」

パールは体を折り畳んで更に笑い続けた……それはいつしか泣き声のようになった。

「ねえ、どうしてそこまでして飲むの？」

僕も床に座り込んで呟いた。元々そんなに効果のない薬だ、二錠くらいなら大丈夫だろう……問題なのは彼女の精神が薬に依存してしまっていることだ。彼女にとつては『薬を飲む』という行為自体が必要なのだ。敬虔な信者が毎日神に祈りを捧げるように……。

痙攣が治まった後、パールは静かに顔を上げた。

「……それでも死ねないからよ」

僕は涙で化粧が流れてしまった彼女の顔を眺めながら、彼女が人間であることを理解した。

P M・10:46

「……くだらない……」

パールは服の汚れを払いながら呟いた。

「何が？」

僕は床に座ったまま尋ねた。

「………何もかもよ」

そう言った時の彼女の瞳には、元の冷めた色が戻っていた。顔は更に青ざめ、とても薬が効いているようには見えない。

「そう思っただったら、今度からは誰もいない所で飲むことにしたら？」

僕が呟くと、パールは冷たい目で僕を見下ろして言った。

「調子に乗るんじゃないわよ」

そして彼女は歩いて行った。

フロアに足を踏み入れた僕に気づいて、カナは今まで一緒に踊っていたミンク達と別れて僕の方に近づいて来た。

「先輩、遅いですよ！」

口に手を添えて叫ぶように言う。それでも、フロアに響く音が大き過ぎ、カナの声はなかなか聞き取れなかった。

「ごめん、今日は色々あり過ぎてね。なかなか前に進めないんだよ」
僕もありったけの声を振り絞って叫んだ。

「……いろ……ですって？」

カナが耳に手を当てて尋ね返してくる。全部は聞き取れなかったらしい。

「リョウに殴られて、宇宙人に殺されそうになった。妙な夢を見て、人助けしたら怒られたよ」

僕は笑いながら言い、それから小さく呟いた。

「おまけに生まれて初めて告白したらものの見事にふられたよ」

「……ドロシーさんですか？」

それまで聞きにくそうにしていたカナが、最後の言葉に反応して僕を見つめた。

「……何でそこだけ聞き取る？」

僕は仕方なく肩をすくめるジェスチャーをした。

「へへえ、そうなんですか！先輩、可哀想ですね！」

カナが明るい声で言う。僕はカナの柔らかい体に手を回し、そつと抱き寄せた。

「……どうしたんですか？」

右の後頭部の辺りから、カナが呟くのが聞こえた。

僕の腕の中で、暖かい物が小さく震えた。光も音も振動も、彼女を感じようとする以外のすべての感覚が鈍くなったように感じられる。

僕は生まれて初めて、人生を楽しんでもいいのかもしれないと思つた。もしかしたら、誰かを恐れる必要などないのかもしれないと。誰かに自分の心を全てさらけ出してもいいのかもしれない。誰かを求めてもいいのかもしれない。僕は初めてそう思つた。

僕はカナの髪に鼻先を埋めて呟いた。

「カナちゃん。僕は今、思ってたんだけど……君って本当に可愛いね」
カナは僕の体を引き離すと、不思議そうな顔をして微笑んだ。

「……やっとわかってくれたんですか？」

僕はカナの耳元で囁いた。

「ごめんね。バカなもので」

「許しません」

カナは僕の胸を軽く叩くと、フロアの中央に進み、振り返ってついてくるように手招きした。

「……バカだよなあ……」

僕は指で頬を掻きながら呟いた。

「本当に……何でこんなことがわからなかったんだろ？」

「……何がいけなかったんだろ？」

カナは人込みの中を進みながら呟いた。

「今更『可愛い』？ 男ってもう少し下半身で動くものだと思ってたのに……」

カナは後ろから彼がやってくるのを確認して呟いた。

「ま、結果オーライってやつかな？」

PM・10:51

「踊るのは苦手だよ」

「何言ってるんです！ ここまで来て！」

カナは僕の手をつかんで言った。

「それに……みんな変ですよ？」

確かに……みんな変だった。

僕らの近くには例の女装集団がいて、妙なダンスを踊っていた。

特にミンクは、大きな体を震わせて酸欠の金魚みたいに手足をばたつかせ、甲高い叫び声を上げていた。

「フォッ！ フォッ！ フォッ！ フォッ！ ……ハッ！ カナちゃん！ フォッ！」

いつの間にか、僕らはミンク達に取り囲まれていた。服装の派手さもあいまって、巨大な熱帯魚の群の中に放り込まれたようだ。

「ほら、先輩踊りましょうよ」

カナが軽くリズムを刻みながら僕を急かす。

踊るという行為は好きじゃない。僕が考えるに、踊るというのは人間の体が音楽に同調することだと思う。

昔とあるミュージシャンが、世界は小さな粒子の振動によって構成されていると言っていた。『木』と『人間』の違いは物質的なものではなく、固有振動周波が違うだけだと。

だとすれば、人間の体がリズムに合わせて踊る時、人間の体は人間とは違う『何か』へと変化しているのだろうか？ 同じ音楽に合わせて別の人間が踊る時、人々のリズムは近くなり、同じ存在に……世界のリズムに近づくのだろうか？

だが、僕は踊るのが嫌いだ。僕のリズムは世界のリズムと同調できない。僕は世界から切り離されているし、その波に乗ることもできない。

まるで大きな海の前に立たされた、泳げない子供のように。

「ほら、難しく考えないで体を動かせばいいんですよ。ほら、その調子！」

「あ、ああ……」

僕はとりあえず、おっかなびつくり体を動かし始めた。

「何だ、先輩うまいじゃないですか！」

揺れる髪の向こう側で、カナが悪戯っぽく微笑む。

「フォッ、フォッ、フォッ、フォッ！」

「ミンクさん、ぶつからないで下さい！」

「いいじゃない！ みんなで楽しんでんだから！」

僕は、カナとミンクが互いを押し退け合う間に挟まれながら、いつの間にか大きな声で笑っていた。確かに僕は、世界のリズムとは交信できないかもしれない。それでも、この奇妙で歪な者達のリズムは感じ取ることができる。

いつしか僕は、ミンクやカナ達と一緒に踊っていた。多分、僕の踊りは下手で奇妙に見えるだろうが……そんなこと知ったことか。

と、不意にかかっていた曲のリズムが変動し、金属質のギターのリフが高らかにフロアに響き渡った。エコーのかかった高速のラップとドラムンベースが続く。

『K』のテクニクによって圧倒的な存在感を得たビートがフロアを更に盛り上げ、皆が一斉に踏み鳴らした地響きによって、本当にスケアクロウが揺れた。

人が流れ、僕らはDJブースの方に押し流された。

そこにはドロシーとカウボーイの姿があった。ドロシーは相変わらずのジプシーのようなダンスを披露しており、カウボーイはどう見ても、モンキーダンスかサタデーナイトフィーバーを三、四倍速で再現しているように見える。

二人の動きはまったく接点がないように見えた。しかし二人の動きは完全にリズムを捉えており、不思議と息が合っていた。

ドロシーは僕達に気づくと、手を振って来るように誘った。

僕とカナ……そしてミンク達はドロシーの所に雪崩れ込み、後は様々にパートナーを交代して踊り続けた。

Q・何故一人でも踊れるのにパートナーが必要なのか？

A・決まってる。二人で踊った方が楽しいからだ。

「楽しんでる？」

ドロシーが僕の耳元で囁いた。久し振りに彼女の体温を感じた気がする。

「ああ。そうだ、さっきパールと話したよ」

ドロシーが驚いた顔をした。

「やっぱり知り合いなんだ」

「……昔、色々あってね」

「とても寂しそうな目をしていたよ」

僕が言うと、ドロシーは少しだけ笑った。

「彼女は人生を楽しむのを怖がってるのよ……幸福になるのをね」

「それは多分、彼女だけじゃないな……」

「……そうかもね」

ドロシーは目を細めた。

振動と光が回転し、僕は大きな流れに飲み込まれていくような感覚に襲われた。

二枚のレコードの回転と共に、フロア全体が回転していく。手を伸ばすと、ドロシーは指先を握ってくれた。

P M . 1 1 : 3 5 , 2 1 S

「楽しんでるか？」

不意に冷たい手が僕の視界を遮った。

驚いて振り返ると、そこにはリヨウが立っていた。顔には血の気がなく、目だけが異様に光っている。

「リヨウ……君も踊りに来たのか」

呟くように言った僕の言葉は、多分聞き取れなかっただろう。それでも、リヨウは静かに笑って首を横に振った。

リヨウの様子は奇妙だった。まるで世界から切り離されているかのような……スケアクロウを満たすアップテンポの曲も彼の体を素通りしているようだ。

彼は土砂降りの雨の中、傘をささずに立ち尽くしているように見えた。

「リヨウも一緒に踊らないか？ カウボーイ達のことなんかどうでもいいじゃないか」

周りの者に押されて、僕達の間の距離が縮まる。僕の言葉を聞き取ったのかどうかわからないが、リヨウは両手を伸ばすと、僕の顔に手をかけて両方の親指で僕の瞼を閉じた。

リヨウが僕の眼球を押しつぶすのではないかとの考えが頭をよぎる。

しかしリヨウは、それ以上指に力を込めることはなかった。

「リヨウ？」

僕は不安になってリヨウに呼びかけた。その時、僕の額に何か暖かくてやわらかな物が一瞬触れた。それからリヨウは自分の額を僕の額に当てた。

「……お前は何かわかっていない……」

リヨウの声は額の骨を通じて頭の中に直接響いてきた。

「……………リヨウ？」

僕は暗闇の中で手を伸ばした。しかしその手がリヨウに触れることはなく、リヨウの指も、額も僕の顔から離れていた。

急に視界が戻り、僕は目を擦りながらリヨウの姿を探した。

過剰に目に入る光と色の中で、人込みの中を進むリヨウの後ろ姿が見えた。行く先にはカナとミンク達がいる。

……………そこにいてはダメだ。

僕がリヨウの後を追おうとした時、それまでリヨウと話をしていたカナが、リヨウの頬を平手で打った。

P M ・ 1 1 : 3 6 , 3 5 S

カナは自分の近くにリヨウがいることに気づき、汗ばんだ額を拭いてリヨウを見た。

「リヨウさん……………何かご用ですか？」

感情をできる限り抑えた声で話しかける。勿論油断などしていない。カナはリヨウのことが嫌いなわけではなかったが、非常に気をつけなければならない人物であることは十分に承知していた。

「……………やあ、カナちゃん」

リヨウが口元を曲げて呟く。多分、微笑んだのだろう、とカナは判断した。目元は細くなっているし、表情も穏やかだ。だがどんなに外見が『微笑み』であつても、カナはリヨウが笑っているようには見えなかった。

不意に、リヨウがカナの後頭部を持って顔を近づけた。

「さつきは悪かったな。ついカツとなっちまった」

リヨウがカナの耳元で囁く。こうでもしないとほつきりと聞き取れないことはわかつているが、カナは緊張に体を固くした。

「……………ところで、カナちゃんはあいつとはどうなってるんだ？」

リヨウは言った。

「もしかして、好きなのかい？」

カナは体を緊張させながらも強い口調で言った。

「そんなこと、リヨウさんには関係ないじゃないですか」

「……成程ね」

リヨウが小さく笑ったのが聞こえた。

「カナちゃん！ 大丈夫！？」

ミンク達が近づいてきた。皆リヨウを警戒し、少し距離を取ってリヨウを睨んでいる。心配ないよ、と身ぶりで示し、カナはリヨウを見つめた。

「リヨウさん、私は先輩のことを一人の人間として評価しています。好きとか愛してるとか、男とか女とか、そんな俗っぽいものじゃない、あくまで興味ある対象だと思っています。先輩は、もっといえるんなことができるはずです！ 先輩をダメにしてるのは貴方じゃないですか！」

最後の台詞を大声で叫び、カナはリヨウから離れた。リヨウはカナの大声に少し首を曲げていたが、

「成程ね、それが君の愛し方か……」

今度は小さく呟いた。

「……俺は、そんなのは嫌いだな」

「何て言っただんです！？」

カナが大声で怒鳴る。

リヨウは逆十字のピアスを指で揺らし、カナに近づいて、耳元で囁いた。

「お前は薄汚い売女だって言っただよ」

刹那、カナの顔色が変わった。

カナは平手でリヨウの頬を叩いた。

リヨウは弾かれた顔を戻し、口元を歪ませた。

次の瞬間、リヨウの右手にナイフが握られていた。

P M・11:38 / 47 s

誰かの甲高い悲鳴がフロアに響いた。

それが引き金になったように、フロアは混乱し、様々な声や怒声が飛び交った。

ほとんどの者が事態を把握できず、踊るのをやめて辺りを見回す。
……そして。

多くの者が事態を正しく把握した途端、一斉にフロアから逃げ出そうとする流れが起き、まだ何も知らない者をも巻き込んだ。

P M・11:38 / 50 s

「カナちゃん！」

僕は人込みをかき分けて走った。

日焼けした太い腕が体に当たり、汗ばんだ肌が押し当てられる。
それでも、僕は体を屈めながら人込みの中を駆け抜けた。

P M・11:38 / 53 s

ミンクが叫んでいた。

ミンクはカナがりヨウに腕を切られた瞬間から叫び続けていた。

その声はフロアの暑い空気を切り裂き、地の底に眠る死霊を呼び覚ましそうだった。

カナは切られた右腕のつけ根を手で押さえたまま床に倒れていた。
指の間から、真っ赤な鮮血が流れ出している。

「誰か！ 早く救急車を呼んでよお！」

仲間の女装した男達がカナの周りを囲んで叫ぶ。ミンクはやつと
我に返ると、体を小刻みに震わせながら頷いた。

そんな中、カナは床に倒れながらも必死に首を捻ってりヨウを睨みつけていた。

カナの視線の前を、黒革のブーツが横切った。

P M ・ 1 1 : 3 9 , 0 0 s

リヨウはナイフについた赤い血を眺めながら歩いていた。
ナイフから赤い血が一雫落ち、黒革のブーツが床を擦って嫌な音をたてる。

リヨウはナイフを大きく振り、血を払った。
そして、目の前の大男を睨みつけた。

P M ・ 1 1 : 3 9 , 1 7 s

「若い頃にはよく言われたよ。最近の若者はわけがわからないって……それこそ何千回、何万回とね」

カウボーイは小さく笑って言った。

「だから、これだけは言いたくなかったな……なあ、そう思うだろう？ 大人になんてなるものじゃないよな」

カウボーイは拳を手の平に打ちつけた。

「……くそガキが！」

P M ・ 1 1 : 3 9 , 2 8 s

ドロシーはDJブースの前の金網にもたれながら何かの歌を口ずさんでいた。

その後ろで、『K』はレコードを芸術的な動きでスクラッチした。

P M ・ 1 1 : 4 0 , 1 2 s

「……畜生」

リヨウはナイフの柄を擦るように指を動かし、刃に反射する光を

揺らめかせた。

「畜生、畜生、畜生、畜生、畜生、畜生、畜生、畜生、畜生、畜生」
リヨウは口の中で言葉を転がし続けた。

「……………畜生」

その時、リヨウの前に誰かが飛び出した。

P M ・ 1 1 : 4 0 , 4 7 S

「やめて、この人を殺さないで！」

リヨウの前に飛び出したパールは、両腕を大きく広げて叫んだ。

「パール！」

カウボーイが大きく目を見開き、

「パール!？」

ドロシーも驚いて金網から体を離す。

「お願い……………殺さないで……………殺さないで！」

パールの瞳は瞳孔が開き切り、頬の筋肉は引き攣っていた。元から色白だった肌は、青く染めた髪にも負けないほどに青ざめている。パールは全身を震わせて叫んだ。

「殺さないで……………殺さないで！ 誰も殺さないで！」

「……………黙れ」

リヨウは無表情にナイフを振った。

P M ・ 1 1 : 4 1 , 1 3 S

すべてがスローモーションのようだった。時は手に取れそうなほどにゆっくりと流れ、血飛沫は空中に止まっているかのようだった。僕は前にいた男を押し退けて、フロアの中央に飛び出した。

赤い血の雫は床に落ち、破裂するように飛び散った。少し遅れて、

青い髪の女が目を大きく見開いたまま倒れ込む。

「……リヨウ……！」

リヨウはぼんやりと右手を眺めていたが、自分の手にべったりと赤い物がついていることに今更ながら気づくと、小さく悲鳴を上げて右手を大きく何度も振った。

そして僕の言葉に振り向いた時……その表情は、泣き出しそうな子供のようなだった。

次の瞬間、僕は両腕を頭の上で交差させ、リヨウの胴体めがけて突っ込んだ。

P M・11:41 / 15 S

「パール！」

カウボーイは急いでパールのそばに駆け寄った。

パールの胸元から首にかけて大きな赤い筋が走っていた。真紅の裂け目からはおびただしい量の血が溢れ出し続けている。

「パール……何てことだ……！」

「……バート……」

パールが手を伸ばしてカウボーイの頬に触れた。

「ア……アタシ……アタシ、死ぬの？……怖い……怖いよ……助けてよ、バート……」

「大丈夫だ、君は死にはしない！ドロシーも僕もついている！」

カウボーイはパールを抱きかかえて必死に呼びかけた。

その時、近くにいたリヨウが倒れたので、カウボーイは顔を上げた。

P M・11:41 / 33 S

リヨウの体の上には、一人の青年の姿があった。リヨウの上半身を床に押しつけ、一杯殴りつけている。

「……ほくら、言った通りでしょう？ クミ」
カナは微笑み、気を失った。

「ああつ、止血、止血！ ええつと、傷口の上をきつく縛るのよね！？」

ミンクは大きく手を振りながら叫んだ。

「それから腕のつけ根も……傷口は心臓より上にするのよ？」
隣にいたオレンジ色の髪を被った男が口を出す。

「わかつてるわよ、そんなこと！」

ミンクは叫びながら手を振って自分を落ち着かせると、ドレスの裾を切り裂いてカナの腕を縛った。

「その服、高かったんでしょ？」

「そ……んなことどうでもいいでしょ！ 次は何処よ！？」

P M . 1 1 : 4 1 , 3 3 s

僕は無我夢中でリヨウのコートをつかんだまま起き上がった。

リヨウはぶつけたらしい頭を押さえると目を開いて僕を見た。

僕が上にいるとはいえ、リヨウがそのまま反撃してきたら僕に勝ち目はなかっただろう。

しかしリヨウは自分の手にナイフがないことに気づくと、近くに落ちているナイフを取ろうとして手を伸ばした。

その瞬間、僕は確信した。

今なら、リヨウに負けはしないと。

僕はリヨウの顔面を殴りつけた。それからリヨウの髪をつかんで頭を床に打ちつけた。リヨウは小さく悲鳴を上げると、初めて僕の存在に気づいたように睨みつけてきた。

「……てめえ……！」

僕は冷静だった。何故かはわからないが、本当に冷静だった。い

や、もしかしたら頭の何処かが麻痺したのかもしれない。それでも僕の頭と体は、自分のすべきことを正確に理解し、実行していた。僕はもう一度リヨウの顔を殴りつけると、立ち上がって叫んだ。
「立てよ、リヨウ！……勝負しようか！」

P M ・ 1 1 : 4 2 , 0 0 s

メリーゴーラウンドはゆっくりと回転を止めた。

僕の周りで回転していた世界は正常な状態に戻り、時間の流れは通常の速さを取り戻していった。

回転の中心には、僕とリヨウだけが残った。

僕はふらつく体を何とか支えながら立っていた。先程までの混乱は治まり、ただ心臓が音高く鳴り響いている。

周りも徐々に見えるようになった。フロアには僕達二人以外誰もいない。皆ここから避難したらしい。リヨウの向こうには、倒れたパールを抱えているカウボーイの姿が見える。

その時、低い呻き声を上げながら、リヨウが起き上がった。

ぎらつくような目で僕を睨みつけてくるかと思ったが、リヨウの目には力がなかった。

「……どうして……」

リヨウは泣きそうな声で呟いた。

「どうしてなんだよ……っ」

「そこまでだ、リヨウ！ 動くんじゃねえ！」

何処からかオカダの声が響いた。

「何てことをしてくれたんだ！ もう救急車と警察を呼んだからな、観念しろ！」

「うるさい……うるさい……うるせえって言ってるんだっ！」

リヨウはうつむきながら呟いていたが、急に立ち上がって叫んだ。

そして、僕の方に顔を向けた。

「どうしてお前が俺の邪魔をする！？ 俺達はもつとわかりあえるはずだろう！？」

リヨウは言った。

「初めて見た時から感じていた、お前は俺に近い人間だと。お前なら俺を理解できるはずだ！ お前だって苦しいだろ？ こんな世界嫌いだろ？ どうしてこんな世界で生きなきゃいけないんだ。何でこんなに苦しまなきゃいけないんだよ！ 俺達はもつとわかりあえる、理解できる……もうこれ以上、俺を苦しめないでくれ！」

「何よ！ カナちゃんを傷つけといて勝手なこと言わないでよ！」
カナを抱えてミンクが叫ぶ。僕は首を横に振ってミンクにやめるように頼むと、リヨウの方に向き直った。

「リヨウ、僕も君のことは嫌いじゃない」

リヨウが虚ろな目で僕を見る。僕の心に何かが突き刺さった。

確かに、僕とリヨウの関係は良いものとは言えなかった。しかし僕は、リヨウと別れたいとか、リヨウが憎いとか……そんなこと、一度だっと思ったことはなかったのだ。それでも……いや、だからこそ、今ここで言わなければならない。

僕はゆっくりと言葉を吐き出した。

「僕は君のことは嫌いじゃない。だけどリヨウ、君のやったことは許せない！ 絶対に許すわけにはいかないんだ！」

リヨウが大きく目を見開いた。

「……リヨウ、僕も一緒に警察に行くよ。だからもうやめよう、こんなこと」

僕はゆっくりとリヨウに近寄った。

「今はまだ、君が何を考えてるのかよくわからないけど……それでも一緒にいるくらいならできるよ。少しずつわかり合えばいい……そうだろう？」

僕はリヨウの前に立ち、彼の手を取ろうとした。リヨウは力のない目を僕に向けて立ち尽くしている。

その時、誰かが後ろから僕を羽交い締めにした。

「……ジン!?」

「まずいな……」

カウボーイは呟いた。パールの脈がどんどん弱くなっていく。

その時、フロアの方でざわめきが起こった。カウボーイはそちらに目を向け、リヨウに立ち向かった青年が羽交い締めになっているのを見て眉をひそめた。

「こつちもまずいな……まったく!」

「大丈夫よ」

誰かがカウボーイの前に膝をついた。

「ドロシー……」

「本当、バカな子よね……」

ドロシーは長い髪をかき上げて呟き、パールの頬を撫でた。喉から胸元にかけての傷口を辿り、心臓の辺りを優しく手で被う。心なしか、出血の勢いが弱まったように見えた。

「大丈夫よ、バート。この子は死なないわ」

血にまみれた指を唇に当てると、ドロシーは立ち上がった。

「ジン! 邪魔をするな!」

僕は懸命に体をひねってジンの腕を外そうとした。

「黙れ! お前のせいだ……お前がいるから悪いんだ! お前さえいなきゃ!」

ジンは両腕にますます力を込め、僕の身体を締め上げた。肩の筋肉が圧迫され、骨が軋む。ジンの腕力はこれほどまでに強かったか!?

「どうして……どうしてお前なんだよ!」

喉の奥から搾り出すような声で、ジンは叫び続ける。

その時、リヨウが床のナイフを拾い上げた。

「リヨウ、殺しちまえ! こんな奴、殺しちまえ!」

ジンの声が耳元で響く。リヨウはジンの声も何も耳に入っていない様子で、ただナイフの刃を見つめていたが、

「……何でこんな簡単なことがわからなかったんだろっな？」
不意に、明るく呟いた。

「何でかなあ？ ……なあ、ジン？」

「リヨウ……」

ジンが緊張を解いたのがわかる。

リヨウは難しい問題の解き方に気づいた小学生のような、晴々とした表情を浮かべながら僕らに近づき……右手を振り抜いた。

一条の閃光が僕の顔をかすめた。

次の瞬間、僕は開放されていた……ジンの悲鳴と共に。

「ジン！」

僕は解放されると同時に振り返った。ジンが顔面を両手で覆いながら倒れている。リヨウが背後から僕の首をつかんだ。

振り向いた先にはリヨウの顔と……振り上げられたナイフの刃の煌めきがあった。

P M ・ 1 1 : 4 3 , 3 6 s

空気が抜けるような音がした。

短くて高い音だ。

しかし、何処か普段聞いている身の回りの音とは違う感じがする。何と言うか……とても乾いた堅い音で、心臓が締めつけられた。

……そう、怖い音だった。

死神がキスをしたなら、こんな音がするだろうか？

それとも……消音機つきの銃声か？

リヨウの右手が何かに引つ張られたように動き、手の甲から赤い筋が何本も吹き出た。銀色のナイフは宙を舞い、少し離れた床に音をたてて落ちる。

リヨウは呆然と自分の右手を見つめ……自力では動かなくなったそれを左手で支えた。

「……な、何だと……」

掠れた声で呟き、あの音のした方向を振り向く。

そこには、片手に銃を持ったドロシーが立っていた。

ドロシーの長い黒髪は、風もないのにたなびいているように見えた。赤い唇をきつく閉じ、静かな瞳でリヨウを見つめている。

「な、何なんだ……お前は……」

「さあね……貴方には関係のないことよ」

ドロシーは銃をリヨウに向け直した。

リヨウの額に玉のような汗が吹き出し、唇から血の気が退いてゆく。

「さて、どうする？ このままおとなしくすれば命は助けてあげるわ」

ドロシーは銃を持つ手を肩にかけるようにして、リヨウに向かって歩き出した。

「個人的には、それじゃあつまらないんだけど。アタシと遊んでくれるかしら？」

刹那、リヨウがドロシーから銃を奪おうと飛びかかった。しかしリヨウの手が彼女を捕らえることはなく、逆にリヨウの腹部にドロシーの膝がめり込んだ。

「アタシが十秒数える。貴方がその間に逃げる。ルールはわかった？」

腹部を押さえてうずくまるリヨウのこめかみに、ドロシーが銃口を押し当てる。リヨウは素早い動きでドロシーの足を払おうとしたが、その脚は空を切り……次の瞬間、リヨウの側頭部にドロシーの回し蹴りが炸裂した。

「――！」

着地と共に、ドロシーは少し離れた所に倒れたリヨウに銃口を向けた。

「二！……どうする、坊や？」

リヨウはギラギラ光る目でドロシーを睨んでいたが、口から流れる血の筋を拭うとスケアクロウの出口に向かって走り出した。

「あいつ、逃げる気か！」

オカダが叫ぶ。

「三！」

ドロシーはリヨウを追って歩き出した。

「ドロシー！」

我に返った僕が叫んだが、ドロシーは振り返ることなく歩き去った。

P M . 1 1 : 4 5 , 0 0 s

リヨウは消耗した体を壁にもたれかけさせて、スケアクロウから

地上へと続く螺旋階段を必死に這い上がっていた。

「六！」

階段の下の方から、あの女の声がする。

何者なんだ、あの女は……リヨウは埃まみれのコンクリートの階段に爪を立てた。

あの女がすべての原因なのか？ そうだ、あの女が現れてから何もかもが狂いだしたんだ。若松も、カウボーイも……あいつも。

俺はただ……リヨウは考えた。畜生、頭の中が鉛でできているみたいだ……！

「……俺はただ！」

「七！」

螺旋階段に女の声が響いた。さっきよりも大きくなっている。目に流れ込む汗を拭い、リヨウは最後の力を振り絞って地上へと駆け上がった。

スケアクロウがあるビルは比較的大きな道路に面しており、道路を挟んで向かい側には二十四時間営業のコンビニエンスストアがある。何とか地上に辿り着いたリヨウの目に、コンビニの看板を彩る電飾が見えた。

「八！」

すぐ下から女の声が聞こえた。

リヨウは明かりに吸い寄せられる蛾のように、コンビニを目指して歩き出した。

「九！」

地上に出てきたドロシーを見ると、リヨウは道路を横切っている途中だった。

ドロシーは微笑み、銃を構えた。

「……そして十！」

深夜のオフィス街に人通りはなかった。灰色の街灯が腕を伸ばした巨人のように立ち並び、小さな光の輪をアスファルトの地面に投げかけている。その輪の中に、黒いコートを着た長身の男が倒れ込んだ。

男……リヨウは地面に左腕をついて顔を上げると、大きく息を吐いた。

「畜生……！」

リヨウは氷のように冷たくなった右手を抱え、上半身を起こした。拭っても拭っても目に汗が流れ込み、コンビニの明かりがぼやけて見える。リヨウは立ち上がり、再び歩き出した。

その時、リヨウの右の太ももが、自分の意志とは関係なしに跳ね上がった。

一瞬の沈黙の後、太ももに焼けた鉄棒を突っ込まれたような激痛が走り、リヨウは悲鳴を上げて地面に倒れた。必死になって視線を巡らせ、道路の向こうで銃を構えている女の姿を見定める。

何か言っている……畜生、頭に響く気色の悪い声だ！ 頭がガンガンする……何て言ってるんだ！？

……と、女が微笑み……リヨウの耳が、突然彼女の言葉を聞き取った。

「車道に寝てると危ないわよ？」

二つの光が突っ込んできた瞬間、リヨウは咄嗟に身を翻して中央帯へと逃れた。

騒音と振動と大量の排気ガスを撒き散らし、鉄製の巨大な獣がすぐ脇を駆け抜けてゆく。

「……畜生……！」

リヨウは地面に仰向けに転がりながら吐き捨てた。右の太ももは焼けつくように痛い。幸い骨はやられておらず、出血もたいしたことはなさそうだ。

やがて、女がこちらに向かって歩き出した。リヨウは体を転がして起き上がると、道路の向こう側を目指した。

あそこまで行けば助かる。何故かそう思いながら。

P M . 1 1 : 4 5 , 0 0 s

「まだ救急車は来ないのか!？」

オカダは頭を押さえながら叫んだ。自分の店で怪我人が出ただけでもショックなのに、今度は銃撃戦ときた! オカダは地道な将来設計が崩れるのを感じて胃が痛くなった。

「バート! パールは大丈夫なのか!？」

オカダはほとんど祈るような気持ちで尋ねた。カナは何とか大丈夫そうだが、パールの傷は深い。これで死人が出たら洒落にならない。

「慌てるなよ」

カウボーイは静かに呟いた。

「息は小さいが何とか持ちこたえている。へたに騒ぐのが一番悪い」
カウボーイは悲しげな顔でパールの頬を撫でた。

「……大丈夫、彼女は死なないよ」

僕は床に座りながらカナがミンク達に囲まれて倒れているのを見た。カナの顔には血の気がなく、白い肌は更に青白くなっている。

……ドロシーはリヨウをどうするのだろうか?

僕の脳裏にリヨウを追って去っていくドロシーの後ろ姿が浮かんだ。

「ドロシーは僕達とは違う世界に生きている。彼女が殺すと決めたら本当に殺すよ。どんな方法でもね」

不意の声に顔を上げると、カウボーイが僕を見つめていた。

「良かったじゃないか。リヨウとは対立してたんだろ? 丁度いいじゃないか……ドロシーは必ず彼を殺す。勿論、ドロシーも決し

て捕まることはない。心配なくていい」

カウボーイは僕を挑発するように言った。

「いい話じゃないか。邪魔な奴なんだろ？ ナイフを振り回して、人を勝手に傷つけて……自業自得ってやつだな」

僕は黙って目を伏せた。確かにその通りだ。

……でも、どうしてだろう？ 僕はそれでも彼を憎む気にはなれなかった。

確かに彼の行動は許せない。でも、あれが彼の本意だったとは思えない……何だろう？ 僕達の間には何かが欠けている気がする。とても些細な、それでいて決定的な何かが。

「彼と僕の間には言葉が通じていない気がする。まるで翻訳ミスで本当に言いたいことが伝わっていないみたいだ」

僕は呟いていた。

「……どうすればリヨウと話ができるんだろう？」

カウボーイはそんなこと知ったことかといった顔をしていたが、やがて、仕方ないなあと言わんばかりのため息をもらし、言った。

「それはきつと、君が話しかけていないからじゃないかな？」

P M . 1 1 : 4 5 , 4 6 s

出口に向かって走り去ってゆく青年の背中を、カウボーイは微笑みながら見つめていた。

「確かに悪くないな、ドロシー」

カウボーイは顎を撫でて呟いた。

「……それでも俺には似てないと思うぞ？」

「おい『K』！ いい加減にレコードを回すのをやめろよ！」

「朝まで回す契約だ。カウボーイ、何かリクエストはあるか？」

何処までもマイペースな『K』の問いに、カウボーイは小さく笑って言った。

「それじゃあ、ビートルズの『t o m o r r o w n e v e r k

news』がいいな」

「わかった」

いきり立っているオカダをよそに、『K』は新たなレコードを取り出した。

「お前ら……状況を考えろっ！」

P M・11:46, 37s

コンビニでは、男女の店員二人が楽しげに話をしていた。

特に大学生の男子店員は女子の店員と遊びに行く約束を取りつけられたので上機嫌だった。やったね、こんなに可愛い子と一緒に仕事ができるなんて自分は本当にラッキーだ。昨日は探していた服が安く買えたし、今日の晩飯は旨かった。人生の調子がいいというのはこんな感じだろうか？ このまま一気に、この子ともうまくいくような気がする。普段はいい加減にしているバイトにも、少しはやる気が湧いてくるってものじゃないか？

「あっ……いらっしやいませ、こんばんは！」

その時ちようど入ってきた客を、男子店員は最高の笑顔で迎えた。店長が見ていたら感激したかもしれない。

しかし、入ってきた客はそれどころではなさそうだった。

「おいお前！」

リヨウはコンビニのカウンターに左手を叩きつけた。カウンターの向こうで、二人の店員が笑顔を凍りつかせて飛び跳ねる。

「刃物はあるか!？」

「……あ、ありませんよ、そんな物！」

女子店員が気丈に答えた。男子店員は壁にへばりついて震えている。

リヨウは小さく舌打ちして辺りを見回すと、飲料用の冷蔵庫の前に太ったパンク風の男を見つけた。ヘッドホンで音楽に聴き入って

いるせいか、こちらの騒ぎには気づいていない。リヨウはニツと笑うと、音もなく男の背後に近づき冷蔵庫の扉を蹴りつけた。勢いよく閉まった扉に手首を挟まれ、男が悲鳴を上げる。

「よお、キタジマ……いい所で会ったな？」

リヨウはキタジマの頭を扉に打ちつけて言った。外見に似合わず臆病なキタジマが、目に涙を溜めながらリヨウを見る。

「ものは相談なんだが……お前のオモチャを貸してくれないかな？」キタジマがぶんぶんと頷き、震える指先でジャケットの内側を指し示す。リヨウは薄く笑い、金と緑に染められたキタジマの髪をつかむと、もう一度扉に叩きつけた。

その時、コンビニの自動ドアがゆっくりと開いた。

同時にコンビニの防犯カメラが動かなくなったが、二人の店員はそれには気づかなかった。

P M ・ 1 1 : 4 7 , 1 2 S

「みっつけた」

ドロシーは親しい友人と待ち合わせた時のように楽しげにコンビニの中に入った。

両腕は後ろで組まれ、前からは銃の存在は見えない。

「どうしてだ……？」

リヨウはコンビニの入り口の正面に位置している飲料用の冷蔵庫の前に、ドロシーに背を向ける形で両膝をついていた。

「……どうしてこんなことになったんだ？」

リヨウはゆっくりと立ち上がった。

「それは貴方が、我俣を言い過ぎたからじゃないかな？」

ドロシーは物珍しそうに店内を見回しながら呟いた。

「そして人を傷つけた。ちょっとお仕置きが必要ね」

「……何がいけない？」

リヨウは額を軽く扉に打ちつけた。

「何がいけなかった？ 俺の親父は自分の欲しいものはすべて手に入れた。金も女も地位も名誉も、自分の妻が子供を生めない体質だということがわかると子供まで金で手に入れた。沢山の人が泣く所を見たよ……それでも奴は少しも悪いとは思っていない。むしろ負けた奴が悪いとさえ思ってるくらいだ」

リヨウはドロシーの方を振り向いた。リヨウから少し離れた所では頭から血を流したキタジマが必死で床を這っており、パンと惣菜の売り場からインスタント麺類の棚へと移動しつつある。

「それに比べて俺はどうだ？ 確かに沢山の物を与えられたさ。金も玩具も学歴も、十五の時には女までね。だが俺が本当に欲しい物は何一つ与えられなかった。自分で手に入れようとしても、いつも親父の存在が邪魔をした！」

リヨウは血まみれの震える右手を胸の所まで上げると、人差し指を辛うじて伸ばして十字を切るような仕草をした。

「誓ってもいい……俺が本当に我儘を言ったのは、これが初めてなんだぜ？」

その瞬間、だらりと垂らしていたリヨウの左手の中に、小型のナイフが魔法のように出現した。

P M . 1 1 : 4 8 , 1 9 S

戦いの終了を告げたのは、炭酸飲料の缶が弾けて中身が吹き出た音だった。

弾丸は冷蔵庫の扉と複数の缶を貫いた後に最奥の缶にめり込んでおり……それよりも先に、リヨウの左肩の皮膚と肉の一部をえぐり取っていた。

リヨウは肩を押さえて床に崩れた。口からは悲鳴の代わりに声にならない微かな息と、数滴の体液がこぼれている。

彼の額に、冷たい金属の塊が押し当てられた。

「……髪が少しちぎれたぞ……」

ドロシーはナイフに切り裂かれた髪を触りながら、静かに尋ねた。
「……どうする？」

「殺せよ……もう生きていたくもない」

リヨウが泣きそうな声で呟く。

「……………そう」

ドロシーは引き金にかけた指に力を込めた。

その時、コンビニの中に一人の男が駆け込んできた。

P M . 1 1 : 4 8 , 3 5 s

「待ってくれ、ドロシー！」

僕がコンビニに入ると、ドロシーはまさにリヨウの頭を撃ち抜こうとしていた。

「ドロシー、リヨウを殺さないでくれ！ そいつは……！」

僕は大きく咳き込みながら叫んだ。頭の中が混乱し、言葉にならない考えが物凄いスピードで駆け巡る。

「……………そいつは……！」

僕は考えた。生まれて初めて、必死で誰かに自分の考えを伝えようとした。そうだ。表に出さなければ、すべては伝わらないのだ。

「殺さないでくれ、ドロシー！」

すべての思いを込めて、僕は叫んだ。

「リヨウは僕の友達なんだ！ たった一人の友達なんだ！」

ドロシーは僕の方を振り向かずリヨウに銃を突きつけたままだったが、

「……………まったく、バカなんだから……………」

と呟き、銃を腰のホルダーに戻した。そして床を見つめたまま動

かないリヨウの耳元で短く囁くと、僕の方に歩いてきた。

「行こうか？」

ドロシーは何事もなかったかのように言った。

「……何処に？」

「何処かよ。そうだなあ、海が見たい」

「でもリヨウが……」

「大丈夫よ、死にはしないわ……多分ね」

そんな無責任なことを呟き、コンビニを出ていってしまふ。僕は迷った末にリヨウの方に駆け寄ろうとしたが、

「行けよ！ 何処にでも好きな所に行っちゃえ！」

リヨウがうつむいたまま叫んだ。

それでも僕が迷っていると、リヨウは大きくため息をつき、掠れる声で言った。

「……心配するな……俺は大丈夫だ」

僕はリヨウのことが本当に気がかりだったが、リヨウの言葉に願いのようなものを感じて、ドロシーの後を追って外に出た。

「……何なのよ、あれは……」

コンビニの女子店員は、去って行く二人を目で追いながら呟いた。隣では男子店員がカウンターの下にうずくまって震えている。こんな情けない奴とは絶対につき合ってやるものかと女子店員は思った。

「電話……あるか？ 携帯は落としちゃったらしい」

不意に掠れた声があった。声の方向に顔を向けると、血だらけの男が肩を押さえながらカウンターに手をついていた。

「で、電話ですか？」

女子店員は震える声で尋ねた。もしかして仲間でも呼ぶつもりだろうか？

しかし血だらけの男は唇を曲げて苦しそうに笑うと、こう言った。「警察にかけたいんだ。ここにナイフを持って暴れた男がいますっ

てね」

言いながら、男はカウンターから滑り落ちた。

「……できれば君が代わりにかけてくれないか？ 俺にはもう、そんな力はないんだ」

女子店員が慌てて奥に引っ込んでゆく様を見届けて、リヨウは目を閉じて呟いた。

「まったく……あの女、本当に最後までくだらないことを言いやがる……」

その時、リヨウの顔に暖かい物が触り、手の傷口に布が巻かれた。「大丈夫ですか？」

リヨウがうつすらと目を開けると、一人の少女が傷の手当てをしながらリヨウの顔を覗き込んでいた。少し痩せ過ぎだがスタイルのいい子だな、とリヨウは思った。

「俺なんかの手当てをすることはない……俺は死んだ方がいい」リヨウはもう一度目を閉じて呟いた。しかし少女は手当てをやめなかった。

「でも貴方はまだ生きています。何があっても生きていれば人生は捨てたものじゃないって、私の友達が言っていました」

この店オリジナルのデザートセットが大量に詰まった袋を下げながら、クミは言った。

教訓、時にはお気に入り物の物を求めて遠出してみるのもいいかもしれない。きつと思いがけない出会いがアナタを待っている。

それからスカートはミニよりロングの方がいい。いざという時に裂いて包帯として使えるから……。

ちなみにキタジマは、インスタント食品の棚の所まで匍匐前進を続けた後、店の角で行き詰まった。しかしその数秒後、雑誌売り場の方に直角に進路を変え、再び前進を始めた。

もしかしたらこのまま前進を続けたら再びリヨウの所に戻ってしまうのではないかと考えがキタジマの頭を過ったが、彼はそことについては次の角まで考えないことにした。

進み続けていれば、いつか何かが起こるだろう。そう思いながら、彼は前進を続けた。大切なのは進み続けること……生きるとはそういうことだ。

PM・11:50

「良かった、やっと救急車が来たよ」

僕は車のフロントガラス越しにスケアクロウのあるビルを眺めた。救急車は合計三台来ており、内一台はコンビ二の前に止まっている。

「助かるといいな。カナちゃんも、パールさんも……リョウも」

僕はハンドルに顎を乗せながら呟いた。何だかひどく疲れていたが、奇妙な達成感のようなものが全身を包んでいる。妙な話だ、まだすべてが解決したわけでもない、カナにも失礼だと思う。だが僕は、ともかく全力を尽くして自分にできることをやり遂げたのだ。それが何なのかと尋ねられると、はつきりと答える自信はないが……。

「ところで、さっきリョウに何て言ったんだ？」

僕は隣のドロシーに尋ねた。

彼女と僕は近くの路上に止めてあったリョウのマスターグに乗っていた。ドアは勿論ロックされていたのだが、いつの間にリョウから奪ったのか、ドロシーが持っていたキーで開けてしまったのだ。結局、彼女がさっさと乗り込んでしまったので、僕も同席せざるを得なくなってしまった。

「良かったね、って言ったのよ。探していたものが見つかって良かったね……ってね」

「……？　どういうこと？」

しかしドロシーは笑って答えなかった。

「それよりもドライブに行きましょうよ」

「ドライブ？」

「そう、夜明けの海までね……車は運転できるでしょ？」

ドロシーは座席で伸びをした。

AM・1:48

僕らのいる町から東に山を一つ越えると海につく。綺麗な砂浜を抱える小さな町で、夏には多くの海水浴客で賑わう所だ。しかし今の時季に来る者などいるはずもなく、真夜中ということもあって、ただ黒い海が広がっているだけだった。

「……暗いね。まるで大きな黒い壁みたいだ」

僕は海岸沿いの道路脇に停車すると、ドアにもたれながら呟いた。「そのうち明るくなるわよ」

ドロシーは車を降り、海岸へ続く階段を降りていった。

僕が後にとくと、階段の下には一本の小さな街灯が立っていて、その近くには様々な物が置いてあった。どうやら粗大ゴミが不法に捨ててあるらしい。

その中に、大きな白いソファがあった。

「ああ、これはいいわね」

ドロシーはソファを引っ張り出すと、叩いて砂を払い始めた。近くで見ると、それはまだ新品と言ってもいい物だった。

「それをどうするの？」

尋ねると、ドロシーはソファを運ぶのを手伝うように言った。

「これに座って待つよ。まだ時間はあるしね」

「……海を眺めていると、昔のことを思い出すよ」

ソファに腰かけて黒い海を眺めながら、僕は独り言のように呟いた。

隣ではドロシーが、僕にもたれるようにして座っている。

「さつき……リヨウとやり合った時に頭を打ったせいかな？ 妙なことを思い出したよ」

「何？」

「昔のこと。本当に小さかった頃の話だ」

「……聞きたいな」

ドロシーが小さな声で言う。

僕はドロシーの肩を抱き寄せ、視線を海から空に移して話し始めた。

「昔、両親が僕を連れて遊園地に行ったことがあったんだ。僕の両親は仲が悪くてね、いつも喧嘩ばかりしていた。本当は二人とも、全然悪い人なんかじゃないんだ。一人で腹を立てたりする人じゃないんだ。いつも機嫌が良くて僕に優しくかったよ……一人ならね。」

僕は未だにあの人達が、どうして喧嘩していたのかわからない。別にどちらかが浮気していたわけでもなかったし……共稼ぎだったから経済的なことでもないと思う。ただ、あの人達は顔を合わせる と必ず喧嘩した。何気ない一言でもすぐに腹を立てて喧嘩を始めるんだ。まるで二人とも、相手の言葉が違う意味に聞こえているみたいだったよ。

最近思うんだ、あの二人は、同じように聞こえる『違う言語』を使っていたんじゃないかってね。二人とも違う惑星からこの星に来た宇宙人で、使う言語は似ているんだけど微妙に意味が違う……実際そんな感じだったよ」

「それならどうして結婚したのかな？」

「さあね、それもわからないよ。多分、出会った時はそんなに言葉がずれてなかったんじゃないかな？」

僕は話を続けた。

「とにかく、ある日僕達は遊園地に行くことになったんだ……」

P M・1:48

遊園地は曇りだった。

まだ昼間なのに辺りは暗く、青い雲が空を被い、日の光はその隙間に白く見えるだけだった。でも僕は上機嫌だった。今日は珍しく家族揃っての外出だし、両親の機嫌もいい。二人で一緒に話をして

笑ってなんかいる。

「やっぱり、こういうのが家族ってものだよね」

僕はテレビのホームドラマを思い浮かべながら呟いた。僕は昔から『型通り』が好きだった。少なくとも型にはまらずバラバラになるよりはいい。

とにかく、僕は上機嫌だった。ピエロに赤い風船も貰ったし。

「ママ。僕、あれに乗りたくない」

僕の指差した先には大きなメリーゴーラウンドがあり、青い雲の下で回転していた。

僕は沢山ある木馬や馬車の中から、白い木馬を選んで乗った。空色の角の生えた綺麗なやつだ。最初から目をつけていたのだ。

「パパ、ママ！ 見える！？」

僕は木馬の上で両親に手を振った。両親は僕を見て笑いながら手を振り返してくれた。僕は嬉しくなつて勢いよく体を前後に振ると、まっすぐに木馬の進む方向を見つめた。

音楽が鳴り響き、メリーゴーラウンドは動き始めた。微かな地響きと機械の軋む音がし、木馬は上下に動きながら進み始めた。

僕は両親に手を振り続けた。両親の姿が中央の柱に消えるまで手を降り続け、消えてから前に向き直った。

メリーゴーラウンドは回転した。

一周目、僕が元の位置に戻った時、両親は僕に手を振ってくれた。二周目、両親は何か話していたが、僕に気づいて手を振った。

三周目、両親は僕を見ることがもなく言い争っていた。僕は声をかけられることもできず、ただそれを眺めていた。

両親の姿が柱の影に消える時、彼等が大きな身ぶりで言い争っているのが見えた。

AM・1:59

「嫌だっと思ったよ。今日は親の喧嘩している所は見なくていいと

思ったのに、ってね。勿論、そんなにはつきりと思ったわけじゃない。それに近いことさ……何せ小さかったからね」

僕は少し話すのをやめた。ドロシーは何も言わず、ただ静かに待っていてくれる。

まだ冬には程遠いが、流石に夜中の海岸は寒い。しかしドロシーと触れあっている所はとても暖かった。

僕は話を再開した。

「……どうしようか考えたよ。でも、どうしようもないだろ？ メリーゴーラウンドは回転しているんだ。嫌でも元の位置に戻ってしまう……親のいる所にね。どうしてなんだろう？ って思ったよ。今日は何かもううまくいきそうだって思ったのに……完璧な『家族』みたいだったのについて……ゴメン、これは今つけ加えたね。でき過ぎてる」

親は喧嘩した後、必ず僕に離婚したらどちらについて行くか尋ねた。そんなこと答えられるわけがない。僕は両親のどちらも好きだった。でも両親は、お互いを憎んでいた……いや、お互いを理解しようとしていなかった。

僕は今でも疑問に思う。人間は本当に、お互いを理解し合えるのだろうか？ 他人を信じたり、愛したりできるのだろうか？

僕の両親の間に『愛』というものはあったのだろうか？ 今は別々の星に住んでいる、言葉も通じない二人が、かつて一度でも同じ星に住んだことがあったのだろうか？

僕は未だにこの問題に答えを出していない。ただ、僕に言えるとしたら、誰かと誰かが会話して、愛し合って、お互いを理解し合えるとしたら、それはとても凄いことなんじゃないかってことだ。

多分、本当の奇跡ってやつは、そういうものなんじゃないかと思う。

「僕がどうあがいてもメリーゴーラウンドは動くのをやめなかった。

そこから逃げ出せば良かったんだけど、僕は木馬の上から動けなかった。きつと物凄く混乱してたんだろうね……メリーゴーラウンドを止める代わりに、自分の時間を止めてしまっほに」

「……自分の時間？」

僕にもたれていたドロシーが、顔を上げて僕を見つめた。

「後から聞いた話だけだね。僕は木馬から落ちて、そこで倒れたまま動かなくなつたそうなんだ。意識を失ったとか、息をしていないとかじゃなくて……ただ精神を一時停止させたみたいだって医者が言つたつて」

「元には戻つたの？」

「勿論さ、だから僕がここにいるんじゃないか。でも、それから一週間もその状態が続いたそうだよ。目を覚ました時には、両親はもう離婚してた……まあ、嫌な所を見ずにすんで良かったのかな」

僕は小さく息を吐いて言つた。

「もつとも、僕が時を止めている間に両親が仲良くなってくれていたら、それが一番良かったんだけどね」

僕は両手に顔を埋めて言つた。

「……臆病なんだろうな、僕は。傷つくのを怖がつてる……誰かを傷つけるのも怖がつてる。僕は他人のことを理解できないし、誰かのすべてを許すことができない……自分勝手にエゴイストだ。僕は、愛し合うつていうのは誰かと痛みを共有することだと思う。わかり合えなくて誰かが僕を傷つけて……僕も理解できずに傷つける。それでも、それを許し合つのが愛だと思う。でも僕は、それに耐えられそうにない」

「……大丈夫だよ。そのうちできるようになる」
ドロシーが囁いた。

「それから、アタシは愛つていうのは喜びを共有することだと思うな」

「……そうかもね」

僕はドロシーを見つめた。暗闇の中で、彼女の瞳が星のように煌

めいていた。

「何ことも経験だよ。最初は誰だってできないものよ」

AM・2:13

ごく自然に、僕達の唇が触れ合った。

まるで僕らの間に引力が働いたように、僕らの体は互いを引き寄せ合った。

……もしかしたら、本当に力があるのかもしれない。ニュートンだってアインシュタインだって解明できないかもしれないが……確かに何かの力だ。

この世界の法則は、僕らに生きると言っているのかもしれない。

僕が偉そうに言うことではないかもしれないが、人と人が愛し合う上で最も大切なことは、相手に何かを与えようとするのだと思う。そして、自分がどれだけ相手のことを大切に思っているか、どれだけ必要としているか……それを伝えることが必要不可欠なんじゃないかと思う。

そうすれば、相手も自分に何かを与えてくれるだろう。

……もつとも僕の場合、貰い過ぎたような気もするが。

AM・6:17

白い輝きが闇を切り裂いた。

闇の隙間から射し込まれた光は世界を空と海と大地に分け、空に暗い雲の波を、海に輝く光の波を浮かび上がらせた。

闇は瞬く間に千々に砕け散り、世界は光を受け入れた。

「……朝だね」

僕は呟いた。体全体が微かな疲労感に包まれている。耳鳴りがして、意識が自分の体よりも少し上の方にあるようだ。素肌に直接当

たる朝日が心地よい。

「そうね、綺麗」

僕の上に覆い被さるようにして座っていたドロシーは、僕の額の髪をかき上げて僕の目を覗き込み、意地悪く微笑んだ。

「悪くなかったわ……少し経験不足だけだね」

……この女は本当に最後まで余計なことを言う。僕は不機嫌な顔を作りたかったが、自然と笑みがこぼれていた。

「わかった……努力するよ」

何だってこんなことを言ってるんだか……まあいい。

僕が起き上がると、ドロシーは服を身に纏い始めていた。

僕には何故かわかっていた。

……もう、会えないってことが。

僕が服を着て立ち上がると、すぐ近くから波の音が聞こえた。いつの間にか、波打ち際がすぐそこまで迫ってきている。満ち潮なのだろうか？ 砂浜の上に薄く広がった水面は朝日を反射し、硝子でできた平野のようだ。

ドロシーは赤いサンダルを脱いで肩にかけ、足を波に浸していた。大地が呼吸しているような、そんなリズムで打ち寄せた波は、ドロシーの足にじゃれ合った後、素っ気なく退いていく。

「水はもう冷たいね。でも気持ちいいよ」

振り返ったドロシーの顔の向こうに、白く輝く太陽が見えた。初めて会った時には月が輝いていた……たった二日前の出来事なのに、もう何年も彼女と共に生きた気がする。

「……ほんとだ、もう冷たいね」

僕は素足で砂浜に降り、波に足を浸した。

見ていただけではわからなかったが、水は本当に冷たく、浸した足が冷たく堅い物で締めつけられている感じがした。足の裏で薄く積み重なった砂が崩れ、砂の粒が指の間に入り込んでくる。少しすると、徐々に冷たさにも慣れてきた。

僕は足の裏の感触を確かめながらドロシーの方に歩き始めた。

僕が隣に立つと、彼女は顔にまわりつく髪を気にすることなく僕を見つめた。

「もう行かなきゃ」

ドロシーが言った。

「うん」

僕は呟いた。

「もう会えないかもね」

ドロシーが言った。

「……………」

僕は答えなかった。

僕達は自然と太陽を見つめた。

「でも…………でも僕は、必ず君の所に行くよ。いつか必ずね」

「…………うん」

朝日を見つめたままドロシーが呟いた。

僕はその場で体の向きを変えると砂浜を戻った。

「…………じゃあね。また、何処かで…………」

僕がソファアの所まで行った時、後ろでドロシーの声がした。

僕は振り返らずに歩き続けた。

AM・6:28

砂浜から続く階段を素足で登り、道路脇に止めておいたマスターグの所まで来た時、僕はそこに一人の男がいることに気がついた。

男は車のすぐ横のガードレールにもたれかかって座り込んでいた。高級そうな灰色のスーツを着込み、同じ灰色のコートに身を包んでいたが、コートはあちこち破れて汚れており、濃い灰色のネクタイはだらしなく首に引っかかっている。男は大きく口を開けて眠っていたが、僕に気づいたのか目を開けて、口についたよだれを拭き取

った。

「やあ、これ君の車かい？ 子供のクセにいい車に乗ってるじゃない」

男の顔はかなり端正なものだったが、まるで体の内側から腐ってきているような雰囲気が表情に現れていた。僕は男の左の頬に、大きく曲がった三日月形の傷があることに気づいた。

「最近のガキは酷いもんだ、まるで下品なブタの集団だよ。真面目に働いて金を稼ごうなんて気がまったくない……親に甘やかされて育っているんだな、何処でも自分勝手に通用すると思ってる。奴らには、この国を良くしていこうって気がまったくないんだ」

男は僕が無視して車のドアを開けようとするのにもかまわず喋り続けた。

「僕は心配してるんだぜ？ この国の未来ってやつをさ。今にこの国はダメになる、みんな腐っちまうんだ……君達が初めの症状つてやつだな。この国はダメになる……これじゃ死んだ方がましだな！」
そして男は、引き攣った声で笑い始めた。

「……それで、貴方は一体何をしたの？」

僕は男に尋ねてみた。

男は僕が返事をすることを予想していなかったらしく、酷く狼狽えて口籠った。

「それに……人生は捨てたもんじゃないよ。多分ね」

僕は振り返って海岸を見た。

潮が引いてきたのか、海岸線は少し後退しているようだった。砂浜には白いソファアがぼつりと置かれ、人の姿はない。

ただ昇りつつある太陽によって、水平線の彼方から海岸にかけて光の道ができていた。

第四話「青年と少女が宇宙の旅に出る話」 - 1

AM・11:25

カナは白いシーツの上で目を開いた。

薄暗い部屋の中、皺のついたシーツにはカナと男の匂いがこびりついている。厚手のカーテンの隙間から射し込む光の筋の中で、白い埃の群れが舞っている。カナはベッドから頭を浮かせて男の姿を見つめた。

男は部屋の隅に置かれたソファ―に座ってテレビを眺めていた。

「ねえ、終わったんだから帰っていい？ 契約時間は十二時までになつてるけど、何もしないんだつたらいてもしょうがないでしょ？」

男は三十分前に『終了』してから、ずっとテレビを眺めていた。

カナと男が知り合ったのは……正確には、契約を交わしたのは昨日のことだ。クミの話によると、男は別の町の一流商社に勤めるサラリーマンとのことだった。クミはカナの安全を確保する為、仕事の前には必ず相手の身元を調べるようにしてくれている。

男の身元は確かだった。彼は一週間程この町に出張に来ているらしい。出張ついでのちよつとした息抜きと言ったところだろう、とクミは言った。

「まあね、会社は一流でもその男が一流とは限らないしね」

昨日の夜、カナはクミにふざけて言っていた。

「でもこの人、何でこんな朝早くにやりたいんだろうね？」

翌日、眠い目を擦りながら待ち合わせの場所に行ったカナの前に現れた男は非常に気味の悪い男だった。

見た目が悪かったわけではない。男は背が高く高級そうなコートを着ていたし、特徴的な所はないものの、顔立ちも整っていた。男は薄い唇の端を曲げ、少し高い声でカナに話しかけてきた。

カナは男に、まるでスタートレックに出てくるアンドロイドの『データ』のような印象を持った。

……いや、『データ』の方がまだ人間らしい、とカナは頭の中で訂正した。

男は小さな声でぼそぼそ話しながらカナについてくるように言った。

男が顔を横に向けた時、カナは彼の左頬に三日月型の傷があることに気がついた。

何が気持ち悪いのだろう？

顔が悪いとか、変な臭いがあるとこののならカナも酷い例を体験したことがある。しかし男から与えられる不快感は、それらとは異なるものだった。

男はホテルの前で立ち止まって振り返り、建物を指差して中に入るように言った。

カナは午前中から予約を入れているのだから、もっと何処かに連れ回すのかと考えていた。若い女の子と1日中デートを楽しみたいと考える中年の男は結構多い。

しかし、どうやら男は本当に今からやるつもりらしい。モーニングサービスがつくとも思っているのだろうか？

自分でホテルに入ると決めたくせに、隠れるように素早くホテルの中に滑り込んだ男が、まだ外にいるカナに早く来るように指図する。ゆっくりと歩いていくカナを、臆病そうな光を目に浮かべて見つめている。どうやら、この場に及んでカナが逃げ出すのではないかと考えているらしい。

カナとホテルに入る所を人に見られたくないようだ。こんな朝早くから少女を買う行為自体、十分に恥ずべきことだと思うのだが。カナが男に追いつくと、男は小さな声で文句を言った。カナが頷いて男の目を見つめると、男は慌てたように顔を背け、わかればいい、と呟いた。

カナは先程から、この男に対する不快感の正体を突き止めようとしていたが、この場に至ってそれが男の態度からくるものだという事に気がついた。カナは目を見ようとせずに話をされるのも嫌いだし、男が細かいことで文句を言うのも嫌いだった。何より、意地のない男は大嫌いだった。

「料金は一時間単位で支払って貰うからね。一分でも延長したら追加料金。それと必ずコンドームをつけること、これを守れなかったら罰金だからね」

エレベーターの中で、カナは営業用のやや冷たい口調で男に話しかけた。男が体を強張らせたのがわかる。

カナは童顔なので客がつけあがることが多い。勿論カナはそのことを自覚していたし、普段ならもっと穏やかな回避法を使うのだが、今回は少し苛立っていたので脅しをかけることにした。

「最初にも言ったけど、もし規定の時間内に私から連絡が来なければ仲間の男達がここに押しかけて来るわ。だから変なことはしない方が身の為よ……まあ、そちらの御要望にはできる限り応じるけど？ ……別料金でね」

エレベーターが目的の階についた。カナは男よりも早くエレベーターを降りると、最近練習している『悪い女っぽい顔』で男にこう言った。

「おじさんは私とお医者さんごっこしたい？」

男があからさまに動揺し、顔を激しく引き攣らせる。

カナは満足し、男から見えない所で小さく舌を出した。

クミはよく自分のことを棚上げにして、男には気をつけるようにとカナに言う。

勿論、カナも用心はしているが、実際にはそれほど心配していない。男が女に勝っているのは基本的な体力だけで、男というものは女よりも単純で……純粋な生き物だとカナは考えている。

よく女は仕事のプロになれないと言われるが、カナは少し違うよ

うに思っている。男はたった一つの仕事という愉しみに人生の全てを捧げられるほどに純粹で、女はたった一つの愉しみだけでは満足できないほどに欲深い存在なのだ。

特に、男の『使命』とか『信念』などの苦痛さえ伴う信仰にも似た考え方は、カナにはいまいち理解できない。決して嫌いではないが、度が過ぎるとバカらしく思えるのだ。

小さい頃、カナは近所の男の子達がテレビのヒーローごっこに夢中になる気持ちがよくわからなかった。遊び自体が嫌いなのではない。どうして内容をあそこまで忠実に再現する必要があるのだろうか？ 遊びは遊びなのだから、自分達で勝手に設定を作って遊べばいいじゃないか。カナはそう考えていた。

だが、今なら何となく『推察』できる。

男の子達は遊びの愉しみよりも、自分達をテレビのヒーローに近づけるという作業に夢中だったのではないだろうか？

カナはこれまでもずっと大人というもの……特に中年のおじさんが嫌いだった。

彼等はカナの考えや行動を認めず、古臭い習慣や形骸化した常識でカナを束縛しようとする。カナは常々、彼等は自分とは違う生物なんじゃないだろうかと考えていた。

だが最近、おじさん達と接する機会が多くなり、カナはあの男の子達とおじさん達にそれほどの差がないことを発見した。

おじさんと男の子の違いは遊び場の違いでしかない。男の子達は家や公園や学校で遊び、おじさん達は『社会』の中で遊ぶ。その目的は何でもいい。ヒーローのように世界を救うのでも、会社の売り上げを伸ばすのでも……国の経済力を上げるのでもいい。ようは一つの目的に向かって仲間と共に行動できればいいのだ。

この点で見る限り、おじさん達と男の子達はまったく変わらない。あえて違いを挙げるなら、『社会』という枠組みの中には人が多過ぎてなかなか主役が回ってこない……それくらいだ。

カナは、でつぷりと太って頭の禿げ上がったおじさん達の目の中

に、ほんの一瞬同級生の男の子達と同じ輝きを見る度に、やっぱりこの人達と自分は同じ生物なんだな、と考えることがある。もっとも、未だに好きにはなれないが。

ちなみに、小さい頃のカナは女の子と遊ぶことよりも男の子と遊ぶことが多く、ヒーローごっこの時のヒロイン役はカナの指定席だった。

カナは男の子と一緒に走り回るのが好きで、グループのリーダー格でいつも主役をやる子が好きだった。特に「僕は大きくなったら絶対に正義の味方になるんだ」と言っている時の彼が好きだった。そして彼もカナのことが好きだと言っていた。しかしカナのことが好きだったのか、カナの演じるヒロインが好きだったのかは未だに疑問だ。

カナが部屋に入ると、男は落ち着かないハツカネズミのように部屋の中を歩き回って何かを調べていた。カナは、もしかしたら部屋に仲間の男が大勢待ちかまえていてレイプでもされるのではないかと警戒していたが、どうやらそんなこともなさそうだった。

これは知り合いの子に実際に起こったことなのでカナも気をつけているが、心の何処かでは、それはそれで楽しいかもしれない思っているところがある。

クミは変な本の読み過ぎだと言うが、カナは性的快感に対する探究心が強い。特に『行きずりの男に身も心も犯される』というのは……前に見た映画みたいで刺激的なシチュエーションではないだろうか？

雑誌で読むところによると、女の性的快感のオルガニズムは男のものよりも遥かに深く複雑だとの話だ。それなら、折角女の体になされたのだ、行ける所までは行ってみよう。

こういう考え方を『退廃的』と言うのだろうな、とカナは考えた。ただ、実際に自分がそんな自虐的な快楽に身を委ねるか考えるのと首を横に振らざるをえない。クミもよく言うが、カナはかなり自

己中心的な人間だ。カナにはまだやりたいことが幾らでもある。『身も心も……』というような恋愛など、自分の行動の妨げだと考えてしまっただろう。本当に危険なのは、自分よりもむしろクミの方だ。カナはそう判断している。

カナは自分の行動を制限されるのが嫌いだ。今までの客の中にも毎月かなりの金額を支払ってもいいから自分の愛人にならないかと誘った者がいたが、カナはきっぱりと断ってきた。

肉体関係を持ったくらいで自分を思い通りにできると思われるのは吐き気がする。

クミが一度、皮肉っぽく言った。貴女にとっては恋愛だって束縛なんですよ、と。

カナはそれは違うと答えた。恋愛しても相手の奴隷になる気はないだけだ、と。

今までの客はクミの選択が良かったおかげか、問題を起こしたことはなかったが、カナにエクスタシーの工の字くらいしか与えることはなかった。

しかし今日の客は……それよりも酷そうだった。

男は部屋のチェックを終えると、カナをシャワールームに放り込み、出てきたところでそのままベッドに横たわらせた。

カナは少し落ち着かない気分になった。自分の体に自信がないわけではないが、男の目からは欲望や劣情といったものがまったく感じられず、ただ測定用の機械のようにカナの体を眺めている。

「ねえ、立っただけじゃつまらないでしょ？ 時間もなくなるし

……ねえ」

カナとしては不本意だが、この沈黙には耐えられそうになかった。普通の客なら、カナの体を見ればみつともないくらいの反応を示したはず……これは自惚れで言っているのではない。一流のセールスマンが自分の弁説に自信を持っているように、カナも商売の基礎となる自分の体の及ぼす効果については完璧に理解していた。

商売をする上で最も重要なのは、売る側が買い手に対して心理的に上位に立つことだ。売りつける商品がつまらない瓶の蓋でもかまわない。大切なのは自分の売りたいという気持ちを伝えることではなく、相手に買いたいという気持ちを抱かせることなのだ。それに必要なのは、自分の商品に対する絶対の自信。自分がその商品にどれほどの自信を持っているかを伝えることができればいい。

勿論、過剰に演出してはいけない。あくまでもさり気なく、だ。そうすれば相手は自分の自信に満ちた態度によって商品への欲望をかき立てられる。態度は低く、だが気持ちは高く……これがカナの考える商売のコツだ。

更に上級のテクニクとして、相手に『売りたいくない』という態度をとる、というものもある。人間は隠されると却ってそれが欲しくなる。隠すのは自慢するのと同じこと……一番いけないのは相手に媚びることだ。

しかし、カナはそうは思いながらも、珍しく自分から誘う方法を選択した。

自分は裸でベッドの上に転がっている。相手はそれを立ったまま眺めている。おまけに服を着たままだ。

これでは自分がバカみたいではないか？

「ねえ、早くしようよ……ね？ ……何かしてあげようか？」

カナは相手が相変わらずの態度なので、これだけはやりたくないと思っていたが、知り合いのバカな女の口調を真似しながら男の下半身に手を伸ばした。

「やめろ！」

男は突然反応し、カナの手をつかんで乱暴にベッドの上に突き飛ばした。男の瞳に言いようなない光が浮かび、蠟人形のような顔に血の気がさす。口元が痙攣したように震え引きつり、頬の三日月型の傷が醜く歪んだ。

「じゃあ……何がしたいって言うんですか？」

カナはベッドの上で仰向けになったまま肘をついて上体を起こす

と、初めて彼女本来の顔になって男を睨みつけた。

男はしばらく血走った目でカナを見つめていたが、やがて低く唸るように呟いた。

「余計なことは言わなくていい……」

それから男はカナの下半身に視線を這わせるところ言った。

「後ろを向いて四つん這いになれ」

最後に、男はカナに奇妙な命令を出した。

「そのまま動くな。何もなくていい」

一瞬、男の口調に怒りとも悲しみともつかない感情が含まれたような気がしたが、それはすぐに消えてしまった。

カナは信じられなかった。これまでに『動いてくれ』と言った客はいても、『動くな』と言った客はいなかった。後ろからするのが好きな客はいた。前からが好きな者もいたし……下からが好きな者も、数秒ごとに姿勢を変えなければ気がすまない者もいた。

しかし皆、相手の反応がないと不満そうだった。ある男などは、以前に買った娘がいかに無反応でつまらなかったかということ、カナに延々と語った。商売熱心なカナは無反応……あまり好きではない表現だが……マグロ状態は客に対して失礼だと考えているので、感じているふりをしてあげたところ、その客は規定の三倍の料金を支払ってくれた。

良質なサービスは常に料金に反映される。言い換えれば、こちらの提示した料金が支払われる以上、売り手としてもその範囲内で最大限のサービスを提供すべきなのだ。

今までの例外は六十近くの男で、これは彼が慢性のヘルニアを患っているせいだった。

だが今回の男は、まだ若いのにカナが反応することを拒否した。それで本当に楽しいのだろうか？ カナの今までの経験から考えても、それで楽しいとは思えないのだが……。

男は服を脱ぎながら、カナに早く四つん這いになるように言った。カナはよくわからない得体の知れなさを感じながら、体の向きを

変えようとした。

その時、男が低い声でカナにへその所の蝶の模様は何かと尋ねた。それはカナが先週入れたタトゥーで、青の発色が綺麗で気に入っているものだった。カナが説明すると、男は軽く鼻で返事をした。

カナは男がつまらなそうに小さく舌打ちするのを聞き逃さなかった。それはまるで、高い金を出して買った商品に傷を見つけたような反応だった。

第四話「青年と少女が宇宙の旅に出る話」 - 2

AM・11:27

カナはベッド脇の小さな机の上に置いてある缶ジュースを取ろうとして、缶を取り落とした。

絨毯の上に落下し、不規則なバウンドをして中身が流れ出す。

カナは慌てて缶を拾ったが、既にかんりの量が流れ出てしまっていた。カナはこれはシミになるかもしれないと思い、男の方を見た。

幸い、男は相変わらずテレビに集中し、缶のことには気がついていないようだった。

カナはみつともない所を見られなくて良かったと思い、缶を机の上に戻すと指についたジュースを舐めた。

……疲れた。

カナは心の中で呟き、ベッドに横たわって天井を見上げた。

白いカナの肢体が映っている。カナは天井が鏡張りであることに初めて気がついた。カナの白く滑らかな腰の付け根を、引っ搔いたような鏡の傷が通っている。

「ずっと下向いてたからなあ……」

男とのセックスは、ある意味非常に楽なものだった。カナはまったく動かなくていいのだから。男はカナをうつ伏せにさせた後、カナの肩と後頭部を押さえつける形で被い被さると、前戯も何もなくないきなり挿入し、後はただひたすらピストン運動を繰り返した。

……本当に、ただひたすらに繰り返した。

男の動きにはまるで変化というものがなく、メトロノームか何かがついているかのように規則正しかった。おまけにそれが延々と続くのだ。

物事は機械のように繰り返せばいいというものではない。特に女

性の体から快感を引き出すには、それなりの複雑な手続きが必要だ。擦っていけば勝手に終わる男とはわけが違うのだ。

しかし男の動きは正確なくせに非常にもたもたしており、一回の挿入で引き出されかけた快感は、次の動きの前に水がこぼれるように消えてしまい、更なる快感へと発展することはなかった。

別にこの男と楽しみみたい気持ちがあるのではない。自分の体がまるで快感を覚えず、この行為をビジネスと割り切れたらどんなにいいだろう？

逆に、男が凄いテクニシャンで、為す術もなく感じさせられてしまうというのも、まあ『退廃的』でいい。少なくとも、快感とも苦痛とも言えない中途半端な感覚を延々と与えられるよりは……。

カナはどうかしてまったく感じないか、それともそれなりの快感を得られる体勢を見つけようとした。しかし男はがっちりカナの肩と腰を押さえつけ、カナが動くことを許さなかった。男の動きから得られるものは、カナの中のバロメーターで常に『苦痛』と『変な感じ』の中間を指していて、どちらにも移動しようとはしなかった。

カナは頭がおかしくなりそうだった。まるで下半身をネバネバしたぬるま湯に浸されているようだ……熱く心地よいお湯でもなく、自分の体温が感じられる水でもない、ただひたすらに気持ち悪いぬるま湯……それは氷水よりもカナから体温を奪っていき、言いようのない不快感をこびりつかせた。

カナは泣き叫んで男から離れたい衝動にかられたが、男は腰の動きを変えることなく、凄い力でカナを押さえつけている。

カナは嗚咽をもらしそうになったが、声を出して感じているように思われるのも絶対に嫌なので、必死になって耐え続けた。

男は最後までまったくリズムを変えることなく腰を動かし続けた。永久に続くかと思われた地獄のような不快感をひたすらに耐えていたカナは、男が射精した後にもカナの体を離さなかったので、遂に気が狂いそうになった。そして男の力が弛んだ一瞬の隙について

脇腹に肘打ちを食らわせ、何とか脱出に成功した。

知らず知らずの内に涙がこびりついた目で男を睨みつけると、男は淡々とコンドームの処理をしていた。永久に続きそうなピストン運動の摩擦でコンドームが破れてしまうという悪夢を見ていたカナは、男のコンドームが正常だったのを見て息をついた。

何の準備もなく挿入されたせいで、膣が炎症でも起こしているように痛む。

カナは男がもう一度やると言ったら男を殺してでもこの部屋を出る気でいたが、男は相変わらず情欲の欠片もない目でカナをチラリと見ると、そのままカナに背を向けてベッドを降りた。

ベッドの端に移動して枕元の置き時計をつかみ、いつでも男に投げつけられるように身構えていたカナは、男が服を着始めたので緊張を解いてベッドの上に横たわった。

これでもし、男がカナに笑いながら「気持ち良かったか？」とでも尋ねていたなら、カナは男を本当に殺してしまっていただろう。

カナはクミも言う通り、非常にプライドが高いのだ。それを守る為なら何でもするだろう。カナはそう自覚していた。

しかし男は何も言わず、知らずに一命を取り留めた。

男は椅子に座ってテレビのスイッチをつけた。

カナはぼんやりと画面を眺めていたが、やがて自分を抱き締めるように体を折り曲げた。

AM・11:30

カナは天井に映る自分の体を眺めていた。

窓から細く射し込んだ光はカナの張りのある左の乳房にかかり、その白い肌を更に白く輝かせている。すっきりと浮かび上がった鎖骨から腹部への流れを眺めながら、カナはぼんやりと考えていた。

あの男は、一体何なのだろう？

最悪なセックス……カナは十数回目の同じ結論を下した。

確かに彼とは行きずりの関係でしかないし、愛情のこもった繊細な……満足できるセックスを望むことは最初から間違っている。終わればそれっきりで問題はない。

あの言い知れぬ不快感は、まだべったりとカナの体の内側にこびりついていた。まるでガン細胞のようにじわじわと繁殖し、体を侵食してゆくような気がする。

……何が気持ち悪かったのだろうか？

カナはさっきからこの疑問の答えを探していた。その時、男の見えるテレビから「お前なんか人間じゃない」との台詞が飛び出し、カナに答えを与えた。

そう、男はカナのことを人間として扱っていなかったのだ。

今までにも、カナをただ単に性欲の対象としてしか見なかった者は多い。彼等は滅多にありつけないご馳走のようにカナの若い体に飛びついた。時にはその欲求が暴走し、乱暴な行為に走らせることもあったが、そういった客はむしろカナとしては扱いやすかった。買い手の欲望が大きければ、売り手であるカナは精神的優位に立ちやすいからだ。

相手がカナの体を求めれば求めるほど、カナの商品としての価値は上がり、相手の欲望をコントロールすることは容易くなる。

しかし、この男はカナの存在そのものを否定した。彼はカナの人格を否定し、一個の人間として自分と交流することを拒絶した。

……つまり彼は、私のことをダッチワイフか何かのように扱ったわけだ……。

カナはそう結論づけ、同時に激しい憤りを感じた。

カナは、セックスというものは皮膚の擦りあいではなく『交流』の一形態だと考えている。勿論、客とカナの間には金の取引が横たわっているが、それでもカナは客との交流を大切にしてきたつもりだった。

実際、ことが終わったらさっさと帰ってしまう同業者が多い中で、

カナはおじさん達の世間話や愚痴を辛抱強く聞くという、彼等の家族でさえ行っていない崇高な行為をサービスとして提供していた。

人生に疲れたおじさん達は、十七歳の可憐な天使が自分の話を熱心に聞き、しかも時折「それは大変ですね」とか「がんばって下さいね」などという言葉を与えてくれるというだけで、規定の料金の何倍もの金を当然のごとく支払ってくれた。

カナは冷静な実業家ではあったが、常に計算で動いているわけでもない。彼女は話を聞いて自分が大変だなと思うから「大変ですね」と声をかけているだけなのだ。相槌を打つことに金がかかるわけもなく、大した時間の浪費になるわけでもないのだから、幾らサービスしてもかまわない。その考え方が、カナを実業家として成功させていた。

ふつつつと湧き上がってきた怒りは、しかしそれ以上の疑問によつて打ち消された。

……でも、何でそんなことするんだろう？　それで気持ちいいのかな？

ダッチワイフを人間に近づけるといふのなら……まだわからなくもない。しかしその逆をして何の意味があるのだろうか？

勿論、無反応のマグロでも人形よりは気持ちいいだろうとの自信はある。でも、折角こうして生身の人間とセックスできるのだからどうせだったら人間らしい反応を楽しむべきではないだろうか？

少なくとも自分が男だったらそうするだろうな、とカナは考えた。

「……ねえ」

男はカナが声をかけてきたことに驚いたのか、痙攣したような動作で振り返った。

「ねえ、どうしてこんな朝早くからこんなことしてるの？」

カナは昨夜から抱いていた疑問を口にしてみた。すると男は、何だそんなことかといった嫌そうな表情をし、無言のままテレビの方に目を戻した。

テレビでは昼のニュース番組をやっていたが、男は特に熱心に見ているわけでもなく、時間潰しでもするように大きな冊子を見ている……それは全国の鉄道の時刻表だった。

どうやら彼は、本当に帰りの電車の時間までの時間を潰しているようだ。

彼は小さな声で昼過ぎの列車で帰るんだと言った。

カナはせっかく女の子と一緒にいるのだから、もっと有意義な時間の過ごし方があるのではないかと思ったが、男はもうカナには何の興味も示さず、自分一人の世界に閉じ籠ってしまった。

テレビではニュースが流れ続けていたが、不意に画面が切り替わり、アメリカで起きた事件の速報に変わった。

それはとあるアメリカの地方都市の更に外れの荒野で、ある男が爆死したという事件だった。話によると、その男は勤め先の軍需施設から爆薬を盗み出し、荒野に積み上げて、その中に立てこもったらしい。

男は全国のあらゆる所に自分の考えを書いた手紙を出し、集まったマスコミと軍と野次馬の前で演説を行ってから、積み上げた爆薬を銃で撃ち抜いた。その爆発は、男を中心として半径数百メートルを吹き飛ばしたという。

幸いなことに、集まっていた者は皆、男の忠告に従って遙か彼方に逃げていたので、野次馬とマスコミと軍の関係者の鼓膜が破れかけたことを除けば、被害は数キロ離れた町の老婆が爆発の音に驚き、椅子から落ちて腰を痛めたくらいだった。

凄まじく派手で大がかりで……その割に被害の小さな自殺だ、と解説者は語る。

だが、それは被害の範囲を人間とその従属物に限定した場合の話だ。現地のレポーターも解説者も、一瞬にして命を奪われたであろう荒野の植物や小動物については、一切触れていなかった。

騒動の中心となった人物は、軍需施設で長年に渡り爆薬の製造と

管理を行ってきたという四十代の独身男性だった。

男の最後の演説を要約するとこうだ。

「私は長年爆薬を扱う仕事をしてきたが、これ以上自分の造った爆弾で人が死ぬのは耐えられない。だからここで爆薬を処理して自分も死ぬ」

そして最後にこう言った。

「全ての人々に愛と平和がもたらされることを！ 戦争のない世界が実現することを私は願う！」

その後レポーターは、男は非常に物静かで同僚と話をすることも少なかったこと、誰も彼が何を考えているのか知らなかったこと、女性との浮いた話もまったくなかったこと……そして男の部屋から世界中の紛争や対立に関する雑誌や新聞記事の切り抜きが見つかったことを伝えていた。

やがて生中継で画面に映し出されたのは、唾を飛ばしながら喚き散らしている軍需施設の最高責任者だった。

彼の話の内容はこうだ。

「誰が爆弾で死のうが知ったことか！ もっと軍は爆弾を落とすべきなんだ。そうしないと在庫が処分できないか！ 理由なんかどうでもいいんだよ、爆弾を落とせばそれでいいんだ！ どうせ死ぬのは知らない下等民族どもなんだからな！」

それからしばらくの間、画面には花畑の映像と『しばらくお待ち下さい』の文字が流れることになった。

「何でそんなことしたのかな……抗議なら、他に方法は幾らでもあるのに……」

カナは首をかしげて呟いた。

「大体どうしてそんなこと、そのおじさんがしなくちゃいけないんだろう？」

「……やるしかなかったんだ。彼にはそうするしかなかった」

返事を期待していたわけではなかったカナは、男がいきなり反応したので驚いて起き上がった。男はテレビから目を離すことなくじっとたたずんでいる。

「……どうして？」

カナは質問した。出会ってから初めて、彼と『会話』ができるかもしれないと思ったのだ。

「どうして彼はこんなことをしたんだと思うの？」

「……多分……本当に世界の平和を望んでたんだろう……」

「どうして？」

「彼は……人を愛してたんだ」

「……どうして？」

カナは同じ質問を繰り返した。

「どうして、この人がそんなことを思ってたってわかるの？ この人は今までほとんど人付き合いをしたことがなかったって言うてたじゃない。もしかしたら、本当は人を殺したいと思ってた可能性だって」

「彼はどうすればいいかわからなかったんだ……ずっと」

男が呟く。その声は今までの中で最も掠れた小さな声だったが、不思議と胸に響くものがあつた。それから男は信じられない台詞を……少なくともカナはこの男が言うことは絶対にはずれていた台詞を吐いた。

「結局、人は独りでは生きられないんだ……誰かと関係しないと生きていけないんだ」

カナは驚いていた。いきなり目の前に宇宙人が現れて「やあ、あそこのコンビニのパンって美味しいよね」と言われたくらいに驚いていた。

つまりこんな例えを思いついてしまうほど、カナは驚き、混乱したのだ。

カナの視線に含まれた驚愕と懷疑を感じ取ったのか、男は初めてカナの目を見た。

男の目は大きく見開かれ……まるで初めてカナという存在に気づいたようだった。男の手が震え、ビニール製の安っぽいソファの肘置きに爪が突き刺さった。

「……僕が悪いんじゃない……」

男の声に込められていた感情は、一瞬にして爆発した。

「僕が変なんじゃないんだ！ この世界が変なんだ。皆、嘘つきで傲慢で……気持ちの悪い奴らばかりなんだ。大体お前は何だ！」

カナはどうして男が叫び出したのかわからなかった。そもそも、カナはテレビの男について喋っていたはずなのだ。

男は立ち上がってカナを睨みつけた。

「体なんか売って、そんなことが許されると思っているのか！」

買ったのは自分じゃないか。そう思った途端、男の両手が迫り、カナはベッドの上に押し倒された。

喉が押し潰され、氣道を通る空気が奇妙な音をたてる。

ぼやけた視界の中で、男の頬の傷が奇妙に赤く浮かび上がっている。

カナは震える指先で男の腕を搔き毟った。だが男の力は想像以上に強く、指は今にも皮膚を突き破りそうな程にきつく食い込んでいる。

「体を売るなんて最低だ！ そんなことで愛なんか得られるものか…… お前らのような奴がいるからこの国は悪くなったんだ！」

男は泣き叫んだ。

涙を流していたわけではない。だが男は、間違いなく『泣いていた』。

「人と人はもつと深く結びつくべきなんだ！ お互いがお互いを愛し合い、傷つけることなどあつてはいけないんだ！ お互いを信頼し合い、裏切るようなことは起こつてはいけないんだ…… 世界には愛が必要なんだ！」

彼の最後の言葉は、『世界』ではなく『僕』と置き換えても良かったかもしれない。

しかしカナは、男の言葉など聞いてはいなかった。

男は腹部に衝撃を感じ、カナの喉を離して腹を押さえ、床に這いつくばった。胃液を吐き出しながら何度も床を叩き、やっとの思いで顔を上げる。

そこにはベッドの上に立つ少女の姿があつた。両の瞳に怒りの炎を宿し、自分を見下ろしている。

少女は一糸纏わぬ姿だったが、男の目には神々しくすら見えた。この少女なら自分を救ってくれるんじゃないか……そう考えた。

しかし、カナにそれを期待するには、気づくのがあまりにも遅過ぎた。

「貴方が私を買ったんでしょう！？ さつさと金を払って帰りなさい！」

少女の唇の隙間から、天啓のごとき言葉が放たれた。

AM・11:45

カナは床に這いつくばった男が立ち上がるのを見つめていた。

男は燃え尽きたような表情でコートを纏い、財布を取り出し中からまとめて紙幣を引つ張り出した。そしてそれが何枚なのか確かめようとせず、全部をカナの足下に放り投げた。

男は地獄行きの判決を下された亡者のような足取りで部屋を去った。

部屋を出る時、男は振り返って呟いた。

「お前なんか嫌いだ……死んじまえ……」

部屋を出た男は何故かエレベーターを使わず、狭い非常階段を使

つて下に降りようとして途中で足を滑らせ、一階まで転げ落ちた。
男はボロボロになったコートを気にすることもなく、掠れる声で
呟いていた。

「……僕は君のことが怖いんだ……」

A M . 1 1 : 4 6

カナはシーツの中で自分の体を抱き締めていた。

乳房のやわらかな感触と、皮膚の下の細い骨が感じられた。

カナは誰かに抱き締めてキスして欲しかった。本当にカナのことを理解してくれる誰かに……抱き締めて欲しかった。

カナは男から声をかけられることが多かった。数人の男性とは付き合った経験もある。その関係は肉体関係にまで発展することもあったし、プラトニックなものもあった。ただ全てが同じような終わり方をした。

男は皆、大体一ヶ月くらいでこう言った。そんな女だとは思わなかった……と。

そして大抵、その直後にカナのもとを去って行った。

かつて、クミに言われたことがある。

「確かに、貴女を理解できる男がいたとしたら、それはかなりの変わり者でしょうね」

いつでも憎まれ口を叩く背の高い親友を思っ、カナは少し微笑んだ。クミは自分が同情されていると思っっているようだが、それは違う。

クミがいなかったらどうなってしまうだろう？ 彼女との友情を心の支えにしているのは自分も同じだ。

だがその時、クミの言葉を思い出し、カナは更にきつく自分の体を抱き締めた。

貴女にとっては恋愛だって束縛なんでしょうね

それは違う、とカナは思った。

カナには誰かが必要だった。

それはありのままのカナを抱き締めてくれる者でなければならなかった。カナは可愛いだけの御人形になるつもりはなかった。

カナはベッドの中で考えた。

こういう気分を『孤独』と言うのだろうか……と。

A M . 1 1 : 5 8

カナは服を着ると部屋を出た。追加料金を取られなかったのだ。

カナはいつまでも落ち込んでいるのはやめにしようと考え、それから週明けに数学のテストがあることを思い出した。

空は綺麗に晴れていた。

カナは気分直しに別の男のことを考え始めた。予備校でいつも窓際の席に座って外を眺めている、少し年上の男のことだ。

カナは彼の何処か寂しそうな目が好きだった。いつも窓から何を見つめているのか知りたいと思っていた。

半年程前、街で知り合ったりヨウという男に紹介されて、カナは彼と知り合った。相手もどうやらカナのことは予備校で知っていたようだった。

リョウは彼を呼んでカナの『ビジネス』のことを話した。カナはどうしてそんなことを言うんだとリョウを怒ったが、彼は少し黙ってから「それは凄い」と呟いた。それは興味本意な言い方ではなく、カナのことを軽蔑したようでもなかった。彼はカナのことを、本当に『凄い』と思ったようだった。

その後、彼と親しくなればなるほどに、カナは彼の知識の広さと深さに驚かされた。彼はまた、繊細な感受性と鋭い洞察力を持っていた。ただ残念なことに、その繊細さに邪魔をされて、十分に能力

を發揮できていないように感じられた。

「まあ、あんな変わった人を理解できるのは、やっぱり相当の変わり者だってことよね」

呟いて、カナは少し意地悪く笑った。

クミは性懲りもなく、今度はリヨウのことを気に入っているらしい。

確かにカナもリヨウのカリスマは凄いと思っていた。彼に『ビジネス』のことを勝手に話したことを除けば、自分のことを見下さずに対等な関係を持つてくれているリヨウのことを、必要以上に嫌う理由はない。

しかしカナは、リヨウとこれ以上の関係になるつもりはなかった。何と言うか……根本的な所で、リヨウがカナに対して敵意を抱いているような気がするのだ。

それにリヨウは、仲間と共に夜の街で好き放題に暴れている。そしてカナは、彼がリヨウの仲間に引き込まれていることを知っていた。

できることなら、カナは彼がそんなことをするのをやめて欲しいと思っていた。

しかし、そうなるとリヨウと対立することになるかもしれない。

流石のカナも、あのリヨウと敵対するのは危険だろうと考えざるをえなかった。

カナは背伸びをして嫌な感じを振り払い、光に満ちた街に一步目の足を踏み出した。

こんなにいい天気なのだ。もしかしたら思いがけない出会いが待っているかもしれないじゃないか……。

「エンタープライス号、発進」！

カナは子供っぽく呟いた。

第四話「青年と少女が宇宙の旅に出る話」 - 3

AM・6:07

カナはベッドの上で目を覚ました。

辺りは暗く、カーテンのかかっている窓から見える空に太陽の姿はない。空は淡いすみれ色を呈しており、夜明けが近いことを告げている。

カナはパリツとした堅いシーツの上で体を動かし、ここが何処かを探ろうとした。

自分の体温のこもった蒲団をどけて上体を動かそうとした時、右腕に鋭い痛みが走った。見ると何重にも包帯が巻かれている。カナは自分が病院にいることを思い出した。

……そうだ、自分は腕をリョウに切られて病院に担ぎ込まれたのだ。

それからカナは、傷を縫う為に病院の中を運ばれていく気配を薄れてゆく意識の中で感じていたことを思い出した。

確か医者は、隣にいた誰かに傷はそんなに深くないし出血も少ないから大丈夫だと言っていた。それから医者は応急処置が良かったのだらうと言った。

最後にクミの声を聞いたような気がしたのだが……気のせいだろう。

そう思ったカナは、自分の足下に突っ伏すようにしてクミが眠っているのを見て吃驚した。どうやらクミの言う通り、情報の伝達速度は上がっているらしい。今度、パソコンの使い方を教えてもらおう。

カナはクミが穏やかな寝息をたてているので、起こさないように慎重にベッドから抜け出した。立ち上がった時に一瞬目眩いがしたが、何とか大丈夫だった。

スリッパがなかったので、直接素足で堅い床の上に降りた。足の裏からしつとりとした冷たさが伝わってくる。カナの意識は次第に覚醒し、冴えていった。

ピアノの高いキーを叩いたような不思議な静けさが病室を満たしていた。夜明け前の空気が白い病室を青く染めている。

カナはクミの頬をそつと撫でた。クミは少し呻いて体を動かした。カナは微笑み、今度は頬に軽くキスをし……ふと、クミのスカートの裾が破れていることに気がついた。

病室を出ると、薄暗い廊下が延々と続いていた。所々には、窓からの光が青白い筋を投げかけている。そんな中、目を引く赤いものがあった。それはカナの病室の前に置かれた長椅子に寝転んだミンクだった。

ミンクは筋肉質な腕を投げ出していびきをかいていた。派手な服はくしゃくしゃになり、化粧の落ちかけたゴツゴツとした頬に無精髭が生え始めている。カナはそんなミンクを見て微笑み、ありがとうございます、と小さな声で言った。

それからカナは何を思うでもなく歩き出した。

病室と同様、廊下も静まり返っていた。

と、パタパタという足音と共に、廊下の遠くの方を白い看護婦の姿が走り去るのが見えた。何処かの病室から呻くような声が聞こえ、病室内がにわかに騒がしくなる。そして、またパタパタという足音と共に看護婦達が駆けつけてきた。

冷えきった病院の中で、そこだけパツと火がついたように慌ただしくなり、誰かが叫ぶ声が聞こえた。

カナは少し離れた暗闇の中からそんな様子を見ていたが、また歩き出した。

廊下で赤ん坊を連れた夫婦とすれ違った。二人は声をひそめて赤ん坊に話しかけていたが、カナに気づくと幸せでたまらないといっ

た笑顔でお辞儀をしてきた。

カナはぼんやりと赤ん坊を見つめていたが、慌てて微笑み、お辞儀を返した。

二人は幸せそうにカナの隣を通り過ぎた。

カナは親子を見送って、しばらく立っていた。

……あの赤ん坊が、幸せな人生を送ればいいのだけれど。

しばらく歩くと、とてもとても静かな場所についた。その一帯には、今まで微かにしていた人の活動の気配というものがまったく感じられなかった。

ある病室の前の廊下に、壁に背をつけて座る一人の男の姿があった。

男は革のズボンに包まれた長い右脚を投げ出し、折り曲げた左脚の膝の上に腕を乗せ、じつと病室のドアを見つめていた。

細かい皺の刻まれた精悍な顔の中で、濡れたようなエメラルド色の瞳が光っている。

男は一瞬でも病室のドアから目を離すと何かが失われてしまうかのように顔を動かさなかったが、カナが近づくとチラリとカナの方に目を向けた。

「……何だ……君か……」

流れるような発音でカウボーイは言った。眠っていない為か声に力はなく、疲れ果てた感じだ。カウボーイは微笑み、カナが無事で良かったと言った。

「この中には……あの女の人がいるんですか？」

カナは病室のドアを見ながら言った。ドアには『面会謝絶』との札がかけられている。カナはパールが、カウボーイを庇ってリヨウに切られた瞬間のことを思い出していた。

「あの人、助かるんですか？」

カナはカウボーイの隣に立って尋ねた。

「難しいところだな……」

沈んだ声でカウボーイは答えた。

「傷は深いし、出血も酷かった。だが、大丈夫だ」

「本当ですか？」

「……多分ね」

カナはカウボーイの言葉が不謹慎だと思ったので気を悪くした。

「恋人なんでしょう？ そんな言い方ってないですよ」

カウボーイは不機嫌なカナの顔を見て少し微笑んだ。

「パールは……ああ、パールというのは彼女のことが……僕の恋人じゃないよ。逆に僕のことを憎んでるくらいだ」

「……そんな……どうしてですか？」

カナが尋ねると、カウボーイは寂しそうに言った。

「それはね、彼女が自殺しようとするのを止めるからだよ」

「自殺？ どうして……」

カウボーイは少し口籠ったが、ふつと息をつくと言話し始めた。

本当は、ずっと誰かに聞いて欲しかったのかもしれない。

「彼女は僕の友人の恋人でね。結婚の約束もしていた。彼は売り出し中の新人のカメラマンで、彼女はモデルだった。幸せそうだったよ。何処から見てもお似合いのカップルだった」

カウボーイは何処か遠くを見るように病室のドアに目を向けた。

「だがある日、二人は事故に巻き込まれた。二人が歩道で立ち話をしている所に車が突っ込んできたんだ。彼は咄嗟にパールを突き飛ばしたが、自分は車を避けることができなかった。即死だった」

「悲しい……事故ですね」

「偶然の事故だよ。事故の理由は運転手の心臓発作によるものだった。そして運転手もまた死んだ。せめてもの救いは、パールが助かったことか……」

カウボーイは少し皮肉っぽく続けた。

「しかし、彼女はそうは思わなかった……それから彼女は突発的に自殺を試みるようになった」

「どうしてですか？」

「さあ、どうしてだろうね。でも多分、彼女は優し過ぎるんだ。彼女は自分が生き残ってしまったことに負い目を感じている」

「……そんなこと……」

「僕だってそう思うよ。あいつがパールを突き飛ばしたのは彼女に生きて欲しかったからだ。しかし彼女は、どうしても自分に生きる価値があるのかわからないらしい。だから自殺を試みて自分に生きる価値があるのか試しているんだ。何度も、何度も……」

カウボーイは自分の隣に座ったカナを見ながら言った。

「彼女にとって自殺行為は自分の価値を測る賭けのようなものだ。だから彼女は誰かがそばにいないと自殺を企てない。病院に運ばれるまでが、彼女の賭けの時間となるんだ」

「どういうことですか？」

カウボーイは少し微笑んだ。花崗岩のような肌の向こうで、翠の瞳が優しく揺れる。

「彼女は死にたいんじゃない。本当は生きていたいんだ。生きていてもいいという証拠が欲しいんだ……君は、奇跡ってやつを信じるかい？」

いきなりの質問に、カナは少し戸惑った。

「あんまり信じません……けど？」

カウボーイは頷いて言った。

「僕も運命とか奇跡とかいう考え方は嫌いだ。だが十二回だよ？」
カナは眉をひそめた。

「何が、ですか？」

「パールがこれまでに行った自殺未遂の回数さ。彼女は手加減というものを知らなさ過ぎる。本当に自分を生と死の境目に追い込んでしまう。一度は高速道路でドアを開けて車から飛び出そうとしたし、ある時は瓶一杯の睡眠薬を飲み干した。この前、浴室の扉に鍵をかけてから手首を切った時にはもうダメだと思ったよ。何せ骨まで見えてたんだから……」

思わず想像してしまい、カナは気分が悪くなった。

しかしカウボーイは続けた。それは何処か自分に言い聞かせているようだった。

「だが彼女は生き残った。生と死のギリギリの境界まで行つて、それでも帰つてきた。僕は信じているんだ、彼女は生きる為にここにいるんだと。そして、彼女がいつかもう一度恋をすることができたら、本当に奇跡だつて起こるだろうと」

カナはじつとカウボーイを見つめた。

「パールさんのこと……本当に愛してるんですね」

カウボーイは少し照れ臭そうに笑った。

「よしてくれ、僕はそんなに偉い人間じゃない。実業家というのは最も人を信用しない人種なんだから……ただ……」

「ただ？」

「誰かの為に生きるつても悪くないかな？　って最近思つてる……」

……八八、年だなあ」

カウボーイの笑顔は、まるで子供のように純粹だった。

「そうだ。この病院に着いてすぐに、君の友人から番号を聞いて君の家に電話をしたんだが、誰もいなかったんだ。もし出かけている先を知っているなら、早く連絡をとった方がいい」

カウボーイの言葉に、カナは少し表情を固くした。

「家には……私の家には誰もいません」

カウボーイはカナの顔を見て失礼なことを聞いたかと尋ねた。

「いいえ」

カナは病室のドアを見た。それから独り言でも言うように話し始めた。

「私の父は七年前に亡くなりました。母はまだ元気ですが家にはいません。いつも若い男と一緒に遊び回っています。別に、悪い人じゃないんですけどね」

カナは少し微笑んで言った。

「ただ……何て言うんでしょうね？　いつも誰かと一緒にいないと

ダメな病気……誰かに尽くしていないとダメな病気……そんな感じの人なんです。いつも何処かのろくでもない男を見つけてきて、バカなくらいにのめり込んで。まあ、すぐに別れちゃうんですけどね。まるで恋をして自分が傷つけられるのを楽しんでいるみたい。きつと、ああいうのを『自虐的』って言うんでしょうね」

カナは薄い寝間着の上から自分の体を抱き締めた。

「そのくせたまに帰ってきたら、私に女らしくしろとか勉強しろとか言っんですよ？ 嫌になりますよね。そう思いませんか？」

返事を期待していたわけではなかった。カナは床に視線を落とし、呟いた。

「私は母みたいにはなりません……バカな女なんかになるつもりはないですから」

「成程ねえ……」

カウボーイが思わせぶりの口調で呟く。自分が笑われたような気がして、カナはキツとカウボーイを睨んだ。

「何か可笑しいですか？」

「いや……ね」

カウボーイは少し微笑みを浮かべてカナを見た。

「君は自分の価値がわかっていないなと思ってね」

「私の……価値ですか？」

「そうだよ、君はかなりつまらないことに自分を縛られてしまっている。もっと自由に、我侭になるべきだ」

「……我侭だつて言うんだつたら毎日言われてます」

言うてから、カナは少し黙り……試すような目でカウボーイを見た。

そしてカナは、自分の『ビジネス』のことを話し始めた。カウボーイは黙って聞いていたが、話が終わるとクスクスと笑い出した。

「何が可笑しいんですか？」

カナが強い口調で言う。

「いや、君の話がとても素晴らしかったのね。君はいい実業家に

なれるよ。保証してもいい」

カナはバカにされているようで面白くなかったが、不意に真剣な目で見つめられて言おうとしていた文句を飲み込んだ。

「君の恋愛に対する考え方は正しいと思う。普通我々は、経済は非人間的な行為であり恋愛は人間的……いや本能的な行為だと考えてしまふ。だがそれは違う」

カウボーイはゆっくりとした口調で言った。

「実際には経済とは非人間的な行為ではない。昔の学者が言っているが、経済は平等に二人の人間の欲望を満たすことができる唯一の仕組みだ。例えば、海辺に住む者が塩を作り、平原に住む者が穀物を作る。どちらも人間にとって必要な物だ。だが、常に両方が充分に手に入るとは限らない。だから両者がそれを交換することによって……海辺の者は穀物を得て、平原の者は塩を得ることによって、お互いの生活を成り立たせる。これが経済の基本理念だ。

勿論、いざこざが起こって誰かが傷つくかもしれない。しかしそれでも、武力によって足りない物を手に入れようとするよりは遥かに犠牲は少ない。経済とは二人の者が生きる為、そしてお互いの安全と自由を守る為に、それぞれ少しずつの努力をすることなんだ。

これは君の言う理想的な恋愛の形と同じだね」

カウボーイの言葉に、カナは知らず知らずの内に頷いた。

「だが、これはあくまでも理想だ。世の中には、ただひたすらに自分の利益だけを追い求めることを経済だと思っている者が多い。自分の欲望を満たす道具だと思ってっているんだね。そしてこれは、恋愛にも当てはまる」

カウボーイは少し笑って続けた。

「現に僕だってそうしてきた。例えばパールのことだって……僕は博愛精神から彼女を助けたわけじゃない」

「どういうことですか？」

カウボーイは少し言いにくそうに言った。

「最初はね。僕もパールのことは嫌いだったんだ。何しろあいつは

恋敵だったからね」

「???? 恋敵？」

カナは目を丸くした。

「実はね、相手の男の方を僕が好きだったんだよ。まあ肉体関係はなかったが……この国はバイセクシャルというのを一方的に否定するから困るね」

少し戯けて言い、カウボーイがペロリと舌を出す。カナはどう反応しているのかわからず、ただ黙っているしかなかった。

「最初は思ったよ。どうしてあいつが助けた命を粗末にするんだ？ それなら最初から、お前が死んでいれば良かったんだってね。あいつは本当に才能ある男だったのに……」

カナが何も言えずにいるのを気にすることもなく、カウボーイは話し続けた。

「恋愛というものには、とてもエゴイスティックな感情がつきまとう。それは経済より遥かに複雑でねじれているので、簡単には理解できないことが多い。例えば、誰かに傷つけられているように見えても実は本人がそれを求めていたり、逆に愛している相手を支配して傷つけることしかできなかったりする者もいる。思うんだが、君のお母さんもそんな人なんじゃないかな？」

「そんな……」

「君の父親は、どうして亡くなったんだい？」

その質問を受けた途端、カナは勢いよく喋り始めた。そこには、少し自慢するような響きがあった。

「私の父は私の家に養子に来て、祖父の始めた会社で働いていました。ある時会社が潰れかけて、それで父は必死に努力して。会社は持ち直したんですけど、父は無理が祟って体を悪くしてしまいました。そしてそのまま……」

そこでカナは少し口を噤んだ。

「……母は死んだ父の遺骸の前で泣いていました。私が悪かった、って……でも」

「夫が死んだのは自分の家の会社のせいだ。そう思ったのかもね」
「そんなこと……」

「だが、それも可能性の一つだ。君のお母さんは夫が死んだのは自分の会社……いや自分の家が無理をさせたせいだと思った。だから今度は自分自身を誰かの為に傷つけさせることを選んだ」

「どうしてそんなことわかるんです？ 違うかもしれないじゃないですか」

「そうだね、違うかもしれない」

カウボーイはじつとカナの目を覗き込んだ。

「私に本当のことはわからない。私はただの部外者だ。だがそれは君も同じだ。君は君の母親とは別の人間だ。だから本当のことなんかわからない」

「でも」

カウボーイは目を伏せたカナの肩を軽く叩いた。

「憎むのなら話を聞いてからにしたまえ。外見だけで物事を判断するのは実業家として最も恥ずべき行為だ。それに、君の母親が本当に男好きなだけだったとしても、それはそれでかまわないと僕は思うね。未亡人になったんだ、死んだ人間に遠慮して人生を楽しまないのは経済的じゃない。例え、君が死んだ父親をどんなに愛していたとしてもだ」

カナは少しムツとして言った。

「私、そんなありふれた人間じゃないです！」
「どうだか？」

カウボーイは病室のドアを見つめた。

「そう言えば、あのリョウとかいう男も……」
「何ですか？」

「……いや、困った男だと思ってね」

カウボーイは笑った。カナは何が何だかわからなかった。

「君はもっと恋をした方がいい」

もう行こうとして立ち上がったカナは、やぶから棒なカウボーイの台詞に戸惑い、足を止めた。

「君は、パールと僕の関係の中で、僕が損をしていると思うだろ？」

「……そうですね」

「最初は僕もそう思ってた。君の言葉を借りれば、自分は経済的に考えて損をしているってね。だけどそれは違うんだ。実際には、僕はパールから多くのものを貰っている。とても多くのものをね……貰い過ぎじゃないかってくらいだ」

「本当ですか？」

「本当さ。彼女に会うまで、僕は本当にエゴイステイックなことを考える男だった。自分がどうすれば有利になるかばかり考えていた。自分がどうすれば愛されるのかばかり考えていたと言ってもいい。

……だがね、最近わかったんだ。本当に経済で儲けたかったら、まず自分から相手に何かを与えた方がいいってね」

「……本当ですか？」

二度目の強い問いかけに、カウボーイは真剣な眼差しで応えた。

「嘘は言わない。まずどんな相手でも愛すること、そうすれば相手は君が思ってもいなかったものを与えてくれるだろう。そしてそれは、表面的で薄っぺらな繋がりなんかじゃなく、確かな絆となつて君を支えてくれる。中には思い上がって調子に乗る奴もいるだろうが、そんな奴は切り捨てればいい。この方法は、そんな人間を短期間で的確に見分けることができる方法でもある。君がまず愛すること、相手は君のことを愛してもいいと思うんだ。大人の社会でも『関係』というのは結局はそんなものだ、みんな怖がってる。だからこそ、まずは愛してあげることだ。そうすれば君は、もっと多くのものを得ることができる。もっとも、それは金銭的な基準で測れるものではないかもしれないがね」

カウボーイは胸の中央の辺りを叩き、少し充血した目でウィンクをした。

「……そうですね」

カナは微笑んだ。

「ああ、そうだ」

カウボーイも微笑んで言った。

「もし君の都合が良ければ、僕の会社に来ないか？ 別に社員になれとは言わないが、君に世界を見せてあげられるよ」

カナは丁重に断り、礼を言って頭を下げた。こんなことをしたのは久しぶりだ。それに大人の男性に正直に礼を言えたのも。

カウボーイはにつこり笑って……あくびをした。相当眠いらしい。カナは笑い、コーヒーでも買ってくると言って歩き出した。

カウボーイはカナの後ろ姿を見送り、また病室のドアを見つめた。
「……早く戻ってこいよ、真珠。ここはまだまだ楽しい所だぜ？」

第四話「青年と少女が宇宙の旅に出る話」 - 4

AM・7:03

夜が明けてから間もないというのに、病院のロビーは非常に混雑していた。

そこを埋め尽しているのは怪我人でも病人でもなく、手にカメラとマイクを持った情報の飢餓に陥った者達……つまりマスコミの大量だった。

どうやら昨夜の一件が知れ渡ったらしい。カナは腕に包帯を巻いていたので早速マスコミに取り囲まれたが、「私、彼と喧嘩して階段から落ちちゃったんですよ！　ねえ、彼ったら酷いと思いませんか！？」と言ったら波が引くようにカナの周りから消えた。

それからマスコミは、昔テレビで見た大学紛争のように病院側の人々と押し合い、ついに建物の外に閉め出されてしまった。

「何なんだか……」

カナは呟き、気を取り直して自動販売機でコーヒーを買おうとしたが、お金を持っていないことに気がついた。

仕方なく、カナはロビーのソファに座って備えつけられたテレビを見ることにした。どうやら昨夜の事件はかなりの注目を浴びたらしく、ワイドショーに呼ばれた数人の評論家が意見を交わしている。

彼等はこの事件のことを『時代の象徴』とか『青少年犯罪の凶悪化』といった言葉で表現していたが、カナは何か違うなと思った。

やがて何処から持ち出してきたのやら、リョウの経歴が写真と共に紹介された。神野涼（20）……無機質な文字が画面上に張りついている。この番組を見ている限りでは、誰の目にも凶悪で手のつけられない不良と映るだろう。やはり何かが違う。

それから数人の者にインタビューした映像が流れたが、皆一様に

ふと、カナはそう思った。だが……何だろう？　何が似ているの
だろう？

カナは背もたれに体を預けて天井を眺めた。

……何だろう？

「何て言うか……貴方達は『特別』な感じよね」

かつて、クミがカナとリヨウについて言ったことがある。しかし、
カナはいまいちピンと来なかった。

裏表がある性格だから？　これは確かにそうだ。リヨウもカナも、
常に複数の顔を使い分けている。それは多分、二人共が世界に違和
感を抱いているから……世界に違和感……うん、これは何かぴった
りとする。

カナはリヨウが、いつも何処か冷めた表情をしていることを知っ
ていた。

あれはいつだったか、スケアクロウのパーティーにつき合わされ
たことがある。バカ騒ぎに疲れてぼんやりとしていたカナは、同じ
くリヨウがイスに座ってぼんやりしていることに気がついた。リヨ
ウはカナの視線に気づくと、カナを見てニヤリと笑った。

それは同類の犯罪者に向けられた、ある種の連帯感を感じさせる
笑みだった。

「まったく、やってられないよな？」

彼の表情を、カナはそう解読した。

……彼は孤独だったのだろうか？

何処か寂しそうだったのは確かだ。いつも他人を見下しているよ
うで……それでいて頼りなさそうな目をしていた。

多分、そこが人を惹きつけたのだろう。

ただし、そんなリヨウも唯一人の者に対しては非常に無防備な表
情を見せることがあった。カナも同じ男には不思議と無防備なまま
で接することができた。

少なくとも、そこだけは似ているかもしれない。

「あ、すいません……」

ソファアの背もたれに軽い衝撃が走り、少し慌てた声がした。カナが振り返ると、そこには車椅子に座った初老の男がいた。どうやら車椅子がソファアにぶつかっただけらしい。

「いいえ。それより、大丈夫ですか？」

カナは立ち上がって男に尋ねた。男は車椅子の向きを変えようとしていたが、腕にも怪我をしているらしく、思うように動かせないでいる。カナが見兼ねて手伝おうとした時、少しかん高い声と連続するスリッパの音が聞こえてきた。

「まったくもう！ お父さんたら無茶するんだから！」

それは小学校高学年くらいの女の子だった。長い髪が頭の上で二つに分けられ、小動物の尻尾のように伸びて跳ねている。

「どうして一人で動こうとするのよ！ 私が押してあげるって言ってるのに！」

「いや、すまないね……だが、レイナに迷惑をかけるのも何だしね……」

「何言ってるのよ。体まだ治ってないんだから！」

少女はブツブツ言いながら車椅子を動かすと、カナに気づいて慌てて頭を下げた。父が御迷惑をおかけしまして、と大人びた口調で言い、父親の方に目を向ける。男は恥ずかしいような照れたような顔で微笑むと、改めてカナに謝った。

その時、カナは男の胸にかかった名札から、彼が『田島』という名字であることを知った。

カナと田島親子は一緒に病院の中を散歩していた。少女一人で車椅子を押すのは大変だろうと思ったので手伝いを申し出たカナは、田島を残して自動販売機にジュースを買いにいった時に、少女から意外な話を聞かされることになった。

「お父さんね……これこだけの話なんだけど。さっきテレビに出

てた男に怪我させられちゃったの」

少女……田島の娘で名前はレイナと言つらしい……は、カナが父親の怪我のことを尋ねるところで答えた。

「さっきのつて……リヨウのこと？」

言つてから、カナはリヨウと言つても通じないかと思つたが、レイナの方はちゃんとわかつたらしい。

「多分それ！ お姉さん知ってるの？ ……はまあいいとして、お父さんね、おとこの夜にあの男に殴られて怪我したんだつて！ 他にもいっぱいいたらしいんだけどね」

「へえ……世間は狭いなあ」

カナは呟き、包帯の上から右腕を押さえた。リヨウが暴力事件を起こしているのは知つていたが、何もあんな人の良さそうなおじさんを襲うことはないではないか。もしかしたら先輩もそれに参加していたら嫌だなあ、と考えていたカナは、レイナが何か言つたので驚いて返事をした。

「ねえ、お姉さんは何が欲しい？ お父さんがお姉さんにもつてお金くれたから」

カナは礼を言つてから、別に喉が乾いていないからと断ろうと思つたが、気を取り直してコーヒーを一本買った。

「ねえ、レイナちゃん？ お父さんは訴えたりするのかな？ そのリヨウって男を」

それから、カナはこうつけ加えた。

「……リヨウだけじゃなくて、その他の仲間も……」

するとレイナは、自分の分のジュースを買いながら不機嫌そうな顔で言つた。

「お父さんたら、訴える気とかほとんどないんだよ？ だつてさあ、あんな酷いことされたんだもん訴えるのが当然じゃない！ それからお金も……賠償金つて言うの？ それも払つてもらつて当然じゃない！ そう思うでしょ？ お姉ちゃんも！」

カナは田島が訴えない方がいいなと思つていたので、レイナの言

葉に少し動揺し、曖昧な返事をした。その時、

「レイナ。このようなことをお金で解決するのはどうかと思うよ？」
突然背後から落ち着いた声がしたので、カナは驚いて缶コーヒ
ーを落としそうになった。

振り返ると、そこには車椅子に乗った田島の姿があった。

「お父さんたら！ お人好し過ぎるんだから！」

レイナが唇を尖らせる。それから彼女は、カナに向かって同意を
求めるように言った。

「お父さんたら、夢みたいなことを考えてるんだよ？ いつかきつ
と、あの時に襲ってきた人達が反省して謝りに来るって。そんなこ
とあるわけないじゃない」

ひどく大人びた口調で、レイナが父親に説教する。

「それくらいわかってよね？ だからお父さんは人が良過ぎるって
バカにされるんだよ。私だってそれくらいはわかってるんだから……
こないだ学校で盗られたハーモニカだって結局出てこないし！」
最後の台詞でいきなり小学生に戻ってしまった娘に、田島は落ち
着いた声で言った。

「だがね、レイナ？ 彼等は若いんだし、そんなに厳しくするのも
どうかな？ 彼等にはまだ長い人生が残ってるんだ、いつかわかっ
てくれるよ。それに、私はもう元気だし……ねえ？ レイナ？」
するとレイナは、唇をギュツと噛み、小さく呟いた。

「その『若い人達』って、お父さんの何分の一の価値があるの？」

「……レイナ……」

田島が困った顔をして、レイナの肩に手を伸ばす。その時、高い
ハイヒールの音と共に、誰かが廊下の角から姿を現した。

「まあ田島さん、ここにいらっしゃったのですか？ それにレイナ
ちゃんも！」

それは細身の体に明るい色合いのスーツを着込んだ、華やかな雰

困気の女性だった。年は二十代後半だろう、長くまつすぐな黒髪の間からピアスをつけた白い耳が見える。

「病室にいらつしやらなかったから心配したんですよ？」

「これは桜田君、じゃなかった桜田課長」

田島が車椅子の向きを変えようとして、苦しそうに体を折り曲げる。桜田と呼ばれた女性は慌てて駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？ 田島さん」

「御心配なく課長、気を使わんで下さい。課長こそお仕事の方は大丈夫なのですか？ 私なんぞの為に……」

「御心配なく、午後から出社いたします」

田島はひたすらに低姿勢だったが、桜田は有無を言わせぬ迫力で田島を押し切った。

「それから課の者も時間が空き次第見舞いに来ると言っております」

「頼みますから気を使わんで下さい……」

「いいえ！ 田島さんあつての第一課ですよ？」

そして桜田は田島の車椅子を押して病室に向かい始めた。

「……私、あの人嫌い」

尚も遠慮する父親を見ながらレイナが呟いた。

「いい人じゃない？」

カナが正直な感想をもらすと、レイナは露骨に顔をしかめた。

「嫌いだよ。だってあの人、死んだママと同じ香水をつけてるんだもん」

それからレイナは田島の後を追って走り出そうとした……が、クルリと向きを変えてカナの方を見た。

「ねえ、お姉ちゃん？」

「何？」

レイナはじつとカナを見つめて言った。

「お姉ちゃん、犯人の男の人と知り合いでしょ？」

それは違う……言いかけて、カナは思い直した。

「……うん、まあ知り合いかな？」

カナは自分の右腕を指で示した。レイナはそれを見て頷いて言った。

「おとといね、お父さんが怪我させられた時に救急車を呼んだ人がいるのね。警察の人の話なんだけど、今までの事件だったら、犯人はそんなことしないらしいの。それはもしかしたら、お父さんが今までで一番酷い怪我をしたから恐くなったのかもしれないけどね」

レイナはしばらく黙ってから言った。

「まあ、それでも私は救急車を呼んでくれて嬉しいと思うわけ。もし、お姉ちゃんが救急車を呼んだ人に会ったら言っと思ってくれないかな？」

「何て？」

カナが尋ねると、

「裁判の時は手加減してあげるって！」

レイナはそう言っただきく手を振り、田島を追って走っていった。「頭のいい子ね……」

カナは呟き、缶コーヒを持ってカウボーイの所に戻ろうとした。その時、カナはロビーに一人の男が立っていることに気がついた。

第四話「青年と少女が宇宙の旅に出る話」 - 5

AM・8：17

それは不思議な男だった。

まるで慌ただしい周囲の時間の流れから切り離されたように、彼は静かだった。

表情も、気配も、瞳の色も……全てが静かだった。

「先輩？」

「……やあ、カナちゃん」

いつもと同じ少し戸惑ったような沈黙の後に、彼ははにかみ、返事をした。

「先輩、何処に行ってたんですか？ 大変だったんですよ、パールさんもカウボーイさんも……リョウさんも……」

「うん……知ってるよ」

彼は呟き、じっとカナを見つめた。

「腕、大丈夫？」

「えっ……だ、大丈夫ですよ！ ほらっ！」

彼の不思議な雰囲気吞まれていたカナは、我に返って慌てて腕を振った。

「そう、それは良かった」

彼は優しく微笑んだ。

それから彼は備えつけのテレビに目を向けたが、カナは彼を見つめ続けた。

彼の体からは潮の匂いと……別の女の匂いがした。

カナは彼が何処か遠くに行ってしまったような気がした。胸に大きな穴が開いたようだ。

……そんなことには慣れっこだ、とカナは考えようとした。

「ドロシーさんは何処ですか？」

「行っちゃったよ。何処かへね」

彼は口元に指を当てて小さく笑った。

「ふーん。やっぱりあの人、人間じゃなかったんだ」

カナはロビーの長椅子に座った彼の隣に腰かけ、わざと強気な口調で呟いた。

「確かに……確かにそうだね」

楽し気に笑う彼の横顔は綺麗だった。

元々端正で繊細な顔立ちだったが、怯えや卑屈さといった影がなくなり、目は輝いている。カナはいつの間にか、彼に見惚れている自分に気がついていていた。

彼は変わってしまったのではない。カナは考えた。多分、これが本当の彼なのだ。まだ弱々しくて不安定だが、彼はやっと自分の殻から抜け出して、新たな一歩を踏み出そうとしている。

……私がそれを手助けできたら良かったのに。そして、彼にとって特別な存在になれたなら……。

でも、彼は私の手の届かない所に行ってしまった。

カナは自分がひどく冷たい所に取り残されたような気がした。

「リョウ……」

テレビを見てた彼が、不意に呟いた。

それは朝のニュース番組で、内容は先程カナが見ていたものと変わらなかったが、カナのいる病院の前から中継が入っていた。

テレビに映っている建物の中に自分がいるというのは、何となく奇妙な気分がする。

「リョウは無事なのか？」

「怪我は酷いけど、そんなに悪い状態じゃないそうです。この病院の何処かにいるはずですよ」

「そうか……」

その時、カナは不意にリヨウの行動の理由がわかったような気がした。

「先輩」

「何？」

カナは彼にもたれかかりながら呟いた。

「リヨウさんは……先輩のこと……好きだったんでしょうか？」

彼の体が一瞬緊張するのが感じ取れた。しばらくの沈黙の後、長々と息を吐ききり、呟く。

「……多分、そうだったんだろうね」

「……愛してたと思います？」

カナは彼の顔を覗き込むようにして尋ねた。

彼は落着いた目でカナを見た。

「そうかもしれないけど……肉体関係を望んだとは思えないな。何て言うか……」

彼は少し考えてから言った。

「何て言うか、リヨウは寂しかったんじゃないかな？ リヨウは誰かを求めてたんだ。でもそれは、愛情とか欲情とかいうものとは少し違うと思う……言にくいけど、わかる？」

「わかります……とても」

カナが言うと、彼は少し寂しそうに笑った。

「そう……でも僕は、それを受け止めてあげられなかった」

「そんなことないですよ」

カナは呟いた。

「あの人は他人を独占することでしか愛情を示せない人です。ただの我侭です」

「でも人は一人では生きられない。誰かと関係しなければ生きていけないんだ。例え、それがどんな方法でもね」

彼は誰かと似た台詞を言った。その台詞は、カナの頭の中に嫌な記憶を呼び起こした。

「先輩も……そう思いますか？」

「何を？」

「人は誰かと一緒にないと生きていけないって」

「……………ああ」

彼はカナの体を優しく抱き締め、囁くように言った。

「さつきね。ドロシーと別れてから、ある人に会ったんだ。その人は口では嫌なことばかり言うけど、本当はとても繊細な人なんだ。

僕はその人を駅まで送ってあげただけけど……………車の中でずっと泣いてたんだ」

「どうしてですか？」

彼のカナを抱き締める力が少し強くなった。

「それはよくわからない。ただ、今まで自分が傷つけてきた人に謝りたいって言うてたよ。今まで自分が愛していたのに心を打ち明けられなかった人に……………って。それからこんなことを言っていた」

彼は一息ついてから言った。

「世界中に愛と平和がもたらされることを……………人と人が本当にわかり合える世界が実現することを」

「変な人……………」

カナは吐き捨てた。それとよく似た台詞にも嫌な気分がつきまわっていたからだ。

「そうでもないよ」

彼は呟いた。

「その人は、ただ他人が恐いだけなんだ。本当は誰かを愛しているのに、素直にそれを伝えることができないんだよ」

「そんなこと……………あるんでしょうか？」

カナは彼の顔をじっと見つめた。彼はカナを見つめ返した。

「僕も人が恐くて仕方がなかった。実を言うと、カナちゃんのことも恐かったんだよ」

「……………それ、本当ですか？」

カナは少し驚き、

「うん、ずっと誰もが恐かった。ずっとね。でも心の中ではわかってたんだ。僕は一人では生きられない。でも誰も僕と共にはいてくれない……愛してなんかくれないと思ってた」

「そんなこと……そんなことないですよ！」
体を起こして彼の目を見つめた。

「……そうだね。そんなこと、ないんだね」
彼はゆっくりと目を閉じ、掠れる声で呟いた。

「何を怖がってたんだろう、僕は……誰かに愛されたかったら、自分から愛せばいいだけなのにね」

そして彼は、何処か遠くの方を見つめるようにして言った。

「カナちゃん、前に君はエンタープライス号に乗りたいてって言うってたよね？」

「ええ。でも冗談ですよ？」

カナが言うと、彼は本気とも冗談ともつかない表情で言った。

「思っただけど……僕達はもう、スタートレックの世界にいるんだよ」

「???? どういうことですか？」

カナの疑問の眼差しに微笑みを返し、彼は穏やかな口調で続けた。
「この世界は星の海……一人の人間は一つの星だ。僕は『僕』という星のたった一人の住人で、星と共に宇宙を旅するんだよ。人間は一人一人、宇宙人だ。皆、自分の星に住んでいる。一人が一つの文化や歴史を持っていて、それぞれ別の考えを持っている。同じ星は一つとしてないんだ。星は旅の途中に別の星と巡り会う。星と星は仲良くなつて交流したり……うまくいなくて戦争をしたり……ただすれ違うだけの時もある。ただ、どんなに仲が良くなっても、どれだけの時を共に過ごしても、二つの星は同じになったりはしない。だって、星は一つ一つ違うんだからね」

「悲しい考え方ですね」

カナは呟いた。

「そうでもないよ」

彼は言った。

「僕達はスタートレックの世界にいる。僕達は自分の星を動かして宇宙を旅するんだ。ワクワクしない？　宇宙は広いんだ。これからどんな星の住人と出会えるかってね」

彼の瞳に綺麗な光がともった。

「『宇宙は最後のフロンティア』だよ……僕らの旅は、まだ始まったばかりなんだ」

カナは少しうつむいて黙っていたが、不意に顔を上げると彼の手を取った。

そしてそのまま彼の手を自分の胸に押しつけた。

彼が一瞬動揺し、困惑した表情を見せる。

「いつか……私の星に来て下さい。正式に御招待します」

彼の手のひらの温もりを感じながら、カナははつきりとした口調で言った。

「そして一緒に旅をしましょう。……宇宙を」

その時、ロビーの横を賑やかに騒ぎながら、田島親子と桜田が通った。

「あの人は」

彼が長椅子から立ち上がった。

「いけません、先輩！」

カナは彼の手をつかんで止めた。

「いけません、先輩。あの人は……」

彼は振り返り、少し戯けた口調で言った。

「謝ってこなくちゃ。リヨウの分もね」

「そんな……」

彼はカナの手を握り返し、穏やかに微笑んだ。

「さっきの言葉、嬉しかったよ。いつかきつと、カナちゃんも僕の星に来てよ。あんまり居心地のいい所じゃないと思うけどね」

彼はカナの制止を振り切り、田島の方に歩き出した。

カナは歩き去る彼の後ろ姿を見つめていた。

彼からは別の女の匂いがした。多分、心もその女のものだ。今更自分が何をしてても無駄かもしれない。カナは自分が交渉の場に出遅れたことを悟った。

しかし。

……しかしだ。

カナの心の中で、何かはまだ諦めてはいけなかったと言っていた。例え不利な交渉であろうとも続けるべきだと。そして交渉が成立すれば、きっと大きなものを手に入れられるだろうとも。

それが何なのか、はっきりとはわからない。

いや、多分簡単な単語で言い表すこともできるのだろうが……言葉にしてしまうと、きつとつまらなくなってしまうだろう。

カナは自分のボキャブラリーの中から、その言葉を探すのをやめた。

「あゝあ、本気で好きになっちゃったかな？」

カナは大きく伸びをして呟いた。

エピソード&プロローグ

OUT OF TIMES

結局、偉そうな自己犠牲精神にのっとなって歩いて行った僕は、田島さんの娘さんが望んだように裁判にかけられることはなかった。リョウが全ての事件の主犯は自分であり、他の者は自分が巻き込んだだけだと言い張ったからだ。

おかげで僕は、しばらく警察の厄介になっただけで釈放された。

僕は田島さんを何度も訪ね、謝罪を繰り返している。娘のレイナちゃんは未だに僕のことを許してくれていないが、田島さんとは結構良い関係を築くことができると思う……多分。

数週間後、パールさんは意識を取り戻した。

十三回目の生還を遂げたパールさんは、僕らを見て「くだらない……」と呟き、少しだけ涙を流した。

カウボーイはリョウの刑事裁判における証人の役を買って出たが、別に重い罰を望んでいるわけではないようだ。結局は周囲の動きに押される形で賠償請求に踏み切った田島さんも、必要以上の請求はしなかった。

カナと僕は、世間で言うところの『恋人同士』の関係を行っている。『行っている』と言ったのは、彼女が最初に条件を出したからだ。その条件は、一年ごとに関係を継続するか終了させるかを話し合う、というものだった。

彼女は自分にとって不利益になる者と付き合っても意味がない、どちらか一方でも好きでなくなったらすぐさま関係を終了させるべきだと言った。でも絶対に私と付き合って損はさせませんから、と言ったカナの照れたような表情は、とても可愛らしかった。

僕はこれまで人と関係することを恐れていたが……彼女との関係だけは壊したくないと思っている。

僕はカナに、努力する、と答えた。

先輩は、努力する、と言ってくれた。

私はこれまで数人の男性にこの条件を出したことがある。でも皆、うるさいことを言う女だと思ったのか、真剣に取り合おうとはしなかった。酷い時には、それ以上話をするともなく別れを突きつけられたこともあった。まあ、その時はそんな男と長く関係を続けなくて正解だったって思ったけど。

私としては先輩との関係はこれまでになく真剣なものだったから、関係を悪化させる可能性のある条件を出すのには少しためらいがあったのだけれど、これだけは譲れない条件だった。そして先輩は、私の出した条件に少し戸惑いながらも、照れたような微笑みを浮かべて、努力する、と言ってくれた。

「うまくできるかどうかかわからないけど、努力するよ」

……と。

そう言った時の先輩の表情は、本当に綺麗だった。

リヨウは刑務所の中で退屈しない生活を送っている。僕を含めて数人の者がひっきりなしに面会に来ているからだ。

この前はジンの姿も見た。彼は毎回、リヨウに会ってもらえないらしいが、それでも懲りずにやってきている。一度話しかけた時、顔の傷は大したことはない、と言っていた。その瞳からは僕に対する敵意は消えていなかったけれど、もう、僕たちが対立するようなことはないだろうと思う。

カナの友人のクミという女の子ともよく会う。彼女のことは一度だけ見て知っていたが、再会した時は見違えるほど綺麗になっていたので驚いてしまった。彼女は差し入れのお菓子の詰まった袋を握り潰しそうになりながら、お願いだからカナにだけは自分がここに來ていることを言わないで欲しいと言った。

僕はカナから、しばらくはクミに私が彼女の行動を知っているこ

とを言わないでいて欲しいと意地悪な表情で頼まれていたので、黙って同意しておいた。

私は自分の我侭を押し通す為にあんな条件を出したわけじゃないただ、やっぱり恋愛っていうものは、どちらか一方から与えるだけではいけないと思う。

私は先輩にできる限りのものを与えようと思う。先輩の方から私との関係を終了させると言い出す可能性もあるんだから。

そうそう、私は春休みを利用してアメリカに行こうと計画している。できれば先輩にも一緒に来て欲しいけど……そうすると、クミはダメだろうな。まあ、そんなに気にする必要もない。お互いに、もうそろそろ独り立ちしてもいい頃だと思っし、彼女とは世界中の何処にいてもネットを通じて話ができるんだから。

……母とは少しずつ話し合う機会を増やしていこうと思っている。

リヨウと僕は短い面会時間の中で取り留めのない話をする。最近の街の様子とか、流行っていることとか……カナのこととか……やはり女の子のことについては彼の方が色々詳しいようだ。

裁判の時、リヨウは田島さんやその他の被害者の人達に向かって頭を下げて謝った。いつになるかわからないが、必ず償いをする。リヨウについては様々な意見が飛び交っているが、僕は彼のことを本当に格好いい男だと思っている。

……きっと、これからも。

面会時間が終わって僕達が別れる時、僕は決まって指で銃の形を作り、リヨウを撃つ真似をする。リヨウは笑って心臓の辺りを押さえ、撃たれた真似をしてみせる。

僕らにはそれで十分だ。

僕らの旅も、まだ始まったばかりだ。

田島亮介は数杯目のグラスを少しずつ傾けながら、隣に座っている男を横目で見た。

三年前に妻が亡くなつて以来、幼い娘と二人暮らしになった田島は、仕事が終わったらまっすぐ家に帰るようにしている。しかし今日は何となく、昔馴染みの飲み屋に顔を出してみることになったのだ。隣の男は別の町から出張して来らしい。早い時間から浴びるように酒を飲み、誰彼かまわず当たり散らしていた。

「わかりますか？　こんなことじゃダメなんですよ！　こんなことじゃ、この国は本当にダメになってしまう」

田島はあまり真剣に男のことを相手にしていなかったが、遂に手に持ったグラスを振り回して割ってしまった、その破片で左の頬を切ってしまったのを見て、仕方なく男の体を支えて声をかけた。

「どうしたつていんです？　ほら、血が出る」

田島は店の者に掃除用具と医療用具を持ってくるように頼むと、男を椅子に座らせた。

「ダメなんですよ……こんなことじゃダメなんです」

酔いの為か、男はさして痛みを感じている様子もなくブツブツと呟き続けている。

「何がダメなんです？」

田島は男の三日月形に裂けた頬の切り傷を見ながら尋ねた。運良く薄皮一枚を切り裂いただけのようだ。これならじきに塞がるだろう。

「僕はね、信じてるんですよ。人と人との間には確かな信頼関係が必要だつて……いや、違う。そうあるべきなんですよ。人間というのはね」

「それは私も思いますね」

田島は店員を待ちながら呟いた。

「幾ら社会が情報化されたと言っても、結局は社会というものは人

間が動かしているんですから……」

「違う！ そうじゃないんだ！」

男は突然叫び出し、血走った眼で田島を睨みつけた。

「そうじゃない。僕が言っているのはそんなものじゃなくて、もっと根幹的な繋がりなんだ。本当にお互いを必要とする関係、二つに別れた磁石が引き合うような……打算や計算のない関係が僕らには必要なんだ」

最後の『僕ら』は、『僕』に置き換えても良かったかもしれない。

男は掠れた声で喋り続けた。

「僕らには……本当の心の平安が必要なんだ。一時しのぎの快樂や、金で買ったような愛情なんかあつてはならないんだ」

「ごもつとも、ごもつとも……」

田島は少しうんざりしながら相槌を打った。

「貴方の言いたいことはよくわかりますよ。私にも小さな娘がいますがね。やはりしっかりとした人間関係の中で育て欲しいと思いますよ」

しかし男は田島の話の聞いている様子もなく、うつむいて低く呟き続けていた。

「僕だって人並みの恋愛や人生を楽しみたいんだ……それなのにあいつらときたら僕のことをまるで珍しい動物か何かのように見やがって……僕はお前らみたいな奴らと親密な関係なんか持つ必要はないんだ。お前らが僕のことをどう思っているか知らないが、僕だってちゃんと人を愛せるんだ。ただお前らと関係を持ちたくないだけなんだ。いつか誰かが現れるんだ……誰かが。そして僕らは完璧な関係を築くんだ……完璧な……」

男はそこまで言って、急に怒りに顔を歪めた。そして今までの考えを振り払うように腕を振り回した。田島が慌てて腕を避ける。

「畜生！ どうして、どうして僕らは誰かを必要としなければなら
ないんだ！？」

男は叫び、立ち上がり……バランスを崩して床に倒れた。

「……まったく……」

田島は男を床に座らせた。

「何を言っているのかよくわかりませんが、人と人との関係なんて妙な縁で繋がっているものですよ。私の死んだ女房とは見合い結婚でしたが、結構うまくいっていましたし……まあ、こんなことは貴方にはどうでもいいことですかね」

田島は店員が救急セットを持ってきたのを見て、ではお大事に、と言って店から出ようとした。

「……なあ、どうして人は誰かを必要とするんだろうな？」

小さな声で男が呟いた。

「さあ、それが人間ってものなんじゃないですか？」

田島は振り返って答えた。

「それに、貴方がどう思っているかは知りませんが、私はまだこの世界に失望しきってはいないんですよ」

店員は男の傷の手当てをしようとしたが、冷たく敵意を感じさせる目でじろりと睨まれたので、仕方なく割れたガラスの掃除にとりかかった。

男は床から立ち上がると、よろめきながら近くの席に座った。そしてコートのポケットから紙切れを取り出した。

そこには、『明日、午前十時に駅前で。K&K』と書かれていた。「僕だつて、運命的な出会いってものを信じてるんだ……」

男は呟き、金を払って店を出た。

夜空には月もなく、雨が降りそうだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1609d/>

僕達の惑星へようこそ

2010年10月8日11時58分発行